

令和元年度

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」

# 研究開発実施報告書・第1年次

令和2年3月

岡山県立岡山城東高等学校

地域との協働による高等学校教育改革推進事業【グローバル型】 全体構想概念図  
**「ステージは『世界』だ!」～岡山発グローバルリーダーの育成～**  
 岡山県立岡山城東高等学校



コンソーシアム 岡山県内の関係機関と連携しながら、県全体をフィールドとして生徒が活動



これまでの取組 (スーパーグローバルハイスクール H26～H30)

**成果**

- ・課題研究に必要な基礎的スキルの定着
- ・チーム力やプレゼン能力の向上(異力の統合)
- ・海外研修等による異文化理解の深化
- ・思考力や言語活動を重視した授業改善

**課題**

- ・地域の理解や**地域との関わり**
- ・課題研究と**学類の強み・専門性**との関連
- ・英語力強化の取組と**全校・他校への普及**
- ・課題研究等で得られた知見を生かした**自主的な実践**

## 地域密着の課題研究



GLOBAL I スキル学習 (4月)



GLOBAL I 課題研究



GLOBAL I 企業訪問 (株式会社中国銀行)



企業訪問 (社会福祉法人旭川荘)



企業訪問 (株式会社山陽新聞社)



講演会「岡山の課題を身近に考える」



「地域と連携した『高校の魅力化』フォーラム」

## 地域密着の課題研究



GLOBAL II 課題研究



GLOBAL II 課題研究



GLOBAL II 課題研究



GLOBAL II 課題研究フィールドワーク(奉還町商店街)



GLOBAL II 2019年度全国高校生フォーラム



「未来航路課題研究発表会」(岡山操山高等学校)



GLOBAL III 課題研究発表

## 地域密着の課題研究



G20 岡山保健大臣会合



研究成果発表会（愛媛県立松山東高等学校）



課題研究発表会



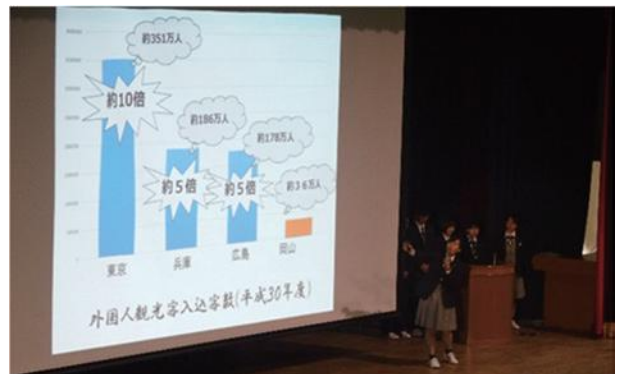
GLOBAL I 課題研究ステージ発表



質疑応答



GLOBAL I 課題研究教室発表



GLOBAL II 課題研究ステージ発表

## 異文化交流の深化



海外文化体験研修（カナダ）



海外文化体験研修（オーストラリア）



学類研修 韓国 慶南外国語高校との交流



学類研修 マレーシア SMK Infant Jesus Convent との交流



学類研修 マレーシア 国立マラヤ大学との交流



学類研修 台湾 台湾師範高級中学校との交流



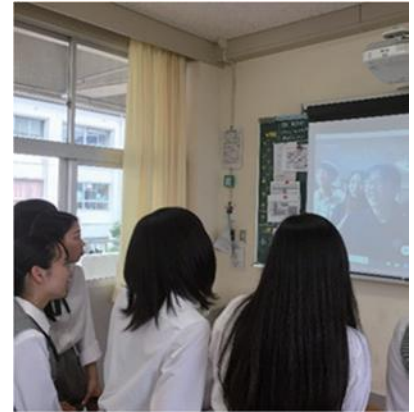
海外修学研修 イギリス（平成 30 年度）



上海第一中学校受け入れ



ドイツからの留学生受け入れ



スカイプによる韓国慶南外国語高校との交流

## 自主性・自律性を育成する取組



音楽学類 中庭コンサート 城東チャイルドセンター園児招待



岡山表町商店街「岡山のふるさと来て！見て！体験！さと×まちフェスタ」



ジョトスタ 小学生学習支援



リーダー研修会

## 巻 頭 言

### 岡山発グローバルリーダーの育成を目指して

校長 前川 隆弘

岡山城東高等学校が、文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業【グローバル型】」の指定を受けて一年が過ぎようとしている。ここに初年度の取組概要および成果と課題を報告できることを大変うれしく思うとともに、この事業の推進が、本校の教育をますます充実させ、新たな学びのスタイルを全国に発信するものになると期待もしているところである。

本校は、昭和 62 年に「普通科総合選択型」の新しいタイプの高等学校として開校された。「進取・協同」を校訓とし、県下各地から、また海外からも個性豊かな生徒が集い、自由で明るい校風のもと、自主的・自律的な生活を送っている。本校のミッションは、生徒一人ひとりの多彩な才能が開花する教育を行い、グローバル社会や地域コミュニティ等において、リーダーとして必要な資質・能力を備えた人材を育成することである。そのため、単位制により、多様な知的好奇心に応える幅広い選択科目を開設している。また、2 年次から、四つの学類（人文社会・国際教養・音楽・理数）にわかれ、学類コア科目、学類専門科目、学類研修等で、より専門性を深める探究的学習が進められている点も本校の大きな特色である。

本校は、平成 14 年度から 3 年間「SELHi 開発研究校」に指定された。さらに、平成 24 年度から「ステージは『世界』だ！」というグローバル人材育成の取組を開始し、文部科学省事業「英語力強化の拠点校」を経て、平成 26 年度には「SGH（スーパーグローバルハイスクール）」に指定され、昨年度までの 5 年間、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力を備えた人材を育成する研究開発を行い、一定の成果をあげてきた。一方で、地域でのフィールドワークを含む地域密着の取組が少なかったこと、異文化理解のための英語活用能力を十分に身に付けさせることができなかったこと、地域社会の持続的な発展に積極的に参画しようという態度の育成と活発な実践には至らなかったことが課題として挙げられていた。

そこで、このたびの「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」では、SGH で培ったノウハウを活かして、「岡山発グローバルリーダーの育成」をスローガンとして掲げることとした。全県学区の本校にとっての地域とは、学校がある地域であり、個々の生徒が住んでいる地域であり、岡山県全域でもある。持続可能な郷土岡山の実現に向けて、グローバルな視点を持ちながら地域に根差し地域社会を支える人材、郷土や日本への貢献意識を持ちながら国際社会で活躍する人材を育成することが、本校の本事業における研究開発の目標である。そのために、「地域密着の課題研究」「異文化交流の深化」「自主性・自律性を育成する取組」の三本柱を設定し、「創造的・批判的思考力」「高度な英語運用能力」「グローバルな視野と多様性の理解」「自主的・自律的な行動力と社会貢献意識」を身に付けさせる取組を行い、PDCA サイクルを回していく計画を立てている。本冊子には、初年度の取組概要等をまとめている。お目通しいただき、忌憚のないご意見やご助言をいただければ幸いである。

本事業は、多くの方々のご支援があって成り立っている。この場をお借りして、コンソーシアムを構成していただいている岡山県、岡山市、岡山県経済団体連絡協議会、岡山大学、岡山県教育委員会の関係者の皆さま、運営指導委員の皆さま、その他本事業に関わっていただいているすべての皆さまに、心から感謝申し上げますとともに、今後とも、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



## 目次

第1章	令和元年度研究開発実施報告	1
	1. 研究開発の概要	
	2. 実施体制	
	3. 令和元年度の研究開発実施計画	
	4. 成果の普及及び評価・検証	
第2章	地域密着の課題研究	
第1節	「GLOBAL I」の実施	4
	1. シラバス・年間指導計画の作成と共有	
	2. 実施概要	
	3. 講演会の実施	
	4. 今年度の成果と課題	
第2節	「GLOBAL II」の実施	13
	1. シラバス・年間指導計画の作成と共有	
	2. 実施概要	
第3節	「GLOBAL III」の実施	18
	1. シラバス・年間指導計画の作成と共有	
	2. 実施概要	
第4節	課題研究発表会	23
第5節	異文化交流の深化	25
	1. 先進的な取組を取り入れた英語の授業の実施	
	2. 海外研修の充実（海外文化体験研修）	
	海外研修の充実（学類研修）	
	海外研修の充実（H30海外修学研修の実施）	
	海外研修の充実（R1海外修学研修の計画）	
	3. 海外姉妹校・提携校等の受け入れ、外国人留学生の受け入れ	
	4. 岡山大学外国人留学生との交流	
	5. 今年度の成果や課題、次年度の取組	
第6節	自主性・自律性を育成する取組	39
	1. 社会貢献活動の実施	
	2. ボランティア活動の実施	
	3. 生徒会活動や委員会活動の活性化	
	4. 今年度の成果や課題、次年度の取組	
第7節	カリキュラム開発	46
	1. カリキュラム・マネジメントの推進	
	2. 「GLOBAL I」の評価	
	3. アカデミック・インターシップの状況	
	4. 指定2年目の総合的な探究の時間のプログラム開発	
	5. 今年度の成果や課題、次年度の取組	
第8節	各種委員会の開催	54
	1. 運営指導委員会・コンソーシアム会議	
	2. 教育改革推進委員会	
第9節	広報活動	59
第10節	各種資格試験の結果	60
第11節	学校訪問	61
生徒報告	「GLOBAL I」	62
	「GLOBAL II」	66
	「GLOBAL III」	70
関係資料	教育課程表	72
	学校自己評価アンケートまとめ	74

## 第1章 令和元年度研究開発実施報告

### 1. 研究開発の概要

本校独自の「学類コア科目」と「総合的な探究の時間」を教科横断的に連動させ、地域と連携して専門性の高い課題研究に取り組む。並行して、様々な海外研修、留学生受け入れや英語教育の改善により、多様性の理解や実践的英語力を育成することで、グローバル人材の育成カリキュラムを開発する。

#### (1) 目的・目標

郷土岡山の創生のために、次代を担う多様性を理解したグローバル人材が求められている。そこで、海外や地域社会で活躍する人々から文化や社会の多様性やグローバル課題について学び、地域課題の解決に向けた地域でのフィールドワークを重視した課題研究に取り組む。それを通じて、将来グローバルリーダーとして国際社会で活躍したり、グローバル人材として地域社会を支えたりする、自主的・自律的に行動できる人材を育成する。

#### (2) 現状の分析と研究開発の仮説

##### (ア) 現状の分析

本校では、平成26年からSGH事業において、「課題研究」「学類コア科目」「海外体験」を柱として、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力を備えた人材を育成する研究開発を行った。生徒、教員及び卒業生への調査から、生徒は課題研究で育成したい基礎的な資質・能力を概ね習得し、教員も思考力、判断力、表現力を育成する協同的な活動を重視した授業実践を各教科で行うようになった。また、海外体験が高校卒業後のキャリア形成意識に有為に働いていることも明らかになった。

一方、課題として、地域でのフィールドワークを含む地域密着の取組が少なかったこと、異文化理解のための英語活用能力を十分に身に付けさせることができなかったこと、地域社会の持続的な発展に積極的に参画しようという態度の育成と活発な実践には至らなかったことなどが挙げられる。

##### (イ) 仮説及び期待される効果

仮説1 「課題研究」と学類を特長付ける「学類コア科目」等とを教科横断的に関連付けた新しい学びのカリキュラムを開発することによって、生徒の創造的・批判的思考力を育成することができる。

仮説2 「異文化交流」を深化させるため、英語運用能力を高度化する指導法の開発と各種海外研修及び交流事業を関連付けることによって、生徒の高度な英語運用能力、グローバルな視野と多様性の理解を育成することができる。

仮説3 学類の特長を生かしたボランティア活動の在り方等について、生徒主体の企画等も含めて研究することにより、生徒の自主的・自律的な行動力を育成するとともに社会貢献意識の醸成につなげることができる。

#### (3) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画

##### (ア) 課題研究

##### (a) 「教科・科目」と「総合的な探究の時間」との関連を図った指導の展開

本校独自の学類ごとに設定した「学類コア科目」等で学類での専門性を高めるとともに郷土岡山の特色に関連した探究課題を発見させ、それを総合的な探究の時間における課題研究に関連付ける。

##### (b) 地域との連携の在り方

1年次での企業訪問（全員参加）や県主催の企業説明会等を通じた学習をもとに、2年次で地域におけるフィールドワークを行い、地域社会の課題の発見につなげる。

##### (c) 学習形態の工夫

1年次生・2年次生における課題研究をグループ研究で行い、生徒同士のコミュニケーションが活発に行えるようにする。また、全体発表会や論文やレポートの作成等により、創造的思考とそれを支える論理的思考が高められるようにする。

- (イ) 異文化交流の深化
  - (a) 高度な英語運用能力の開発
    - ・ 3年間の指導過程・指導内容の策定
    - ・ 指導法の改善（校内研究授業：年3回、授業公開：年3回）
    - ・ 評価方法の開発
  - (b) 海外体験・国際交流の充実
    - ・ 海外文化体験研修（カナダ・オーストラリア）【単位認定】、海外学類研修（韓国、台湾、マレーシア）、海外修学研修（イギリス）【単位認定を検討中】
    - ・ 長期留学生受け入れ及び姉妹校との交流の発展（韓国：慶南外国語高等学校・金海外国語高等学校）

#### (4) カリキュラム・マネジメントの推進体制

- (ア) 推進体制
  - (a) 課題研究：カリキュラム開発係が中心となって、地域連携係と協働で学習活動の内容及び進め方について開発を行う。
  - (b) 異文化交流の深化：国際交流係と外国語教育推進係が協働で学習活動の内容及び進め方について開発を行う。
- (イ) カリキュラム・マネジメントの視点
  - (a) 実施状況の評価・改善を図る方策
    - 月単位～年単位の期間の中で、各係単位から推進委員会までが定期的に進捗状況を確認できるようにする。
  - (b) 必要な人的又は物的な体制を確保し、その改善を図る方策
    - ・ 県内全域との連携による学習を支援するため、地域協働学習実施支援員の協力を得ながら、地域連携係が、コンソーシアムとの連絡・調整を行う。
    - ・ 海外研修の新規企画など海外との交流に係る業務について、海外交流アドバイザーの協力を得ながら、国際交流係が、連絡・調整を行う。

## 2. 実施体制

### (1) 研究開発に係る校内の実施体制

「岡山城東高等学校教育改革推進委員会」

(コアメンバー) 校長、副校長、教頭、事務部長、主幹教諭、教務課長、学類主任（人文社会・理数・国際教養・音楽）、年次主任

(必要に応じて出席するメンバー)

カリキュラム開発係主任（教務課長補佐）、地域連携係主任（生徒課長）、国際交流係主任（国際課長）、外国語教育推進係主任（外国語科研究主任）、情報発信係主任（総務課長）、記録係主任（図書課長）、会計係主任（事務室）

### (2) 研究開発に係る校内の係

係 構 成	
カリキュラム開発係	教務課長、指導教諭、学類主任
地域連携係	生徒課社会貢献係、学類主任、年次事業担当、地域連携担当
国際交流係	国際課
外国語教育推進係	外国語科、英語科指導教諭
情報発信係	総務課

記録係	図書課（報告書の作成）、進路指導課（進学先集約）、事務室（事務記録）
会計係	事務室

### 3. 令和元年度の研究開発実施計画

- ・1年次に開設する「GLOBAL I」では、教科横断的なリサーチスキルの学習や、SDGsの視点を活用して、グローバルな地域課題にグループで取り組む課題研究のカリキュラムを開発・実践する。
- ・「GLOBAL I」ではコンソーシアムと連携しながら、県内企業訪問を実施する。
- ・学類コア科目等と2年次に開設する「GLOBAL II」を連動させた課題研究の指導方法を開発し、教材開発と校内体制の確立を図る。あわせて企業や地域に出かけるフィールドワークの在り方について研究を行う。
- ・課題研究や異文化交流に、大学等で行なわれている公開講座・講義や研究室訪問を活用することを研究・実践する。
- ・課題研究発表会及び成果報告会を実施し、他校や地域へ研究成果を発信する。
- ・GTECの成績分析をもとに、高度な英語運用能力を育成する授業展開について研究・実践する。
- ・既存のCAN-DO リストをリスニング、スピーキング重視のCAN-DO リストに改善し、生徒の英語力及び指導の在り方について評価・検証を行う。
- ・本校で企画・実施する海外修学研修における単位認定の在り方について研究する。
- ・4つの学類（人文社会、理数、国際教養、音楽）それぞれの特長を生かしたボランティア活動、リーダー育成に繋がる生徒会活動の活性化、高大連携の在り方（アカデミック・インターンシップ等）を研究する。
- ・本事業における取組について、本校のホームページに掲載し、広く普及する。
- ・本事業の研究成果をまとめ、報告書を作成し配布する。

### 4. 成果の普及及び評価・検証

- ・課題研究中間発表会、課題研究発表会及び成果報告会を開催する。
- ・事業の評価・検証を行い、報告冊子の作成やWEBページを活用して成果の普及を行う。
- ・生徒の到達度等を測る各種調査の実施。（GPS-Academic、独自作成質問紙調査、教員意識調査、卒業生調査）
- ・運営指導委員会、コンソーシアム運営会議により、事業の進捗状況の確認と成果の評価・検証を行う。

## 第2章 地域密着の課題研究

### 第1節 「GLOBAL I」の実施

#### 1. シラバス・年間指導計画の作成と共有

##### (1) 「GLOBAL I」の基本的方針

科目「GLOBAL I」は、1年次全員を対象のグループ研究とし、「総合的な探究の時間」(1単位)において課題研究に必要なスキル学習や演習に取り組む。昨年度まで地歴、家庭科の授業で行っていた「GLOBAL I」3単位を本年度から大きく変え、総合的な探究の時間、LHRの時間を利用しての課題研究とした。1学期は研究発表に必要な基礎的な技術を学ぶ「スキル学習」、2学期は「SDGs 持続可能な世界を実現するための17のゴール」の中から興味関心に合わせてグループを結成し、それに関する研究を行った。

生徒が協力しながら共通の課題について情報収集し、解決策を研究するための指導助言は、主にクラス担任の活動支援によって行うことを基本的な方針とした。

##### (2) 生徒の状況と「GLOBAL I」の方向性

情報機器や、インターネットの利用が低年齢化する中、幼いころから様々なデバイスを使い慣れている生徒たちは、情報収集、発信、共有の能力は高く、授業においてもインターネットを使い調べることには十分対応できている。その一方で、手軽に得られた情報のみで端的な結論を出してしまい、そこからさらなる課題を見出して情報を基に自分なりの見解を持つとする姿勢が乏しい。複数の情報をどのように複合的に理解・活用していけばいいのかということ、加えて、情報の正誤の判断や著作権の理解も不十分で、正しく引用することにも大きな課題があった。技術面では、プレゼンテーションソフトや文書作成ソフト、表計算ソフトの使用が初めての生徒も非常に多く、苦勞をしていた。様々な用事がスマートフォン1台で可能な昨今、家庭にパソコンがない生徒も少なくないため仕方がない状況ではあるが、こういった基礎知識や技術の学習の重要性を再確認できる機会となったかもしれない。

そこで「GLOBAL I」前期では、教科の特性を活かした「スキル学習」を研究活動に先立って行い、基礎的な知識技術を習得することとした。プレゼンテーションソフトの使用の仕方、文献やインターネット上の情報の引用の仕方、著作権について学習させた。複数の教材を準備したり、クラスを合体させて授業を持ちまわったり、教員自身もそれぞれ自分の教科での強みを活かして必要な知識技能をお互いに共有し合うなどして実施した。

後期の課題研究においては、例年情報収集に終始してしまいがちな授業時間を、可能な限りグループでのディスカッションに費やすことができるように配慮した。情報収集等の作業は必ず家庭や授業外で行うことを指導し、事前に目を通した参考文献、必要な情報をプリントアウトした用紙等を「GLOBAL I」の時間に持ち寄ることで、コンピュータ室や図書館ではなく教室におけるディスカッションや資料作りに重きを置いた。

各教科との連携も行った。情報の授業において「GLOBAL I」の時間数を補うための取組を行ったり、夏季休業課題として数学科・情報科が「グラフコンクール」に応募する作品作成を課したりすることで、表やグラフを効果的に使用し説得力をもって伝えることのできる表現力を生徒たちが身に付けられるようにした。研究を進めるにあたり、岡山大学の大学生・大学院生7名にティーチング・アシスタント(TA)として協力を依頼し、研究の方向性や研究手法、資料作成の方法などについて指導を仰いだ。

「SDGs 持続可能な世界を実現するための17のゴール」からテーマを一つ選択し行う課題研究を通じては、自分たちと岡山、世界とのつながりを意識させ、自らが当事者となって問題解決に臨む姿勢を身に付けさせ、地域から世界に、世界から地域へと視野を移し、グローバルでローカルな視点や意識を常に持つことのできる人材を育成しなければならない。他者の意見を鵜呑みするのではなく、多面的、批判的に解釈し、積極的に質問や意見をいうことで質の良い共有とさらなるアイデアが生まれるような姿勢を持てるようになってもらいたい。「GLOBAL II」に向けて更なる検討を重ね、改善していきたい。

## 2. 実施概要

### (1) 研究における目標

科目「GLOBAL I」においては、「SDGs 持続可能な世界を実現するための17のゴール」からテーマを選択し、岡山、世界とのつながりを意識し、自らが当事者となって問題解決に臨む人材を育成することを目標とする。世界に目を向けるだけではなく、自分たちの場所ではどうなのか、その解決方法を世界で見出すなど、地元と世界両方に目を向ける必要がある。また、研究を通して、創造的、批判的思考力を養うことも目標とされる。段階としては「①自らの意見を述べることができる」「②他の意見を受け入れることができる。またその雰囲気づくり。」「③相手の意見を受け、批判的に考えて自らの意見を言うことができる」という3段階が考えられる。

### (2) 進取協同の実践

5月上旬の宿泊研修で決定型、自由型、ディベート型の3種類の討論を行った。決定型自由型では付箋や黒板を用いてKJ法による討論を実践した。ディベート型では学校生活にかかわるテーマをクラスごとに設定し、肯定側と否定側に分かれて持ち時間を決めての討論法を体験した。事前に生徒討議係を召集し、テーマ決定の趣旨や目的を共有しながら、生徒主導のより良い学校づくりをめざすと同時に課題研究にも必要となってくる批判的思考力を養いたいというねらいがあった。この段階では相手の意見を受けて批判的に述べるまでには到達しなかったが、討論の技術や手法を知り、挙手をして途切れず意見を述べ他の意見を受け入れること等、躊躇なく話し合えるクラスづくりができた。

### 宿泊研修のクラス討議テーマ例

議題	議題選定の理由
クラスに必要なのは個性よりも協調性である。	今回のテーマは「問を生きる」である。その中でクラスにとって必要なものは何かという「問」が浮かんだ。だから1年間一緒に過ごすクラスメイトとこのことについて考えたいと思った。これをもとにしてクラスの団結力、絆をより深めていきたい。「問」について究めるだけでなくこのような話し合いの場を通して交流を深めたい。
城東での電子辞書の使用を許可すべきだ。	すべての情報がデジタル化した現代社会では、重くかさばり、通学の重荷になる紙辞書ではなく、電子辞書を使うべきである。あらゆる辞書を取めた電子辞書の使用許可は、学習効率を上げると考え、この議題に決定した。
思いはSNSを使わず、直接伝えるべきだ。	最近、SNSなどのコミュニケーションアプリが発達し、直接誰かに思いを伝えることが減ってきている。しかし、文字だけでは伝わらないことも多くある。それについて討議し、深く考えたいと思ったから。
友人関係においては広く浅くつきあうべきである	高校生活のスタートを切り、「どうやって友達を作ろう」と考える機会が増えた。このテーマについて話し合うことで、今夜の友人関係の発展と向上につなげることができると思い、この議題に決定した。

### (3) スキル学習

宿泊研修後、1学期は各教科の教員が順に授業を行い、数研出版の「課題研究メソッド」を活用して研究に必要な基本的なスキル学習を行った。

日付	1組	2組	3組	4組	5組	6組	7組	8組
5/31	PP基本操作 (第1PC)	PP基本操作 (第2PC)	研究手法・文献調査 (合併教室)		統計(標準偏差・偏差値) (各HR)		仮説・実験・検証ガイダンス (各HR)	

6/18	研究手法・文献調査 (セミナー室)	統計(標準偏差・偏差値) (各HR)	仮説・実験・ 検証がイダンス (各HR)		PP基本 操作 (第1PC)	PP基本 操作 (第2PC)
6/25	統計(標準偏差・偏差値) (各HR)	仮説・実験・検証がイダンス (各HR)		PP基本 操作 (第1PC)	PP基本 操作 (第2PC)	研究手法・文献調査 (合併教室)
7/9	仮説・実験・検証がイダンス (各HR)	PP基本操作 (第1PC)	PP基本操作 (第2PC)	研究手法・文献調査 (セミナー室)		統計(標準偏差・ 偏差値) (各HR)
7/16	研究倫理・インタビュー(各HR)					

研究手法・文献調査：研究手法の種類と文献調査の仕方（地歴科教員担当）

統計：偏差値の求め方を例にとった統計法の紹介（数学科教員担当）

仮説・実験：仮説を立てたうえでの実験、検証（理科教員担当）

PowerPoint基本操作：見やすく分かりやすいスライドの作り方（情報科教員担当）

研究倫理・インタビュー：結論の導き方やインタビュー法（国語科教員担当）

#### （４）企業訪問

地域課題に取り組む企業の実態や、世界市場で活躍する企業戦略等を学習するとともに、自分と社会との関わりについて考えを深める契機とするため、1年次生全員を対象に企業訪問を実施した。

	企業名	訪問日	参加生徒数
1	中国銀行	7月18日	40名
2	旭川荘	7月22日	42名
3	山陽新聞	7月24日	42名
4	カバヤ食品	7月30日	86名
5	両備ホールディングス	8月16日	40名
6	大原美術館	8月16日	36名



【中国銀行訪問の様子】

それぞれの訪問先では、それぞれの企業がSDGsの17のテーマの関連する独自の取組や、地域の企業として地域を意識した取組について説明いただいた。今回の訪問により地域課題に取り組む地元企業の実態や、岡山に在っても世界市場を経済活動の拠点とし世界の企業と競争している地元企業の戦略を直接的に知ることができた。

また、海外文化体験研修等の関係で夏期休業中に実施できなかった生徒38名を対象に「おかやまテクノロジー展（OTEX）」訪問を令和2年1月24日に実施した。県内の精鋭企業が最先端レベルの製品・技術を展示し、それぞれの特徴をアピールするこの会に参加した生徒は、県内の企業の技術力の高さ、地域・世界への貢献度を知る良い機会となった。

訪問後にアンケートを実施したが、生徒の評価も高く、予想以上の成果に繋がった。

#### （５）課題研究

9月上旬には2月に提出する成果物の最終形を教員生徒両方に示し、ゴールをイメージしてから研究に取り組ませた。

日付	項目	内容	予習	詳細
9/3	研究①	テーマ決定、提出	17の目標関連書籍を読み、文献リストを持参	昨年度の成果物を参考テーマ係生徒が集約
9/20	研究②	RQ、仮説、提出	先行研究を調べて持ち寄るp66を読んでくる	KJ法、シンキングツール係生徒がRQ集約
10/18	研究③	研究計画書の作成	研究計画書の下書き	研究手法、仮説をまとめる
10/25	研究④	調査・実験(1)	アンケート、インタビュー案持ち寄る	持ち寄った調査案をすり合わせ完成、提出
10/29	研究⑤	調査・実験(2)	アンケート、インタビュー等修正持参	修正、完成したものを提出
11/5	研究⑥	調査・実験(3)	アンケート、インタビュー等実施	実施した調査用紙を集計
11/15	研究⑦	調査・実験(4)	得られた回答を持ち寄る	調査集計結果から分析
11/29	研究⑧	結果・考察	考察用紙を記入、持参	考察用の用紙を完成、提出
12/17	研究⑨	発表準備	PP、論文の下書き用紙作成	PP、論文作成
12/20	研究⑩	発表準備	PP、論文など作成	PP、論文作成
1/14	研究⑪	発表準備	PP、論文の下書き用紙作成	PPを教室のPCに提出
1/21	発表	HR発表会①(1～4班)	Group1～4発表の練習	係生徒進行で発表、質疑、Classiへ評価コメント入力
1/28	発表	HR発表会②(5～8班)	Group5～8発表の練習	
1/31	作業	発表準備、成果物作成	発表Groupは原稿、PP修正	その他Groupは論文作成
2/3	放課後	代表Groupリハーサル	全体発表4Group発表、質疑	教員からコメント、評価用紙
2/5	まとめ	全体発表会	発表準備、打ち合わせ	コメント用紙記入
2/18	まとめ	評価等 まとめ	自己評価、講評	Classiに自己評価入力

### ①研究テーマ

これまでの「GLOBAL I」との違いは、「SDGs 持続可能な世界を実現するための17のゴール」からテーマを選び研究することである。スキル学習終了後、夏季休業前に17の目標と169のターゲットの資料を配付し、その中での興味関心に合わせて、1クラスを8グループに分けた。また、GLOBAL係をクラスで2人選出し、授業前にGLOBAL係会を開き、「SDGs for School」などの動画で他校の例などを見せ、彼らに「GLOBAL I」の課題研究の趣旨や目標を他の生徒に先立って共有させた。担任からだけではなく係生徒からもクラスに下ろすことで、生徒主導の課題研究や活動を通じてのリーダーシップ育成を目指した。2学期の限られた「GLOBAL I」の時間をディスカッションするために有効利用できるように（授業をリサーチの時間にしないため）、夏季休業課題として「文献リスト作成」を課し、自分たちの選んだ17の目標関連の書籍を少なくとも1冊は読み、書名と概要をまとめたものを9月3日の「GLOBAL I」で持ち寄せた。続く「GLOBAL I」でも、他の科目と同様に授業準備として予習すること、具体的にはテキストを読む、ワークシート、報告書などを記入してから授業に臨むことを課した。



## ②研究手法

テキストに従い「アンケート」「インタビュー」「実験」の3つの研究手法を提示し、どの手法をとるかを10月に決定し、研究計画書の締め切りを10月25日とした。時間やテーマの関係で文献調査のみを手法とするグループも見られたが、自分たちで地元の身近なデータを集める経験も貴重だと考える。川の水質調査後に近隣企業インタビューを行うなど、2つ以上の研究手法を用いたグループもいくつかあった。アンケート先は主に本校生徒、保護者など、インタビューは近隣企業、飲食店、岡山駅周辺などに出向いて行った。

## ③考察・結論・展望

調査結果をもとに結果・考察をまとめる際、論理的に展開していくことに苦労している生徒や、筋が通っていないことを認識できていない生徒が目立った。研究に入った2学期時点から岡山大学のTA7名に指導に加わってもらったが、彼らの評価コメントからも研究中盤まで「論理的でないグループがほとんど」というような感想が見られた。教室発表で質疑応答を受けてからやっと初めて研究の問題点に気づく場合も多く、それを受けて発表グループは発表会までの1週間という短期間での改善を迫られた。しかし、ヒントを得た後は非常に意欲的で、短期間にも関わらず改めて文献調査や考察をやり直し、スライドデータも大きく改善し、最後の1週間での成長が一番大きかったのではないかと思う。

## ④教室発表・質疑応答・全体発表リハーサル

「課題研究は質疑応答が命」とよく言われるが、前述のように最後の1週間で改めてそれを痛感した。質問の答えに詰まる経験が、このままではダメだ、もっと良くしたいという気持ちを生み、熱心に改善を行う生徒が多く見られた。論理性のない結論や出典のあいまいな情報を使用していた状態から、これは突かれるのでは？と事前に問題点を予想でき、発表では言及しない部分でも、質疑のためにと深くリサーチするようになった。これを考えると、まだ経験のない遠慮しがちな1年次からでも質疑応答をいかに上手く引き出すかが重要であることは言うまでもない。事前の生徒GLOBAL係会や教室発表においては質問の大切さを強調し、鋭い意見は研究改善のために欠かせないという信念のもと、躊躇なく発言し合う雰囲気作りは欠かせない。また、一度の質問で終わるのが定型となるのではなく、回答を受けてのさらなる質問など、研究を通してのコミュニケーションを奨励することが重要である。発表グループ決定はClassiによる生徒アンケートと担任の評価によりクラス3位までを決定した。そのうえでクラス1位であった8クラスのクラス代表のなかから4グループに絞り体育館発表グループとし、それを除いて各クラス2グループを教室発表とした。

### 3. 講演会の実施

#### (1) 目的

課題研究に取り組むにあたり必要な資質、能力はどのようなものか、そしてその資質、能力が将来どのように活かされるのかを理解するとともに、実際に行われている岡山県での取り組みを知ることにより、主体的に課題研究に取り組む姿勢を身につける。

#### (2) 実施内容

目的に基づき、年2回の講演会を実施した。第1回は年度初めに行われる新入生宿泊研修の中に組み込み、本校教員による課題研究全体についての講義とした。第2回は研究のテーマを決める直前の時期に、岡山県の現状について、グループでの話し合いも交えながら学習し、課題研究への積極的な参加を促した。

具体的な講演会の内容は次のとおりである。

##### ■第1回

期日 令和元年5月7日

講師 田中 伸明 岡山県立岡山城東高等学校 教諭

演題 「課題研究を始めるにあたって」

概要

社会は急速に変化しており、それに伴って必要とされる能力も変化している。それを身につけるため、「GLOBAL I」の授業において、まずは基本的スキルを身につけ、その後、それぞれのテーマについて研究活動をしていく。まずは社会に目を向け、世界で起こっていること、抱えている問題を知ることが必要。そしてそれらに対し、自分たちがどのように関わっていくかを考える活動になることを願っている。



##### ■第2回

期日 令和元年8月27日

講師 中山 尚美 氏 岡山県県民生活部 中山間・地域振興課 総括参事

山辺 典生 氏 岡山県県民生活部 中山間・地域振興課 副参事

杉岡 茉里奈 氏 岡山県県民生活部 中山間・地域振興課 主事

演題 「岡山の課題を身近に考える」

概要

第一部として、岡山県の中山間地域の現状、地域が抱える課題についての説明、その課題の解決に向けた集落の取り組み例が紹介された。第二部として、集落の事例を設定し、そこでの課題の把握とその解決に向けた取り組みを考える活動が、グループでの話し合いを含めながら行われた。ポイントとして、「答えは一つではない」「現場に足を運んで話を聞く」「統計やアンケート結果など数字がないか探してみる」等が示され、最後に「コミュニケーション能力や課題発見・解決力を中山間地域で向上させてください」との呼びかけがなされた。



#### 4. 今年度の成果と課題

今年度1年目となるスキル学習やSDGsの17の目標を基に取り組む「GLOBAL I」。手探りで進めてきたが、33期生の真摯に取り組むことで予想以上の成果が得られたと同時に来年度へ課題も明らかになった。

##### (1) スキル学習

スキル学習は大きく5時間の項目立てをし、一定の成果が見られた。情報のスキル学習や夏季休業課題で数学科・情報科から出題されたグラフコンクール出品により、1年目から非常に見やすいスライドを作ることができた。また、文献引用など必ず多くの生徒が必要とするスキルを1学期に学習済みだったため、2学期に担任が苦勞することはなかった。しかし、実験、標準偏差など研究によっては用いないスキルに関して生徒の認識が浅かった。自分の今回の研究では用いなくとも一通りのスキルを学ぶ重要性は認識させたい。

1学期に学んだスキルが実際に必要となる2学期の研究時期には内容を忘れてしまうという欠点もあった。「GLOBAL I」用ファイルにすべてのものをファイルするように指示していたが、合わせてスキル学習1時間ずつに成果物を課し評価し、蓄積していく必要があると感じた。付箋インデックスといった厚いファイルと共に発表に臨んでいる2年次生の姿を見て感銘を受けた1年次生もいたように、既習事項や一度でも手に取った参考文献、アンケート結果など、いかにすべてのデータ資料をいつでもアクセスしやすいように整理分類するかが研究の質に影響する。データ資料の整理能力もスキルの一つであることを認識させたい。

##### (2) ロジカルシンキング

実施概要においても前述したが、論理的に考察し、理にかなった見解や結論を導くことが「GLOBAL I」では難しかった。論が飛躍したり、主観的になっていることを終盤まで認識できていない。これは「GLOBAL II」への課題である。発表会の質疑を経て大きく改善されたが、できれば中間発表の機会を設定するなど、もう少し早い段階で質問をされる場面などがあれば良い。時間的には難しいので、担任、TAがどんどん授業中にディスカッションに加わり質問することで考えさせるしかない。これは評価とも重なることで、論理的であることが代表グループ選出に大きく影響すること、質疑応答にもしっかり耐えられることなどを、研究の取りかかりの初期段階から繰り返し生徒に浸透させる必要がある。ただ頑張ればいい、やみくもにデータをたくさん集めればいい、ではなく、正しくデータを集め考察・結論へ導くことへの重要性をあらためて認識させたい。

##### 各クラスの代表Group テーマ

	タイトル	SDGs	
1組	日本と他国における男女家事労働の差	5	ジェンダー平等を実現しよう
2組	より多くの人々が服を寄付するためには	1	貧困をなくそう
3組	愛は瀬戸内を救う	14	海の豊かさを守ろう
4組	身体不自由者の不平等の理解を深めるために	10	人や国の不平等をなくそう
5組	城東生が感じる「区別」と「差別」	5	ジェンダー平等を実現しよう
6組	男性から見たジェンダー	5	ジェンダー平等を実現しよう
7組	2050年までに海洋プラスチックは魚の量を超える	14	海の豊かさを守ろう
8組	学校をすべての人たちにとって居心地の良い場所にするためには	10	人や国の不平等をなくそう

### (3) 企業訪問

7月末から8月にかけて実施した企業訪問では、海外文化体験研修等で参加できなかった生徒を除く286人が県内の6法人を訪問した。参加した生徒を対象にアンケートを実施したが、生徒の意見には肯定的な内容が多く、一定の成果を感じている。

#### 【生徒の感想 抜粋】

- ・県内の法人が様々な形で地域に貢献していることが理解できた
- ・グローバル企業として世界的に展開し、その国の発展等に大きく貢献していることを理解した
- ・個々の法人が取り組んでいるSDGsに関連する事業を学習することで、世界的な課題を身近に感じることができた

ただ、今年度は事業を開始してからすぐ企業訪問を実施したため、クラス単位での訪問となり、生徒それぞれの興味・関心にあった企業への訪問が十分には実施できなかった。来年度以降は企業訪問の日を2日程度にして生徒に訪問先を選択できるように計画したい。

### (4) 講演会

生徒に、まず岡山県の地域課題を理解してもらいたいと考え、本県の地域課題に対応している岡山県県民生活部中山間・地域振興課活力創出班の方を講師として講演会を実施した。講演についての生徒へのアンケート結果では、地域課題に対して自分たちに何ができるかを真剣に考えている回答が多くあり、大きな成長を感じられた。

#### 【生徒の感想 抜粋】

##### 1 共感したこと

- ・過疎化などの課題を関係ないと思わずに、少しでも目を向けて何かに取り組むことが大切だということ。
- ・現場に出かけ、雰囲気を生で感じ、相手の立場になって考えてみること。
- ・不便をしている中山間地域の方々に、少しでも便利な暮らしをして欲しいという思いに共感した。

##### 2 疑問に思ったこと

- ・集落への取組は他にどんなことをしているのか、取組によって何がどういう風に変化したのか。
- ・遠い所のほうがわからないことが多いと言われていたが、自分の住んでいる地域のことすらも自分たちは十分わかっていないのではないのか。

### (5) 課題研究「GLOBAL I」

1年次生は初めての課題研究であったが、多くの班がSDGsに関連するテーマを踏まえ、地域課題について研究していたこともあり、全体の約12%の生徒がアンケートや実験・観察といった校外でのフィールドワークを実践していた。これは、過去の1年次生の取組と比較しても高い数値であった。フィールドワークに参加した生徒の感想にも、出かけて行くことの意義や大切さを理解できたといったものが多くあり、大きな成果と考えている。

【フィールドワークに出かけた生徒の感想】

- ・現地に出かけ実際に自分たちで見て、実感しないとその地域の魅力はわからない。まず、現地に出かけることが大切だ。
- ・自分たちで課題ととらえていたことが、地域の人々の課題にはなっていなかった。外から見ていることと、中で体感することは随分違うことが分かった。
- ・現地に出かけることなく、解決策を検討してきたが、現地できちんと課題を見なければ見当はずれの支援をするだけになってしまうことが理解できた。

1年次生を対象に「あなたは、将来地元で暮らしたいと考えていますか？」といったアンケートを実施したところ、41%の生徒が肯定的な回答をしている。他の年次とも比較しなければならないが、昨年度の本校での調査結果が30%であることを考えると高い数値と思われる。

また、1年次生が今年受検したGPS-Academic（社会で活躍するために重要視される「問題解決力」の現状を思考力、姿勢・態度、経験の3つの観点で確認するアセスメント ベネッセコーポレーションの調査）の批判的思考力、創造的思考力の結果も、上位評価（AとS）の割合がそれぞれ41%、43%とあり、昨年度までの結果を10ポイント程度上回る良い結果となっている。

最後に「課題研究を通じて1年間学んだことは何か」と言った質問に対する生徒の感想を一紹介するが、その回答からも大きな成果を感じることができた。

- ・グローバルを通して気になったことを「なぜ」という問いにして考え、調べてみるということがとても意義のあるものだと分かったので、今年の体験は非常に価値のあるものになりました。
- ・日本全体を考えると、課題が多いように見えるが、世界全体としてみると、もっと多くの課題があることがわかった。そして、それぞれの国で様々な取組をしていることを知り、日本の取組の課題が見えてきた。
- ・先生や大学生など、いろいろな人の意見を聞いたことで、自分たちの考えを深めることができた。外国の制度も知って、日本の現状を知ることができた。

## 第2節 「GLOBAL II」の実施

### 1. シラバス・年間指導計画の作成と共有

#### (1) 「GLOBAL II」の基本的方針

平成26年度に指定を受けたスーパーグローバルハイスクール（以下SGH）としては、平成30年度で5年間の研究開発を終了している。2年次生は「異力の統合」をテーマとしつつ、新規事業の先行研究として「GLOBAL II」で探究学習を続けている。

「GLOBAL II」においては、岡山大学や地域経済界等と連携して課題解決に向けた研究を行うことで、学問的・探究的に学ぶ態度を養い、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力の涵養をねらいとする。このねらいを実現するため、次のような基本方針を作成した。

「GLOBAL I」で経験した探究型課題研究をより深めるため、岡山大学の教員や経済界等と連携し、専門的な立場から研究テーマについて歴史的背景や文化的背景を含む指導や助言を受ける。また、ティーチング・アシスタント（以下TA）として7名の岡山大学大学院生・大学生から、イングリッシュ・ティーチャー（以下ET）として2名の外国人講師からの協力を得て、より深い研究活動を目指す。また、2年次では生徒が4学類に分かれることから、各学類の得意分野を生かしつつ、互いを補完し合いながらひとつの探究型課題研究を完成させる「異力の統合」を目指す。また、プレゼンテーション能力を高めるために、10月にグループ毎の中間発表、1月にはグループ毎の研究発表会を行い、その結果をもとに選抜された代表班が2月の課題研究発表会で発表する。

#### (2) 「GLOBAL II」の方向性

「GLOBAL I」で学んだ技術や手法をもとに、より発展的な探究型学習を週2時間の連続した授業を中心に展開する。

具体的には、「経済・産業」、「国際貢献」、「環境・安全」、「教育・文化」の研究領域を設け、それぞれ2つずつ合計8つの大きな研究テーマを設定する。生徒はそこから自分の興味・関心のあるテーマを選択し、6人程度の班でグループ研究を行う。班編成では異なる学類の生徒で構成されるように工夫し、各自の得意分野を生かして研究に参加し、多角的な視点で研究内容の充実を図る。このことにより、個としての力を集結し協同で物事に取り組む姿勢とコミュニケーション能力を育成し、「異力の統合」を図る。

外部からの支援として、全てのグループが岡山大学教員から年2回、10月以降はTAから毎時間指導を受け、研究内容の深化を図る。そして、6月に実施する学類研修での異文化交流が研究を深めるための機会となるよう、意見交換の場を設ける。さらに、英語発表を予定する班には、毎時間ETから集中的な指導を受けることができる体制を整え、語学力に対する意識を高める。なお、研究過程で何らかの情報収集が必要となった場合には、企業や公的機関等の訪問も含め、積極的にフィールドワークをするように勧める。最終的に、中間発表を含め何度か予定している発表会では、発表者としてのプレゼンテーション能力とともに、聴衆として質問する力を高める機会と捉える。

#### (3) 教員間での方針の共有

5年間のSGH事業への取り組みを経て、探究学習の指導に携わる機会も増えたはずだが、今年度2年次担当教員は半数以上が「GLOBAL II」指導未経験者であった。それでも、昨年度までと同様に「GLOBAL II」を進めるつもりで年間計画を立てていた。しかし、SGHの指定を外れた今年は例年ほど外部の支援を受けることができず、大学教員やTAによる指導が始まったのは10月になってからであった。本来、最も支援が必要なのは、テーマを解釈し、問いを見つける最初の段階である。今年は「GLOBAL II」開始以来初めてこの段階の指導を各グループ教員主導で行った。その後も、探究の手法やデータ処理の指導については各グループ教員に一任し、年間計画やルーブリック、研究成果物の様式については係が事前に示して年次で統一するようにした。

学 科 名	学 類 名	年 次
普通科	全学類	2 年次

科目名 (校内科目名)		単位数	講座数	生徒数	種別	履修形態	指導者名 (時間数)	
総合的な学習の時間 (GLOBAL II)		2	8	357	必履修		2 年次担当者 23 名 (78)	
教科用図書 (発行所)				教科書以外の教材 (発行所)				
学 期	単 元 名	学習の ねらい	学習内容	配 当 時 間	観 点 別 学 習 到 達 目 標			
					関心・意欲 ・態度	思考・判断 ・表現	技能	知識・理解
	探究学習 1・①	異力の統合の意味を理解し、研究を進める	<ul style="list-style-type: none"> <li>個々の得意分野を生かした情報収集</li> <li>それぞれの収集資料の共有化</li> <li>探究の深化を図るための技能の習得</li> </ul>	10	<p>英文の HP や英文書などに対しても、意欲的に情報収集をしようとする</p> <p>チームの中で、意欲的にディスカッションに参加しようとする</p>	<p>数多くの情報から、正しい情報を選択することができる</p> <p>他者の意見を冷静に聞き、新たな課題と解決への道筋を考察することができる</p>	<p>専門的な得意分野の情報をチームで共有するために、簡潔かつ論理的に説明することができる</p> <p>得られた情報を整理し、効果的に表現することができる</p>	<p>調べた内容について、現状の把握をすることができる</p> <p>調べた情報を的確に分析し、多角的な面から検証し、情報の信頼性をあきらかにすることができる</p>
	探究学習 2	<p>他文化を持つ人々とのコミュニケーション能力を身につける</p> <p>世界の中の一人として思考・行動する力を身につける</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>クラスづくりやチームづくりとその実践</li> <li>現在の世界情勢についての理解</li> </ul>	12	<p>他者と自分との違いを理解し、互いの発展的な方向性を見いだす意欲を持つ</p> <p>世界の出来事や課題に関心を持つ</p>	<p>高校生としての立場で、解決の糸口を見いだすことができる</p> <p>世界的な課題に目を向け、世界の一員としてどのように関わっていくべきか考察することができる</p>	<p>自分の立場だけでなく、相手の立場にも立ち、コミュニケーションを図ることができる</p> <p>論理的にものごとを説明し、自らの意図を正確に相手に伝えることができる</p>	<p>互いの意見を持ちより、多くの可能性の中から、現状を理解する</p> <p>現在の世界のありようを理解し、地球上に生きる人間としての共通の課題を認識する</p>
	探究学習 1・②	<p>研究の在り方を身につける</p> <p>より多くの人々に自分たちの研究を発信する基礎的技術を身につける</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究内容の見直しと、より深い考察</li> <li>その国に住む人々のアイデンティティの理解と、研究成果の発信</li> </ul>	56	<p>新たな課題の発見と問題解決とについて、高い次元の探究に向けて意欲的に取り組もうとする</p> <p>主体的に行動し、問題解決に取り組もうとする</p>	<p>今までの過程を見つめ直し、深化した研究に必要な思考をすることができる</p> <p>日本と世界とを意識し、互いの共生を考察することができる</p>	<p>今まで学習した内容の中から、有用な方法を使い、表現することができる</p> <p>研究の成果を相手に伝える技能を身につける</p>	<p>知り得た情報から、的確なものごとを解決する手順を理解する</p> <p>研究によって身につけた知識を単なる個人・チームの知識に終わらせることなく、多くの人々に伝達する方法を理解する</p>
		総時間数	78					

学 科 名	学 類 名	年 次
普通科	全学類	2 年次

科目名 (校内科目名)	単位数	講座数	生徒数	種別	履修形態等	指導者名 (時間数)
総合的な学習の時間 (GLOBAL II)	2	8	357	必履修		2 年次担当者 23 名 (78)
教科用 図 書 (発 行 所)			教科書以外の教材 (発行所)			
元名 題材名	事項名 (教 材 名)	時数	形態	指導内容	指導上の留意点、教材等	
探究学習 1、 ①	異力を統合した多面的な探究活動	4		<ul style="list-style-type: none"> <li>異力を統合するチームづくりとその実践</li> <li>「GLOBAL I」で修得した基礎的技術の実践とより深く探究する能力の育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>異なる特徴を持つ学類の力を統合していくことに主眼をおいたコミュニケーション力を育てる</li> <li>より深い探究を促す調べ学習を行う中で、日本語以外の資料等の参考も促し探究をする</li> </ul>	
	探究や発表の方法・内容についてより深く学び、探究型学習の応用的な技能を身につける	6				
探究学習 2	学類研修に向けての探究活動	12		<ul style="list-style-type: none"> <li>学類、行き先別のチームづくりと研修先でのディスカッションを視野に入れた探究</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学類研修旅行先の大学や高校との交流でディスカッションの素材となるべき知識、コミュニケーション力を身につける</li> </ul>	
探究学習 1、 ②	探究や発表の方法・内容についてより深く学び、探究型学習の応用的な技能を身につける	25		<ul style="list-style-type: none"> <li>「GLOBAL I」で修得した基礎的技術の実践と、深く探究する能力の育成</li> <li>研究の進捗度確認と、方向性の再検討</li> <li>日本や地域の理解を深め、世界との相違点の認識と世界との協同を目指す力の育成</li> <li>研究内容を伝える技能の育成</li> <li>海外への学びの発信による、実践的なコミュニケーション能力の育成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部講師や企業、組織との連携を図り、課題の解決に向けて探究活動を行う</li> <li>研究課題の再確認することで、計画立てた研究を実施する技能を身につける</li> <li>世界の中の日本を意識し、世界の共存を図るための思考力を身につける</li> <li>「GLOBAL I」で培った表現力やコミュニケーション能力を身につける</li> <li>「GLOBAL I」の表現力をより高め、高度なディスカッション能力を身につける</li> </ul>	
	研究の途中経過としての課題を検討し、解決の方向性と今後の研究の進め方について	15				
	日本人としてのアイデンティティと異文化に対する理解	10				
	研究成果からの提案・実践・発信	6				
	海外修学研修について					
総時間数		78				
備 考						



## 2. 実施概要

### (1) 「GLOBAL II」の展開

- ・「総合的な学習の時間」のうちの2単位を利用し、2年次の水曜日6・7限の2時間連続で実施する。
- ・「経済・産業」「国際貢献」「環境・安全」「教育・文化」の研究領域を設け、各研究領域で2つ、計8つの大きな研究テーマを設定する(表1)。生徒はそこから興味・関心のある研究テーマを選択し、課題研究活動を行う。
- ・異なる学類の生徒を組み合わせて男女混合の班を編成し、各学類の得意分野を生かした活動ができるようにする。
- ・2年次団教員全員で指導にあたり、岡山大学教員・TA、ETにも協力を仰ぐ。
- ・大学教員には、中間発表・最終発表の年2回、生徒への指導助言を依頼する。
- ・TA1名が派遣される6グループは、中間発表以降毎時間、研究を援助してもらう。
- ・英語発表を目標にする2グループは、毎時間ETから直接指導を受ける。
- ・各班にコンピュータ室のデスクトップパソコン1台、図書室保有のノートもしくはタブレットPCを割り当てる。

### (2) 活動の経過

- 4月 オリエンテーション 班編成と役割分担の決定  
2年次生全員を対象に、「GLOBAL II」の指導方針、8つのテーマ、年間計画等について係から説明した。その後の希望調査によりグループ分けが決定し、各グループ担当教員からクラスも学類も異なる男女5～7人の班編成が発表された。初顔合わせの時間は自己紹介やマッシュマロチャレンジを通して相互理解を深めることから始めた。
- 5月 テーマの理解と課題設定  
全グループにフレームワークや研究計画作成用紙を配付した。ウェビングやKJ法を用いて課題設定を促すグループもあれば、先行研究を探すところから始めるグループもあり、担当教員の個性が生かされた指導が始まった。
- 6月 学類研修に向けての探究活動
- 7月 研究計画書の提出  
夏休み中のフィールドワークを促す目的もあり、一旦研究計画書の提出を求めた。
- 10月2日 研究計画の説明と説明としての中間発表  
初めて岡山大学の先生から指導を受ける日となった。各班、PowerPointでスライドを作成し、課題設定の背景、調査・実験の方法などを説明し、大学の先生及びTAから指導助言をいただいた。ルーブリックに基づき、生徒は相互評価を行い、発表後は評価表を交換してその後の改善に役立てた。
- 10月23日～課題研究本格実施  
大学の先生からの指導助言を受け、研究計画を練り直し、本格的に課題研究が始まった。すべての班が、何か自分たちで調査・実験・観察に取り組みたいという意欲を見せ、担当教員と相談しながら研究を進めていった。
- 1月15日 研究要旨(日本語)提出
- 1月22日 研究成果のグループ別発表会  
8つのグループ別に、研究成果の発表会を行った。2回目の来校となる岡山大学の先生には、指導講評をお願いした。ここでもルーブリックに基づき生徒相互評価を行い、課題研究発表会の代表班が選出された(表2)。
- 1月29日 研究論文・研究要旨(英語)提出
- 2月5日 課題研究発表会  
「GLOBAL II」代表班には、原稿を読むのではなく、聴衆に顔を向けて自分の言葉で説明することを要求していたが、大半が見事にそれに応えていた。また、聞き手の生徒はルーブリックに基づき評価をしながら、積極的に挙手して意見交換を楽しみ、発表会を盛り上げた。
- 2月19日 自己評価アンケート

### (3) 成果と課題

新たな事業の先行研究として実施したこともあり、地域でのボランティア活動等へ参加するなど、多くの班がフィールドワークに取り組んだ。休日だけでなく、平日も水曜日の授業の6限以降を活用して実施したこともあり、外に出かけフィールドワークを実施した班が全体の50%であった。

表1 研究テーマ及び生徒数・指導者等

領域	研究テーマと内容	生徒・教員・岡山大学指導者・TA
経済・産業	<b>[A]</b> 地域経済の発展と課題 今日の日本は都市への人口集中、地方の過疎化などにより地域経済の衰退が進んでいる。そこで、地域の活性化を他国の事例を参考に考察し、日本での取組を提言する。	生徒57名 教員4名（磯部・次田・江國・古市） 経済学部 准教授 中川豊隆 先生 TA 経済学部 原田直樹さん
	<b>[B]</b> 新しい産業の構築 グローバル化が進む中、以前には考えられなかった新しい産業が次々と誕生している。そうした状況を世界的に考察し、今後の日本で取り組むべき新しい産業を提言する。	生徒35名 教員2名（堀切・白髭） 経済学部 講師 天王寺谷達将 先生 TA 経済学部 平井篤実さん
国際貢献	<b>[C]</b> 身近な国際貢献 今日の世界は、貧困・飢餓・紛争など様々な問題を抱えている。そこで世界の困難な状況を理解し、自分たち高校生でもできる国際貢献にはどのようなものがあるか提言する。	生徒35名 教員2名（杉岡・中西） グローバル人材育成 准教授 稲森岳央 先生
	<b>[D]</b> 世界の中の日本 自分たちが住んでいる日本という国は、世界からどのように評価・認知されているのか。世界の中の日本を様々なデータから知り、そうした日本が世界の中でどのような国際貢献ができるのかを考察し、提言する。	生徒32名 教員2名（島田・橋本） English Teacher グローバル人材育成 教授 横井博文 先生
環境・安全	<b>[E]</b> 資源をめぐる世界 今日の世界は、有限の資源を消費することで成り立っている。そうした資源の世界的利用状況を調査し、今後の世界でどのようなエネルギー使用の在り方が必要かを考察し、持続可能なエネルギー使用を提言する。	生徒40名 教員3名（藤井・増尾・田戸） 資源植物科学研究所 教授 且原真木 先生 TA 環境生命科学研究所 大西亜耶さん
	<b>[F]</b> 安心・安全な社会とは 毎日の暮らしの安心・安全はどのように構築されているのか。日本での取組を他国と比較し、その問題点と改善点を考察し、より安心・安全な社会の構築を提言する。	生徒58名 教員4名（池上・定金・大嶋・野上） 教育学研究科 教授 伊藤武彦 先生 TA 教育学研究科 和田真理絵さん
教育・文化	<b>[G]</b> 日本と世界の初等教育 日本の初等教育（小中学校）は、世界の取組と比べどのような類似点・相違点があるのか。教育先進国と呼ばれる国との比較から、変えるべき点、変えるべきでない点を提言する。	生徒60名 教員4名（高橋・浅野・枝松・田内） 教育学研究科 教授 梶谷信之 先生 教育学研究科 教授 片山美香 先生 TA 教育学研究科 紺谷遼太郎さん
	<b>[H]</b> 世界での日本文化 日本の文化は海外でどのように紹介されてきたのか。世界での評価を歴史的に考察し、日本文化とは何かを海外の視点から考察し、日本文化の新たな価値を提言する。	生徒40名 教員3名（中山・石原・林原） English Teacher 社会文化科学研究科 教授 延味能都 先生 TA 社会文化科学研究科 吉藤妃花梨さん

表2 課題研究発表会 代表班

■ ステージ発表

A4	SUN SUN ナビ	E3	目指せ！チョーク農業
C3	4コマ漫画が日本を救う?! ~ビクトグラムの大改革~	H4	Let's eat Okonomiyaki!

■ HR 教室発表

A1	#赤磐市に何も無いなんて言わせない	F1	自転車のながらスマホをなぜ行うのか？
A5	奉還町商店街の活性化に向けて	F4	Always Everyone's DOUGU ~AED使用率向上へ~
A10	自転車で町おこし	F7	大雨災害から身を守るためにはどうすればよいか
B4	バザーによるフリマ問題への対策	F8	高校生のプライバシー・パラドックスの有無
B6	プラスチックストローの削減	G1	教員の過重労働
C2	将来の災害に役立つために	G4	共に生きる
D1	Pet Bottles are a resource not trash	G9	支援学級について通常学級の生徒に説明するべきか
D5	To make people from other countries enjoy Japanese Hot Springs	G10	みんなで一緒にアクティブラーニング！
E2	踏んで踏んで踏んでみよう！ 発電床！	H5	旅館の文化を世界へ
E5	野菜なんて紙にしまえ！	H6	外国人が会場にもたらす影響

### 第3節 「GLOBALⅢ」の実施

#### 1. シラバス・年間指導計画の作成と共有

##### (1) 「GLOBALⅢ」の基本的方針

「GLOBALⅢ」は、「GLOBALⅠ」や「GLOBALⅡ」とは異なり、希望する生徒が選択する科目（学校設定科目）であり、個人で研究する。これまでの学習成果を活かし、1・2年次での研究を深化させ、その成果を発信する活動にも力を入れる。指導する教員は、生徒が自主的・積極的に研究活動を実施できる場を提供するだけでなく、研究が深まるような助言を与える。外部機関との連携や、外部人材の活用も積極的に進める。

令和元年度は文系の生徒のみであったため、国語、外国語、地歴・公民の3教科の担当各1名と、副校長の計4名によるスタッフで「GLOBALⅢ」の運営にあたった。また、11月の最終発表会では前年度に引き続き岡山大学グローバルディスカバリープログラムの先生に指導講評をしていただくことができた。

##### (2) 「GLOBALⅢ」の方向性

「GLOBALⅢ」では、「課題研究の深化」、「研究成果の発信」及び「GLOBALの集約」という3つの大枠の中で、幅広い活動が可能となるよう計画している。

###### ① 「課題研究の深化」の活動例

書籍による調査や校外でのフィールドワークあるいはインタビューを通じて、データの信頼性を上げ、研究の充実をはかる。校内でのシミュレーション等を通じて、観察や実験の手法をデザインして、研究成果の分析や考察に客観性を持たせる。校内外の学習会・研修会等へ参加し、そこで得られる人脈を大切にし、有識者・専門家からの助言を得て、研究方法や考察を深める。

###### ② 「研究成果の発信」の活動例

ICT機器を活用し研究成果を発表資料や論文にまとめ、校外のコンクールやコンテストに応募する。また、校内外で開催される発表会等への参加を計画する。研究発表に伴う質疑応答を経験することによって、プレゼンテーションの力のみならず研究の内容が高まることが期待できる。

###### ③ 「GLOBALの集約」の活動例

「GLOBALⅠ」・「GLOBALⅡ」・「GLOBALⅢ」と継続して学習した体験をレポートにまとめる。必要に応じてポスターやエッセイに仕上げ、グローバル人材育成に重点を置く国内の大学や海外の大学への進学に利用する。後輩の課題研究に対して、経験者の立場からアドバイスをを行う。

2単位の授業のうち、1単位分は放課後や休業日に実施したことで、本校図書室に加え校外の図書館や専門機関での調査、校内でのアンケート調査・分析が活発に行われた。

##### (3) 教員間の方針の共有

指導内容や指導方法について関係する教員間で連絡をとりながらも、今年度の選択者の実情に応じた柔軟な対応を心がけながら授業を行った。2人の生徒にそれぞれ2人の教員がつき指導した。毎回の授業では最初に全体的な相談や連絡をし、その後それぞれに分かれて研究を進めた。生徒によって研究テーマや方法は様々であるが、発表会やコンテストへの参加、成果物の作成などは同じように行った。

研究成果の発表経験が成長を促す良い機会になると考え、7月の中間発表や11月の最終発表が大きなステップになるように配慮した。授業担当者以外の教員にも参加してもらい、発表に対するアドバイスをもらうことが生徒たちには貴重な経験となった。同じ理由で、校外での発表機会があれば積極的に紹介し、可能な限り生徒を派遣した。今年度は10月に開催された「G20 岡山保健大臣会合」で高校生が世界に向けて発信するという趣旨で、選択者のうちの1名が参加し操山高校、岡山学芸館高校の代表生徒とともに提言を行った。

学科名	学類名	年次
普通科	全学類	3年次

科目名(校内科目名)		単位数	講座数	生徒数	種別	履修形態	指導者(時間数)
GLOBALⅢ(GLOBALⅢ)		2	1	2	選択		4名(78)
教科用図書(発行所)			教科書以外の教材(発行所)				
単元名	学習のねらい	学習内容	時間	観点別学習到達目標			
				関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
課題研究の深化	「GLOBALⅡ」で収集した情報に対して、更なる分析・考察を加えることにより課題研究を深化させる	<ul style="list-style-type: none"> <li>先行研究の調査</li> <li>校外でのフィールドワーク</li> <li>校内でのシミュレーション</li> <li>教科・科目の自主的学習</li> </ul>	26	関連の深い先行研究を調査し、研究内容を充実させるフィールドワークやシミュレーションを行い、普遍性や客観性を加味しながら分析・考察を加えることができる	収集したデータおよびその分析・考察の結果を取捨選択し、論点がクローズアップされるようにまとめることができる	データに普遍性や客観性が増したことを示すことができる	研究に関連する分野や学問領域の知識の習得につとめ、理解を深めることにより、課題の本質を掘り下げることができる
研究成果の発信	国内や国外で開催されるコンテストや発表会を利用して、研究成果を発信する	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表資料の作成</li> <li>国内の発表会やコンテストへの参加</li> <li>インターネットを利用した海外への発信</li> </ul>	26	学習会や発表会およびコンテストについて自ら調査し、積極的に応募することができる	選択と集中により、メリハリのきいたプレゼンテーションによってアピールすることができる	ICT機器を使いこなし、多くのプレゼンテーション法から最適なものを選ぶことができる 英語で発表する際は、英語の質疑に回答することができる	発表に際しての質疑応答において、相手の質問を理解し、的確に回答することができる
「GLOBAL」の集約	「GLOBAL」での学びを、レポートやポスターおよびエッセイなどにまとめ、必要に応じて利用する	<ul style="list-style-type: none"> <li>「GLOBAL」での学びを伝えるレポート</li> <li>海外への進学や留学の模索</li> <li>2年次生の研究へのアドバイス</li> </ul>	26	後輩が参考にできるように、3年間の「GLOBAL」での学びが自分に果たした役割をまとめることができる	課題研究を行い、自分の考えをまとめて発表する活動を通じて、思考力・判断力が高まっていることに気づく	必要に応じて自己推薦書や英語エッセイにまとめ、国内および国外の大学進学に役立てることができる	課題研究により身につけた知識は、通常の授業によるものよりも深い理解をもたらしていることに気づく
総時間数		78					

教科名		科目名	単位数	科・類型	年次	講座数
GLOBAL		GLOBALⅢ	2	普通科	3年次	1
単元名 題材名	事項名 (教材名)	時数	形態	指導内容	指導上の留意点、教材等	
課題研究の深化	先行研究の調査	26	個人研究	・普遍性や独自性を確認する	・データの信頼性を上げ、研究の充実をはかる	
	校外でのフィールドワーク			・実地調査により、一次情報を入手する	・研究結果の分析や考察に客観性をもたせる	
	校内でのシミュレーション			・観察や実験をデザインし、再現性のあるデータを得る	・行政や大学等の教育機関で企画される学習会に参加する	
	教科・科目の自主的学習			・関連する教科・科目の学力を極める	・学際的な領域についても理解を深める ・活動を通じて得られる人脈を大切にする	
研究成果の発信	非凡な発表資料の作成	26	個人研究	・ICT機器を利用して、効果的な発表資料にまとめる	・表計算ソフトやプレゼンテーションソフトを使いこなす	
	国内の発表会やコンテストへの参加			・大学や学会で開催される発表会への参加を計画する。 ・研究成果を論文にまとめ、コンテストに応募する	・研究発表に伴う質疑応答を経験し、研究の質を高める ・海外での発表に繋がるコンテストなども視野に入れる	
	インターネットを利用した海外への発信			・英語による発表資料を作り、海外の交流校等に発信する	・海外での研修経験を利用する	
「GLOBAL」の集約	GLOBALでの学びを伝えるレポート	26	個人研究	・「GLOBALⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を通して学んだ体験を、レポートにまとめる	・必要に応じて、ポスターやエッセイに仕上げ利用する	
	海外への進学や留学の模索			・海外の大学への進学や、国内の大学に進学後の留学を視野に入れた活動を行う	・海外文化体験研修や学類研修および海外修学研修などで得た人脈も活用する	
	2年次生の研究へのアドバイス			・後輩の課題研究に対して、経験者の立場からアドバイスをを行う	・研究の過程で体験した困難とその克服について紹介する	
	時数計	78				
備考	時程内で1単位、時程外で1単位の授業を実施する					

## 2. 実施概要

### (1) 選択者2名の研究概要

	研究タイトル	研究概要
1	親は自分の育て方を過大評価している？ ～「やり抜く力」に関する研究を通して～	『やり抜く力 (GRIT)』(アンジェラ・ダックスワース教授著) から、成功の鍵となる非認知能力 GRIT を日本の高校生はどれくらい持っているか、また親の GRIT や育て方との関係について検証する。①本校保護者・生徒にアンケート②分析
2	PERIOD	月経について差別や偏見があることを知り、月経にまつわる問題について調べ、世界中の女性が少しでも暮らしやすい世界に変わるよう提言する。①世界中の月経事情について②学校内での月経に関する意識調査③G20 での提言発表

### (2) 論文コンテストについて

応募先	応募者数
第 63 回全国学芸サイエンスコンクール 人文社会科学部 主催：旺文社 後援：内閣府・文部科学省・環境省	1 名
JICA 国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト 2019 主催：国際協力機構 (JICA) 後援：外務省・文部科学省等	1 名

### (3) 活動の経過

#### ① テーマ選択と課題研究 (4～6月)

春休み中にテーマを考えるように前もって指示をし、それについて発表させることから授業が始まった。意欲十分に研究を始めた生徒たちであったが、具体的にどのような方法で研究を進めるかを考える段階になると、迷ったり悩んだりすることが多くなった。「GLOBALⅢ」は2単位の授業であるが、1時間は金曜日4限に実施し、もう1時間は各自が放課後や長期休業中にフィールドワークや図書館での活動という形で実施した。

#### ② 中間発表 (7月30日)

プレゼンテーションソフトを使っての中間発表を夏休み前に行った。発表会では参加した教員から出された質問への受け答えの仕方も経験できた。ここまでに自分が取り組んできたことを整理し、発表会で指摘された内容を踏まえ、夏休み中の活動に活かすことを目的とした発表会であったが、その目的は十分達成されたといえる。

#### ③ 長期休業中の課題研究 (7～8月)

7月末の中間発表で指摘された内容についてまとめ、二学期からの研究課題とした。また、ここまでの研究をもとに論文コンテストに応募する作品を仕上げた。

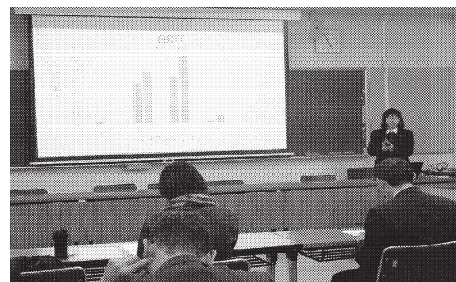
#### ④ 研究の深化と発表の経験 (9月～11月を中心に)

11月末の締め切りを意識しながら、研究を深化させるために資料収集や考察が本格的になる時期である。

この時期は大学のAO入試や推薦入試の時期と重なり、該当する生徒には時間的にも精神的にも厳しいものがあるが、スケジュールを考えながら上手に対応してくれたと考えている。

#### ⑤ 最終発表会 (11月27日)

課題研究の集大成として、プレゼンテーション用スライドと発表原稿を完成させて、最終発表を迎えた。参加者からの質問に答える経験も含め、プレゼンテーションの力が高まったと確信できた発表会であった。最後に岡



最終発表会

山大学の先生に講評していただいた。良い点を褒めてくださった上で研究の着眼点や研究方法など、専門家ならではの的確で丁寧なアドバイスをしてくださり、選択生にとって大変参考になるとともに今後の活動の励みとなった。

#### ⑥ 研究成果のまとめ

最終発表会で使用したプレゼンテーション用スライドと発表原稿に加えて、A4判1ページの英文での概要と、「GLOBALⅢ」の研究成果に3年間の活動の振り返りを含めたエッセイを作成した。また、3学期には校内での課題研究発表会をはじめ校外のSGH指定校で開かれる発表会等に参加する予定である。

#### (4) 今年度の活動についての考察

生徒たちは「GLOBALⅠ」、「GLOBALⅡ」での経験を活かしながら主体的に研究や発表に取り組んだ。「GLOBALⅢ」の経験はそれぞれの進路決定にも役立ち、自ら課題を発見し解決に向けて探究する活動は各自の成長に繋がると同時に、今社会で求められている力を身につけるために必要な活動であると実感できた。

最後に、授業を終えての生徒の感想を紹介する。

☆4月から6月くらいまでは、自分がこの授業を通してどういう風に変化していくのかは全く想像できなかった。しかし、10月に行われたG20保健大臣会合で提言を発表する機会を与えてもらったり、他のSGH指定校の生徒と交流したりすることができたおかげで、今まで漠然としたイメージしか持てなかった「世界」や「世界的な課題」といったものを身近に感じることができ、より一層自分の課題研究のテーマである女性の月経について興味関心を持つことができ、意欲も増した気がする。

研究を進めていく中で、自分が今まで知らなかった情報を見つけることができ、面白いと思えることがとても多かった一方で、高校生という立場からできることへの限度というものも出てきてすごく悩んだ場面も多かった。(中略)このように課題を調査し、解決策を見つけることの面白さや、積極的に自分の意見を発信していくことの大切さを学ぶことができたので、「GLOBALⅢ」を選択して本当によかったと思う。

☆私は、「GLOBALⅢ」の研究を通して、研究することの面白さと難しさを学びました。「GLOBALⅡ」とは違って1人で研究を行うため、自分の興味のあることについて自由により深く研究することができました。しかし、その分背負わなければならない負担はとても大きく、苦しいと感じることもありました。予想していた結果を得られなかった時や、矛盾が生じたとき、それがなぜ起こったかを考え明らかにすることは決して簡単なことではないと改めて実感しました。(中略)

しかし、アンケート調査をしたとき、データを分析し疑問が明らかになったとき、新たな発見があったとき、喜びや達成感、そして答えのない間に挑むことの面白さを知ることができました。自分の未熟さを実感させられた今回の研究でしたが、私はこの研究をやり抜くことができたことを誇りに思い、この経験をこれからの学びを活かしていきたいと思えます。

生徒はそれぞれに悩んだり苦しんだりしながら研究をやり遂げ、達成感を得られたことが読み取れる。2名とも授業時間以外にも非常に多くの時間を研究に費やした。担当者としてその努力に敬意を表したい。

## 第4節 課題研究発表会

### 1. 目的

「GLOBAL I」、「GLOBAL II」の中で取り組んできた課題研究が、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力を備えるための取組であることを発表を通して再確認する。また、その学習成果を1・2年次全員で共有することにより、学類や年次を超えて知的好奇心の高揚を図るとともに、次年度に向けた学習への意識付けの場とする。

### 2. 日程 令和2年2月5日(水)

9:00	開会行事<体育館> 開会挨拶・趣旨説明	13:20	教室発表<HR教室> 「GLOBAL I」「GLOBAL II」 岡山操山高等学校 岡山学芸館高等学校
9:15	ステージ発表<体育館> 「GLOBAL I」「GLOBAL II」 岡山操山高等学校 岡山学芸館高等学校	14:30	閉会行事<体育館> 「GLOBAL III」 課題研究発表 指導講評・閉会あいさつ
12:28	昼食・休憩		

### 3. 「GLOBAL I」の発表内容

#### 【ステージ発表】

- ① 1年6組 「男性から見たジェンダー」
- ② 1年4組 「身体的不自由者の不平等の理解を深めるために」
- ③ 1年2組 「より多くの衣服を寄付するためには？」
- ④ 1年7組 「2050年までに海洋プラスチックは魚の量を超える」

#### 【教室発表】

- 1年1組 「日本と他国における男女の家事労働の差」  
「Under the Sea」
- 1年2組 「笑顔を届けるフードバンク」  
「The real of water」
- 1年3組 「EDUCATION FOR CHILDREN」  
「愛は瀬戸内を救う」
- 1年4組 「日本の医療の現状と改善」  
「私達にできる災害支援」
- 1年5組 「LDの子供たちが学びやすい環境づくり」  
「城東高校生が感じる『区別』と『差別』  
～差別をなくすためにできることはなにか～」
- 1年6組 「mission “災害時に岡山県民を行動させる！”」  
「城東高校の用水路の汚れの原因は？」
- 1年7組 「児童虐待に苦しむ子供たちを減らすにはどうすればいいのか」  
「再生可能エネルギーの割合を増加させるには？」
- 1年8組 「こども食堂から見る岡山の貧困」  
「学校をすべての人にとって居心地のいい場所にするためには」

### 4. 「GLOBAL II」の発表内容

#### 【ステージ発表】

- ⑤ Aグループ 「SUN SUN ナビ」
- ⑥ Cグループ 「4コマ漫画が日本を救う?!～ピクトグラムの大改革～」
- ⑦ Eグループ 「目指せ！チョコク農業」
- ⑧ Hグループ 「Let's eat Okonomiyaki!」

#### 【教室発表】

- ・Aグループ 「#赤磐市に何もないなんて言わせない」  
「奉還町商店街の活性化に向けて」 「自転車で町おこし」
- ・Bグループ 「バザーによるフリマ問題への対策」 「プラスチックストローの削減」



- ・Cグループ 「将来の災害に役立つために」
- ・Dグループ 「Pet Bottles are a resource not trash」  
「To make people from other countries enjoy Japanese Hot Springs」
- ・Eグループ 「踏んで踏んで踏んでみよう！発電床！」「野菜なんて紙にしまえ！」
- ・Fグループ 「自転車のながらスマホをなぜ行うのか？」  
「Always Everyone's DOUGU ～AED使用率向上へ～」  
「大雨災害から身を守るためにはどうすればよいか」  
「高校生のプライバシー・パラドックスの有無」
- ・Gグループ 「教員の過重労働」 「共に生きる」  
「支援学級について通常学級の生徒に説明するべきか」  
「みんなで一緒にアクティブラーニング！」
- ・Hグループ 「旅館の文化を世界へ」「外国人が会陽にもたらす影響」

## 5. 「GLOBAL I」の成果と課題

「GLOBAL I」では、年度の前半でスキル学習を行い、実際に研究活動を行ったのは9月以降であった。限られた時間の中で、研究テーマを決定、計画を立て、調査、実験を経て発表できる形にまでまとめたことは評価できる。

ステージ発表に選ばれたグループについては、事前にお互いの発表を見せ合い、問題点や想定される質疑を出し合うことで、クラスでの発表に修正を加えての発表であった。どのグループも練習の成果を発揮、堂々と発表し、質問に対してもできる限りの対応をした。一方で、ステージ発表後半の2年次生による「GLOBAL II」や、岡山操山高等学校、岡山学芸館高等学校の発表では、深く掘り下げた研究内容や見やすくまとめられたスライド、興味を引きつけるわかりやすい説明などに刺激を受け、次年度への意欲を高めた。さらに、すべての発表に対し2年次生に混じって多くの生徒が挙手し、質問する積極的な姿勢も見られた。

午後の教室発表では、ステージ発表のグループを除き、各クラスから2グループずつが発表した。ステージ発表グループと同様、クラスで代表に選ばれてから修正を加えて発表に臨んだが、午前中のステージ発表に刺激を受けたようで、どのグループも堂々と発表した。教室での発表であり、体育館に比べてリラックスした雰囲気であったためか、質問にも自分たちなりに対応することができていた。発表以外の生徒は、発表年次に関係なく自分の興味あるテーマの発表会場に行き、ここでも積極的に質問する姿が見られた。

1日を通して、2年次生や他校の発表を見ることで刺激を受け、次年度の「GLOBAL II」で自分たちがすべきことを具体的に考えることができる良い機会となった。質問については積極的な姿勢は見られたが、単に疑問を發する質問から、その場にいる者の理解がより深まり、広がり、また次なる課題が見えてくるような質問へと、質問のレベルが上がることを期待したい。

## 6. 「GLOBAL II」の成果と課題

「GLOBAL II」の授業で、学類を越えて編成された各班で取り組んできた課題研究の成果を、プレゼンテーションソフトを使ってまとめ、A～Hのテーマごとに事前にグループ内発表を行い、代表を選出した。発表会当日は午前の全体会で4班、午後の分科会で20班がプレゼンテーション形式で発表した。

各班の発表では、社会の諸問題について、高校生の立場で当事者意識を持ってとらえ、改善を図ろうとする姿勢が見られた。いずれの発表も、文献調査だけでなく、現地調査やアンケートなどのフィールドワークや実験を取り入れたものであった。

午前中の全体会では、動きや語りに工夫をした発表をする班もあり、いずれの発表班も大勢の聴衆の前で堂々と発表していた。その後の質疑応答も大変活発で、時間の都合で質問を打ち切らざるを得ないほどであった。的確な質問とそれへの応答によって、聴衆全体の理解が深まる場面が見られた。午後の分科会では、10会場に分かれて発表を行い、午前同様に活発な質疑応答が行われた。聴衆が教室にあふれている会場もあった。

発表会当日に向けて、生徒たちは熱心に取り組んできたが、発表班決定から発表会までの短い期間中に他の行事もあり、とても多忙な中、昼休みや放課後を利用して取り組んでいた。課題研究の成果をプレゼンテーションソフトや論文として、よりよいものにまとめるには多くの時間、労力が必要であり、授業時間の中でどのように対応していくかが今後の課題である。

## 第5節 異文化交流の深化

### 1. 先進的な取組を取り入れた英語の授業の実施

#### (1) 実施内容

グローバル人材に求められる英語の実践的コミュニケーション能力を強化し、海外体験や国際交流の効果を最大限のものにするため、3年間の英語の指導過程や指導法、評価方法の研究開発を行う。これまで国際教養学類で指導を行ってきた様々な言語活動、例えば、スピーチ、ディベート、ディスカッションなどを他の学類の授業においても取り入れる方策を研究する。GTECの成績分析をもとに、英語力を向上させる授業展開について研究開発を行う。

#### (2) 3年間の指導過程・指導内容の策定

本年度は、研究授業による実践の共有が主な取組となり、その授業での生徒の姿を踏まえ、城東高校での3年間の授業を通して、目指すべき目標の目線合わせを行っている。本校外国語科の課題として、年次によって取り組む内容にばらつきがあることが挙げられるが、それぞれの研究授業で行われた言語活動は、どれも有効なものであり、それらの言語活動をどの段階で行うかなど、外国語科全体として授業をデザインしていくためのきっかけとなった。これらの議論は、毎週月曜3限、外国語科会議の中で行った。その際、就実大学教授小山敬一氏に、複数回来校していただき、指導・助言をいただいた。

#### (3) 指導法の改善

実践の共有、指導法の改善を目指し、以下の研究授業を行った。

日時	科目	授業内容
6月24日	総合英語（3年次国際教養学類）	スピーキング活動を踏まえたサマリーライティング
6月25日	コミュニケーション英語Ⅰ（1年次）	教科書のテーマに基づいたディベート
9月30日	コミュニケーション英語Ⅱ（2年次）	リプロダクションを中心とした四技能統合型言語活動
10月7日	コミュニケーション英語Ⅱ（2年次） *指導教諭に公開授業と兼ねる	リプロダクションを中心とした四技能統合型言語活動
12月20日	英語表現Ⅰ（1年次） *外国語指導助手との協同授業推進研修会と兼ねる	ディベート

先進的な取り組みを行う以下の学校を訪問し、授業見学、スピーキングを中心とした指導方法及び評価方法に関する情報交換を行った。

日時	訪問校
10月17日	大分県立大分上野丘高等学校
10月18日	大分県立杵築高等学校
11月22日	静岡県立三島北高等学校

#### (4) 評価方法の開発

それぞれの研究授業において、評価の観点を、科内で吟味した。それらを踏まえ、文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」拠点校指定時（平成24年、25年）に作成したCAN-DOリストの改訂に取り組んでいる。その際、次期学習指導要領における四技能五

領域、CEFR との整合性を意識した改訂を行っている。ここでも、就実大学教授 小山敬一氏の指導、助言をいただいている。

#### (5) 成果

本事業を通して、外国語科内で授業を相互に参観する機会が増え、指導方法等に関する意見交換も活発になっている。

本事業を機に、3年次での4技能型のGTEC 全員受験を8月に行った。リスニングとスピーキングにおける上位層の割合が大きかった。本事業において、スピーキングとリスニングを意識した授業展開を行ったことが要因の一つであると考えられる。ただ、これらの2技能と比べ、リーディングに向上の余地が見られたので、4技能をバランスよく伸ばさせる授業が求められると感じた。今後、開示される12月に全員受検を行った1、2年次の4技能型のGTECの結果も分析し、次年度以降の授業に活かしたい。

岡山県スピーチコンテスト優勝、ND 清心女子大学スピーチコンテスト優勝、高松大学英語弁論大会スピーチの部優勝、岡山県高校生英語ディベート大会優勝及び全国大会出場などで、スピーキング能力を評価された生徒も多い。

#### (6) 次年度に向けて

本校において、3年間で目指すべき目標の明確化し、科内で共有する。その目標設定を踏まえ、CAN-DO リストの改訂を終え、コンピテンシーベースのシラバスの開発にも着手する。研究授業を、より積極的に行い、そこで得られる知見をシラバス、CAN-DO リストに反映させる。これらの授業改善の中で、スピーキングを中心とした言語活動、評価の手法を蓄積する。

## 2. 海外研修の充実（海外文化体験研修）

本研修は、「言語活動を通じて様々な文化体験を深めること」を目的として、1年次の希望者生徒を対象に実施している。

### （1）コース

ホームステイ体験を優先しているため、本年度もオーストラリアとカナダの2コースで実施した。

#### ・オーストラリア

訪問先：ブリスベン 1家庭に本校生徒1名でのホームステイ。

研修形態：南半球のオーストラリアでは、この時期に学校が通常授業をしている。そこで、「サンドゲイト地区公立中等学校」を訪問し、交流会をしたり、授業を受けたりするプログラムを設定した。カナダコースにあるような英語レッスンもその学校にお世話になり、大学訪問や観光も含めて、充実した内容で研修が行われた。

#### ・カナダ

訪問先：バンクーバー 結果として、1家庭に本校生徒2名でのホームステイ。

研修形態：午前は語学学校での英語レッスン、午後はアクティビティやエクスカージョン、週末は各家庭で過ごすプログラムを設定した。研修には、大学キャンパスツアーなどもあり、カナダの多様な文化を肌で感じる事ができたようである。

### （2）期間と参加者

・オーストラリア：7月22日(月)～8月5日(月) 15日間 参加生徒 23名

・カナダ：7月21日(日)～8月4日(日) 15日間 参加生徒 59名

本年度は、合計82名が参加した。1年次320名のうち、約4分の1に相当する。

### （3）内容

4月の希望者説明会に始まり、合計6回の事前研修を放課後に行った。授業だけでなく部活動や学校行事などに忙しい学校生活の中で、時間を作り出すのは容易ではなかったであろう。しかし、生徒はお互いによく協力し、集中して取り組んでいた。渡航体験を踏まえて、参加生徒全員がポスターを作り、翠緑祭やオープンスクールで展示した。異なる文化に触れることで、自分自身や自分の国に対しての見方を深めるきっかけとなっている。

### （4）生徒のアンケート結果と今後の課題

Q. このプログラムに参加してどのような成果がありましたか？	オーストラリア	カナダ	計
ア. 外国への理解が深まった	18	35	53
イ. 視野が広がり、ものの考え方が変わった	14	33	47
ウ. 英語を本気でやる気になった	13	29	42
エ. 自己理解が深まり、人間的に成長した	3	18	21
オ. 日本への理解が深まった	6	12	18
カ. 英語がうまくなった	1	8	9
キ. 国際理解についてこれまでとは違った考えを持つようになった	4	18	22
ク. 日本人が「外国人に何をしてもらおうか」より「外国人のために何をなすべきか」ということを考えるようになった	3	8	11

交流会などの内容を吟味し、充実した研修プログラムが保証できるようにしていきたい。

## 海外研修の充実（学類研修）

### （１）学類研修の目的

- (a) 各学類の専門的知識を活用する体験により、知的好奇心や探究心を醸成する。
- (b) グローバルな体験により、「世界」につながる視野を醸成する。
- (c) 主体的な活動と協同する活動によりコミュニケーション力とチーム力を身に付ける。

### （２）各学類の研修目的

#### 【人文社会学類】

##### ア：全コース共通

人文社会学類では文化や社会、言語についての学び、自国や国際社会の発展に寄与できる教養と能力を身に付けることを目指す。

学類研修は、この一環として、「世界を知る」をテーマに実施し、世界の中の日本、日本の中の世界を発見する活動を通して、日本文化への理解を深めるとともに、グローバルな視点、創造力、発信力などを養うことを目的とする。

##### イ：マレーシアコース

マレーシア研修では、目的「ア」を踏まえた上で、実際に海外で英語を活用して現地の人との交流等を行うことにより、英語の活用やコミュニケーションに対する積極的姿勢の重要性を再認識することを目指す。

また、東南アジアの経済成長のダイナミズムを体感するとともに、文化・習俗・習慣を知ることにより、異文化との友好的な協力連携の築き方を考える機会とすることを目的とする。

##### 研修先：東京コース

マレーシアコース（SMK Infant Jesus Convent高校、Malaya大学との交流あり）

日 程：6月18日（火）～21日（金）3泊4日（東京コース）

6月18日（火）～22日（土）4泊5日（マレーシアコース）

#### 【理数学類】

##### ア：全コース共通

理数学類では自然科学領域の学習を深め、知的好奇心、創造性、独創性を伸ばしながら、確かな科学的思考力を身に付けることを目指す。

学類研修は、この一環として、「生命・科学技術を考える」をテーマに実施し、豊かな自然の恵みや環境保全の大切さ、科学技術の進展を体験する活動を通して、自然科学への知的好奇心を醸成するとともに、グローバルな視点、創造力、発信力などを養うことを目的とする。

##### イ：マレーシアコース

マレーシア研修では、目的「ア」を踏まえた上で、実際に海外で英語を活用して現地の人との交流等を行うことにより、英語の活用やコミュニケーションに対する積極的姿勢の重要性を再認識することを目指す。

また、大自然や野生の動植物に触れることにより、自然保護や環境問題などの地球規模の課題に関心を持ち、それらを解決しようとする姿勢を養うことを目的とする。

##### 研修先：筑波・関東コース

マレーシアコース（SMK USJ Section 12高校、Malaya大学との交流あり）

日 程：6月18日（火）～21日（金）3泊4日（筑波・関東コース）

6月18日（火）～22日（土）4泊5日（マレーシアコース）

#### 【音楽学類】

音楽学類では音楽の表現能力を高めるだけでなく、多くの創作活動の実践を通して、豊かな感性と教養を身に付けることを目指す。

学類研修は、この一環として、「音楽で世界をつなぐ」をテーマに実施する。世界の様々な民族音楽などを学習することによって国や地域による音楽の変化を学ぶと同時に、根底に流れている音楽の普遍性などにも焦点を当て幅広く学習することを目的とする。

研修先：台湾（国立台湾師範大学附属高級中学との交流あり）

日 程：6月18日（火）～21日（金）3泊4日

#### 【国際教養学類】

国際教養学類では外国や自国の言語と文化に対する理解を深めるとともに、コミュニケーション能力や積極的な態度等を身に付けることを目指す。

学類研修は、この一環として、「ことばで世界をつなぐ」をテーマに実施する。英語を使った国際交流活動を実体験し、異文化への理解を深めるとともに、コミュニケーション能力や積極的、創造的に物事に取り組む態度を養うことを目的とする。

研修先：韓国・慶南コース（慶南外国語高校との交流あり）

韓国・金海コース（金海外国語高校との交流あり）

日 程：6月19日（水）～22日（土）3泊4日

### （3）成果と課題

学類研修では、各学類の特徴を生かして主体的な学びができるように、方面や研修内容を設定している。人文社会学と理数学類は、それぞれの学類で国内1コースとマレーシアコースを設定し、音楽学類は台湾、国際教養学類は韓国を訪問した。

人文社会学類の国内コースは、鎌倉、横浜、東京都内などで多くの場所を訪れ、歴史・文化・芸術・学問・観光・経済・産業など、多岐にわたる研修を行った。本年度は「世界を知る」というテーマのもと、東京ジャーミーでのイスラム文化理解、東京グローバルゲートウェイでの英語を用いての国際理解など、日本において異文化理解を深めた。人文社会学類のうち35人は、マレーシアを訪問した。クアラルンプールやマラッカで歴史的建造物を見学するだけでなく、ホテル訪問でハラルについての理解を深めたり、現地の高校や大学での交流をしたりするなど、異文化理解を目的とした活動を行った。

理数学類の国内コースの筑波・関東コースでは、自らの興味に応じてより実りある研修を行うため、途中の行程を生物系と物理系に分けている。また、筑波大学の見学や、サイバーダイナミクススタジオでの講演・東京大学での特別講義の聴講、JAXA（宇宙航空研究開発機構）・理化学研究所など研究機関の訪問などを通じて、最先端の科学技術に触れ、研究者や研究施設の様子を肌で感じる事ができた。理数学類のうち28人がマレーシアを訪問した。首都クアラルンプールを拠点に、先端技術産業が集積するサイバージャヤや海外展開する日本企業を訪れたほか、リパークルーズでのマングローブ学習、現地の高校や大学での交流などを行い、海外への視野が広がった。

音楽学類は、昨年同様、台湾有数の国立台湾師範大学附属中学を訪れ、音楽演奏を通じたコミュニケーションを柱とする交流を通して、研修の目的を果たす事ができた。また、奇美博物館でさまざまな楽器を鑑賞するなど、音楽に関してさまざまな気づきを得た。

国際教養学類は、3年ぶりに韓国訪問に戻り、慶南外国語高校、金海外国語高校との交流を行った。寮での宿泊やホームステイも実施し、英語力をはじめとしたコミュニケーションの重要性を改めて実感できた。

学類研修にあたっては、全てのコースで事前・事後研修を行った。事前研修では、班別自主研修のコースや内容の作成、学校交流に向けてプレゼンテーション資料作成などを行い、事後研修では、個人や班ごとに、研修内容をレポートやポスターにまとめたり、プレゼンテーション資料を作成したりした。7月に学類研修発表会を行い、各コースの代表生徒が研修内容を紹介しあって、研修の成果を共有した。

学類研修は、生徒が視野を広げたり、興味関心を深めたり、コミュニケーション能力を高めたりできる貴重な体験であり、グローバルな視点を意識する機会でもある。新しい発見や気づきを得た生徒も多数おり、将来の選択肢が広がったり、改めて自己のあり方を見つめ直したりする機会にもなった。今後も、学類研修をさらに深化・充実させていきたい。

## 海外研修の充実（H30 海外修学研修の実施）

### 平成 30 年度の実施と生徒の報告

この研修は、「GLOBAL II」での課題研究の成果をもとに、海外の大学や高校、国際機関などで意見交換を行うことにより、プレゼンテーション力やコミュニケーション力を身に付けることをねらいとしている。本格実施して4年目となる今年度は、31期生（2年次生）の希望者の中から選抜された生徒10名（男子2名、女子8名）を、イギリスに派遣した。引率教員は2名であった。校内での事前研修を7回実施し、研修の目的や心得、訪問地に関するガイダンスや、課題研究の成果を英語で発表する準備、そしてフィールドワークの計画を行った。

#### （1）研修の概要

例年と同じく、Ardmore Language School を拠点に、同校の寮に宿泊しながら様々な研修を行った。研修の柱は、同年代の生徒との学校交流、オックスフォード大学訪問、ロンドンでのフィールドワークである。学校交流として、昨年度と同じく、本校手配のCranford Community College と、業者手配による Ardmore Language School に隣接する Berkshire College の2校との交流を行った。特に Berkshire College での本校生徒による日本文化紹介が大変好評で、当初は1度の予定だった交流の機会を、急遽2度に増やすこととなった。

### 研修日程

第1日目	3/2(土)	移動：岡山～羽田～ロンドン（ヒースロー空港）	寮泊
第2日目	3/3(日)	オックスフォード大学訪問 キャンパス見学、現地学生との交流、日本人研究員の講義 プレゼンテーション準備、リハーサル	寮泊
第3日目	3/4(月)	Cranford Community College 訪問 プレゼンテーション、意見交換、校内案内、交流会	寮泊
第4日目	3/5(火)	Berkshire College との交流に向けた準備 プレゼンテーション準備、リハーサル	寮泊
第5日目	3/6(水)	Berkshire College 訪問① 動物園見学、プレゼンテーション、意見交換、日本文化紹介	寮泊
第6日目	3/7(木)	ロンドン・フィールドワーク	寮泊
第7日目	3/8(金)	Berkshire College 訪問② プレゼンテーション、学校紹介、日本文化紹介 Ardmore Language School 修了式	寮泊
第8日目	3/9(土)	ダンスレッスン ナショナル・トラスト・サイト見学 移動：ロンドン（ヒースロー空港）～羽田	機内泊
第9日目	3/10(日)	移動：羽田～岡山	

#### （2）オックスフォード大学訪問

あいにくの雨模様の中、生徒たちが最も楽しみにしていたオックスフォード大学訪問が始まった。午前中は現役学生であるネイサンさん（生物学専攻）とマハシュさん（法学専攻）によるウォーキングツアーを行った。図書館の蔵書の豊富さには驚き、世界最高峰の研究環境であることを実感した。有名な「ため息の橋」



の前では全員で記念撮影をした。その後、カレッジの一室をお借りしてのセッションでは、時折冗談も交えながらご自身の経験を熱く語ってくださり、生徒たちは身を乗り出して聞いていた。オックスフォード大学に入るためには高い学力はもちろん、個性が重要であること。また、論理的なエッセイを書くための極意「PEEL」についても伝授してもらった。

午後からは、オックスフォードでポストドクター（博士研究者）をされている石井宏憲さん、オックスフォード・ブルックス大学で留学をされている小川明子さんにお話していただいた。石井さんからは研究者としてのやりがいや苦勞、小川さんからは留学するに至った経緯やオックスフォードでの学生生活の様子などをうかがうことができた。午前午後ともに、積極的な質疑を行っていた。

### (3) Cranford Community College 訪問

昨年度より受け入れていただいております、訪問は2回目になる。現地の11歳から18歳が通う学校で、様々なバックグラウンドを持つ生徒がいる。到着後は校長先生の歓迎を受けた後、グループに分かれて、「GLOBAL II」課題研究の成果を発表した。前夜の特訓の甲斐もあって、みんな自信を持って堂々とプレゼンすることができていた。その他、お互いの国のことについて話したり、チーム対抗で英語のなぞなぞをしたりして仲を深めた。

お昼は食堂でカレーをごちそうになった。昼食を食べながら、さらに交流の輪を広げることができていた。楽しい時間はあっという間で、「もっともっと時間がほしい！」と名残惜しそうな様子だった。最後に、担当のPhillip先生から一人ずつ修了証とメダルをいただいた。



### (4) プレゼンテーション準備

4日目は、スタディーセンターで翌日の学校交流の準備をした。Berkshire Collegeでは、Health&Social Care コースの生徒と交流をするということで、日本の社会福祉制度や医療制度、健康保険を紹介するプレゼンの準備をした。日本語でも説明が難しい内容だったが、生徒たちはSGH課題研究の経験を生かして素晴らしいチームワークを発揮し、熱心に取り組んでいた。最終的には1人ずつリハーサルを行い、現地スタッフによる質疑、講評をいただいた。文法、語法の訂正だけでなく、ネイティブの視点から、自然な言い回しやプレゼンテーションのコツ、心構えも教えてくださった。



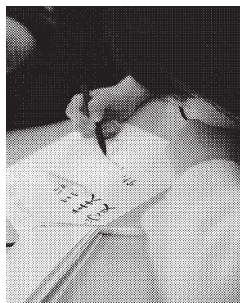
### (5) Berkshire College での交流

Health&Social Care コースの生徒と、学年を変えて2度の交流を行った。1度目は、構内にある動物園を見学した。Berkshire Collegeには飼育員を養成するコースがあるので、敷地内に小さな動物園がある。かわいいカワウソや、ミーアキャットなどたくさんの動物が見られた。その後、教室に場所を移して、自国の社会福祉制度や医療制度、健康保険を紹介するプレゼンをお互いに行い、類似点や相違点について話し合った。28名の生徒を前に、立派に発表し、質問にもしっかり答えることができた。午後からは日本文化の紹介として、折り紙、茶道、書道をそれぞれ披露した。体験コーナーではみんな熱中してい



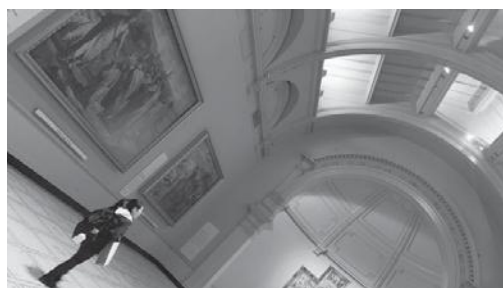
た。

2度目の交流では、空手や古武道を実演したり、城東高校についてパワーポイントで紹介し、全員で校歌を歌った。1度目と同様に折り紙、茶道、書道、そしてあやとりも追加して紹介した。ランチタイムも一緒に、和やかな雰囲気でも過ごしていた。午後からは、パークシャーカレッジの生徒たちが普段勉強していることを紹介してくれた。血圧を計ったり、聴診器を当てたりしてもらった。2度の交流でたくさん友だちをつくることができた。



#### (6) ロンドン・フィールドワーク

朝は晴れていたのに、やはり途中で雨に降られることになった。イギリスの天気は本当に変わりやすい。はじめに全員で大英博物館を訪れ、自由に見学をした。手荷物検査があるだけで、誰でも無料で入れることは驚きであった。ロゼッタストーンなど、それぞれお目当ての展示を見ることはできたが、聞きしに勝る大きさで、約2時間の見学では到底時間が足りなかった。その後コヴェントガーデンで自由に昼食をとった。フィッシュアンドチップスなど、イギリス料理を堪能できたようだった。昼食後、2班に分かれて自主研修を行った。スタッフと教員は生徒を見守り、基本的には生徒主導で地図や案内板を頼りに、時に通行人に道を尋ねながら計画を遂行した。課題研究の内容をさらに深めようと、イギリスのEU離脱についての意見を通行人に尋ねながら歩いた生徒もいた。途中、初めて地下鉄にも乗った。滞在時間を最大限にとってもらったが、それでもまだ行きたいところや見たいところがたくさんあって時間がいくらあっても足りないようだった。



Victoria & Albert Museum

#### (7) ナショナル・トラスト・サイト見学



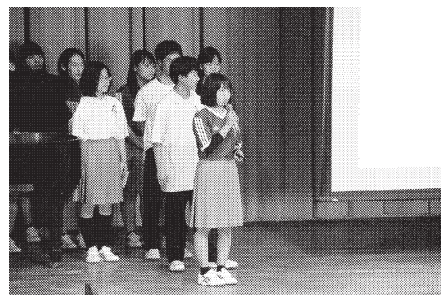
最終日に、ナショナル・トラスト・サイトの一つであるヒューエンデン・マナーを訪れた。元英国首相としても活躍したディズレーリの邸宅を見学することができた。スタッフの方に英語でガイドをしていただき、ディズレーリの少し変わった経歴や人柄に興味を引かれた。第二次世界大戦中は屋敷の地下が最高機密の空軍基地として使われていたという歴史もあり、素晴らしい建物と手入れの行き届いた庭園にイギリスの歴史と伝統を感じた。

#### (8) 研修を終えて

帰国後、全校生徒に向けて帰朝報告を行った。「イギリスの食文化」「Oxford Universityに入るには」「学校交流」「訪問した博物館や美術館」「BREXIT (イギリスのEU離脱について)」という内容で各々プレゼンテーションを準備し、発表した。パワーポイントのスライドは、あくまで表や図を見せるためのものであり、文字をたくさん書かない、スライドに

書かれていることは読まない等、研修中に教わったことを生かしながら報告を行うことができた。

研修の序盤は少し引込み思案だった生徒たちも、徐々に積極性が増していき、周りの人とコミュニケーションがとれるようになっていった。特に、ロンドンでのフィールドワーク中、街中で出くわした人に、課題研究に関する質問を投げかける姿や、学校交流時に進んで友情を育む姿を見て、生徒たちのことを誇りに思った。また、普段の教室では見られない生徒たちの一面を発見することができた。何より、志高くこの研修に応募し、共に切磋琢磨し合った仲間が、今後彼らにとってかけがえのない仲間となることを確信している。学校交流の相手校がなかなか確保できないなど課題も残るが、10名の生徒それぞれが、プレゼンテーション力やコミュニケーション力を高めることができたことと実感する、有意義な研修であった。



### (9) 参加生徒報告（代表者）

イギリスで過ごした8日間は、私の今までの人生の中で5本の指に入る素晴らしい思い出となった。日本を離れ、遠い異国の地で生活したこの研修は、私にたくさんのものを与えてくれた。

滞在期間中、何度か現地の高校生と交流する機会があった。授業では、生徒が積極的に発言をし、どの教室でも寝ている生徒は一人もいなかった。校内を歩けば、たくさんの生徒がハローと声をかけてくれ、時には手を振ってくれたり、ハイタッチをしたりした。意見交換をするときには、私の拙い英語を真剣に聞いてくれ、言葉が見つからない時は助け船を出してくれた。私に話しかけるときは、聞き取りやすいようにゆっくり、はっきり発音してくれ、わかるまで何度でも言ってくれた。また、一人一人が自分の確固とした信念や目標を持っていた。イギリスの生徒は皆、自分で自分のことを決め、確かな自分の意見を持つ、まさに自主自律を自然とやっつけてのけている。何度か行われた交流会で、一番盛り上がる話は、決まって将来の夢の話だった。私は将来、自衛官になることが夢だ。日本では否定的なことを言われることも多いこの職業。だが、現地の学生は皆「かっこいい。」「いい夢だね。」と、温かい言葉をくれ、そして自分の夢を嬉々として教えてくれた。全ての生徒が己と他者の、異なる自我や自主性を大切にしているのだと感じずにはいられなかった。

また、滞在先での活動や、ロンドンのフィールドワークで、人々の優しさにたくさん触れた。親身にプレゼンの指導をしてくれ、英語を話すチャンスがたくさん与えてくれた3人のスタッフ。迷子になりかけていれば優しく声をかけてくれたロンドンの人々。皆が優しく、温かみにあふれていた。寮を出るときに、お世話になった3人のスタッフと一人ずつハグをした。その慈しむような抱擁に、どれだけの優しさや愛を与えてくれたのかを痛感し、バスに乗っても涙が止めどなくあふれていた。この研修で、たくさんの新たな友ができ、国を越えた優しさに触れ、日本にいただけでは決して得られないつながりをつくることをできた。

あっという間に過ぎた8日間。最高の9名の仲間と助け合い、数え切れないほど様々なことを学び、楽しいなどというありきたりな言葉では言い表せないほど充実した研修となった。文化を学び、言葉を学び、自主性を身につけ、友をつくり、優しさに触れたこの研修。「帰りたくない。」と何度も思うような体験ができたことに、支えてくれた家族や先生、この研修で出会った全ての人に感謝したい。自分のあらゆる可能性を信じ、この素晴らしい体験を無駄にすることのないよう、また、イギリスで頑張る新たな友に誇れるように、自分の目標に向けて全身全霊で努力していこうと思う。



Ardmore Language School のスタッフと

## 海外研修の充実（R1 海外修学研修の計画）

「GLOBAL II」での活動を通じて、選考されたメンバーを欧米諸国へ派遣し、課題研究の成果をもとに海外の大学や高校、国際機関などで意見交換を行うことにより、プレゼンテーション力やコミュニケーション力を身に付けることをねらいとしている。本年度も10名の2年次生をイギリスへ派遣する予定である。研修内容の主な計画は次の通りである。現地高校として、新たな学校を訪問することを予定している。また、本年度はロンドン市内のホテルに宿泊するため、各研修地へのアクセスが良く、内容がさらに充実したものになるよう計画しているところである。

- ① University of Cambridge で大学見学、フィールドワーク、日本人留学生との意見交換会
- ② ロンドン・フィールドワーク（複数方面に分散）
- ③ Cranford Community College で、交流活動（プレゼン、ディスカッション等）
- ④ ロンドンのビジネス地区、シティー地区見学
- ⑤ 現地高校生徒との交流会（訪問校は調整中）
- ⑥ 国際機関 The Commonwealth Marlborough House 訪問
- ⑦ ウィンザー城見学

なお、旅行日程の概要を下に示す。

### 旅行日程（予定）

月日	地名	時間	内容
3/6(金)	岡山空港発	07:05	JL232
	羽田空港着	08:15	
	羽田空港発	11:30	JL43
	ヒースロー空港着	15:10	
3/7(土)～ 3/12(木)	ロンドン 市内ホテル宿泊		上記①～⑦の研修 (現時点では調整中)
3/13(金)	ヒースロー空港発	19:00	JL44
3/14(土)	羽田空港着	15:55	
	羽田空港発	19:50	JL241
	岡山空港着	21:10	

### 令和元年度 海外修学研修実施までのスケジュール

日程	時間	場所	内容
10月 30日 (水)			応募〆切
11月 12日 (火)			希望理由書提出〆切
11月 18日 (月)			一次(書類)選考結果発表
11月 21日 (木)	16:00～ 18:30	e-スタジオ	応募者面接
11月 26日 (火)	職員会議後	指導会議室	選考会議

11月 29日 (金)			結果発表
12月 18日 (水)	16:20~ 17:30	e-スタジオ	第1回事前研修 (業者、保護者、生徒)
1月 9日 (木)	16:20~ 17:30	PC教室	第2回事前研修 (業者、生徒)
1月 15日 (水)	16:20~ 17:30	PC教室	第3回事前研修 (業者、生徒)
1月 29日 (水)	16:20~ 17:30	PC教室	第4回事前研修 (生徒)
2月 5日 (水)	16:20~ 17:30	PC教室	第5回事前研修 (生徒)
2月 19日 (水)	16:20~ 17:30	e-スタジオ	第6回事前研修 (業者、保護者、生徒)
3月 4日 (水)	未定	未定	出発直前打ち合わせ
3月 6日 (金)			出発
3月 14日 (土)			帰国
3月 19日 (木)	未定	体育館	終業式にて帰朝報告

### 令和元年度 海外修学研修 事前研修計画

	日時	場所	内容
第一回	12/18 (水) 16:20-17:30	e-スタジオ	業者説明会 (旅行計画の詳細、旅行代金の支払い、海外旅行保険加入の案内など)、事前研修計画の説明 ※保護者参加
第二回	1/9 (木) 16:20-17:30	PC教室	キックオフガイダンス (目的再確認、海外研修の心得など)、ロンドン・フィールドワーク準備、研究テーマ設定
第三回	1/15 (水) 16:20-17:30	PC教室	グローバル社会で活躍するために (アイデンティティ、ポジティブシンキングなど)、プレゼン準備
第四回	1/29 (水) 16:20-17:30	PC教室	ロンドン・フィールドワーク準備、プレゼン準備、大学交流準備、高校交流準備
第五回	2/5 (水) 16:20-17:30	PC教室	ロンドン・フィールドワーク準備、プレゼン準備、大学交流準備、高校交流準備
第六回	2/19 (金) 16:20-17:30	e-スタジオ	業者説明会 (集合、旅程詳細、服装、持ち物、出入国書類、海外旅行保険証など) ※保護者参加

### 3. 海外姉妹校・提携校等の受け入れ、外国人留学生の受け入れ

#### (1) 海外交流校の受け入れ

本校には韓国に、金海外国語学校、慶南外国語学校2校の交流校がある。毎年、本校国際教養学類2年次生が6月に学類研修の一環として両校を訪問し、9月には両校からの修学旅行の受け入れを行うという相互訪問による交流を行っている。今年度については、本校からの訪問は行われたが、韓国からの受け入れについては、諸般の事情により残念ながら取りやめとなった。これまで親睦を深めている大切な交流校であり、今後も引き続き交流を継続していきたい。

#### (2) 外国人留学生の受け入れ



本校では、長期留学生の受け入れも積極的に行っている。ホストファミリーを本校生徒の中から募集し、学校生活でも家庭生活でも留学生と交流する機会を設けている。本年度はのべ2名の留学生を受け入れた。

1人は、平成30年9月から令和元年6月の約10ヶ月間、ドイツ・ベルリンより留学していたヤン・マルティン・ゾマーさんである。今年度は3年次国際教養学類のクラスに所属し、授業だけでなく、剣道部の部活動にも積極的に取り組んでいた。日本語の学習にも励み、かなり上達した。プライベートでも友人数人とスノーボードに出かけるなど、学類に関係なく様々な生徒と交流を深めることができた。また、昨年度は「GLOBAL II」の授業において、友人と協力して毎日放課後に課題研究に取り組み、代表グループとして見事東京で研究成果を発表した。文武両道を目指すヤンさんの姿は、多くの生徒に良い刺激を与えた。

もう1人は、ドイツ・リュネブルクより留学しているマレーネ・ソフィ・ルチェさんで、令和元年9月から令和2年6月末まで滞在することになっている。マレーネさんは、語学、体育を中心に、授業を主体的に受講し、空き時間も熱心に日本語の勉強に励む姿が見られる。その前向きで明るく穏やかな人柄もあり、学校にすっかり溶け込み、日本語での会話もかなり上達している。彼女の留学の大きな目的の1つが、日本の文化と言語に触れることである。将来は日本で英語教師になることを目指し、日々学習している。また、部活動としてダンスにも取り組んでいる。自国とは大きく異なる長時間の学校生活ではあるが、いつも笑顔で精力的に励んでいる姿から、周囲に愛される存在となっている。来日前には日本語を約1年間学んでいたということで、訪日時には簡単な挨拶ができていた。最初のうちは聞き取り、発話ともに苦労していたものの、現在は日常生活には支障がないほどに上達してきている。本校文化祭である翠緑祭では、2年次国際教養学類のクラスメイトとともに英語劇に挑戦した。また、11月には本校で中学生を対象に行われたスピーチコンテストにおいてもモデルスピーカーとしてスピーチをしてくれた。感じたことや、日々の生活のことなど、ネイティブのような流暢な英語でスピーチを行っており、本校生徒に大きな影響を与えている。



#### 4. 岡山大学外国人留学生との交流

##### (1) 目的

グローバル社会において異なる文化背景を持つ人々と意思疎通を図り、相互理解を深める一助としての英語コミュニケーション能力の向上を目的とする。

##### (2) 目標

岡山や日本の理解を深めると同時に異文化理解を深め、グローバルリーダーとしての資質・能力の土台作りを行う。

##### (3) 募集

岡山大学に、“Cultural Exchange Day at Okayama Joto High School” のチラシを配布し様々な国籍の外国人留学生を 10 名程度募集する。

##### (4) 実施日・実施場所

- ・ 第 1 回 令和元年 12 月 18 日（水） 5・6・7 時間目・本校セミナー教室
- ・ 第 2 回 令和 2 年 2 月 19 日（水） 5・6・7 時間目・本校セミナー教室

##### (5) 参加者

本校国際教養学類生徒 60 名

岡山大学外国人留学生

第 1 回 13 名（ベトナム 3・韓国 2・ガーナ 2・中国 1・アフガニスタン 1  
エジプト 1・ケニア 1・タンザニア 1・バングラデシュ 1）

第 2 回 10 名（エジプト・マラウイ・バングラデシュ・アフガニスタン・ガーナ  
ベトナム・ケニア・マレーシア・インド・イエメンそれぞれ 1 名）

##### (6) 内容

###### ・ 第 1 回

国際教養学類生徒と岡山大学外国人留学生が事前にそれぞれの国・特徴的な文化・伝統行事等についてのプレゼンテーション資料を英語で作成しておき、当日は生徒 5～6 人と外国人留学生 1 人が 1 グループとなりプレゼンテーションと質疑応答を行った。各回 15 分で行い、4 回のローテーションを行って交流を深めた。

###### ・ 第 2 回

国際教養学類生徒（5～6 人）と岡山大学外国人留学生（1 人）が 1 グループとなり、生徒が留学生にインタビューを行い日本と外国人留学生の出身国との相違点を見つけ英語でプレゼンテーションを行って交流を深めた。

##### (7) 成果

多国籍の外国人留学生とコミュニケーションを図ることで、メディアとは異なる意見を聞いたり情報を得たりして、主体的に物事を判断することの重要性を学んだ。

自分の考えを伝えたり相手の意見をしっかりと理解したりするために、更なる英語力の向上が必要であると自覚し努力を続けるようになった。

岡山や日本について、更なる理解の必要性と説明能力の向上を目指すようになった。

## 5. 今年度の成果や課題、次年度の取組

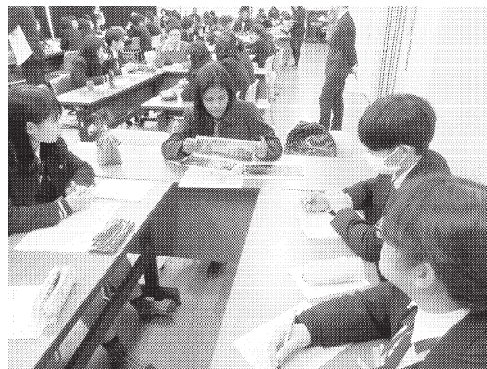
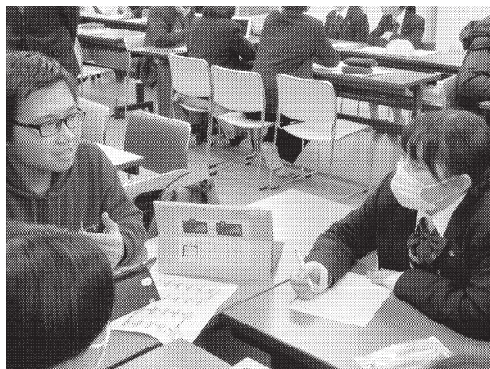
今年度、すべての年次において、スピーキングの指導を中心とした授業改善、研究授業を行った。そのような授業を経験した生徒たちの中には、各種スピーチコンテストでの優勝、ディベート全国大会出場など、スピーキング能力を高く評価された者も多い。また、学校全体としても、高いスピーキング能力を養成できていることが、すべての年次が受検した GTEC の結果からも伺える。次年度は、研究授業を質、量ともにさらに充実させ、生徒の能力を伸長させる授業、言語活動を外国語科全教員で、共有してゆく。また、次期学習指導要領を見据えた CAN-DO リストの改訂にも着手した。次年度は、CAN-DO リストを実際に活用し、コンピテンシーベースのシラバスに着手していく予定である。

そして、多様な海外研修、提携校や留学生等の受け入れは、授業で培っている英語の力を試し、自信を深めたり、更なる学習へのきっかけになったりしている。平成 30 年度海外修学研修では、日本文化や「GLOBAL II」の研究成果を、英語で発表し、現地の学校でも高い評価を受けた。その発表の前には、現地スタッフに、ネイティブの視点からアドバイスをいただき、自然な言い回しなどを学び、発表に磨きをかけることができた。オックスフォード大学での現地学生との交流は、英語学習だけでなく学習全般に対する意欲を高めてくれる得難い機会となった。当然、フィールドワークや現地での生活自体が、最良の英語学習、異文化体験の場であった。帰朝報告では、現地で学んだことを生かして、英語で報告を行った。令和元年度も、同様の研修を 3 月に実施予定である。

1 年次希望者対象の海外文化体験研修をオーストラリア、カナダの 2 コースで行った。また、2 年次では、人文社会学類及び理数学類希望者対象にマレーシア、国際教養学類対象に韓国、音楽学類対象に台湾で、海外での学類研修を行った。これらは、多くの生徒の英語学習、異文化体験の場となっている。こちらも、次年度、同様の研修を実施予定であるが、諸般の事情を鑑みて、国際教養学類の学類研修は、シンガポールで実施予定である。

また、本校での提携校や留学生の受け入れも、生徒にとっては、大きな刺激となっている。今年度は、提携校 1 校のみとなったが、次年度以降も、生徒の成長に資する交流を行っていききたい。日々、生活を共にする長期留学生の存在は、生徒たちにとって得難いものである。単身、長期間、異国の地で過ごす彼らの姿、彼らの外国語運用能力の高さは生徒たちを大いに刺激している。

国内外問わず、交流を行う際は、様々なことを考慮する必要があり、計画の変更を余儀なくされる場合もあるが、生徒の成長に資する重要な機会なので、次年度以降も最良の形を模索していかなければならない。その交流をより実りあるものにするため、生徒の英語運用能力を伸長させるための授業、指導体制の充実を図る。今年度、授業実践、海外交流の機会が国際教養学類に限定されたものもあるので、これらの取組をいかに学校全体に波及させていくかも次年度の課題である。



## 第6節 自主性・自律性を育成する取組

### 1. 社会貢献活動の実施

#### (1) 活動内容について

社会貢献活動では生徒課が主体となり、1年次生を対象に全員参加を基本として実施した。これらの活動は本校で定着している活動であるが、地域に貢献する目的で実施していることを再認識させることで、生徒の意識は高まったといえる。また、今後は学類の特性や生徒の興味・関心に応じて参加できるようにするため、試験的に活動内容の分野を分けることにした。その1つとして、小学生学習支援ボランティアにおいて、勉強を教えるだけでなく、将来スポーツ系の指導者を目指す生徒は、スポーツの支援をおこなえるようにした。

#### ① 生徒課主催の社会貢献活動の参加実績

- ・あわじ宿泊研修清掃活動（1年次生徒全員）
- ・小学生学習支援、スポーツ支援ボランティア（1年次生徒全員、2年次8名）
- ・献活デー（1年次全員）
- ・吉備路ウォーク清掃活動（1年次全員）
- ・東岡山駅本校専用駐輪場清掃（各部活動により年間と通して実施）

#### ② 活動の様子

あわじ宿泊研修清掃活動



小学生学習支援ボランティア



小学生スポーツ支援ボランティア



献活デー（保育園）





## 献活デー（学童保育）



## 地域清掃（部活動有志）



### ③ 生徒の感想

#### (a) 小学生学習支援ボランティア

ただ答えを教えるだけでなく、どうすれば児童が自分の力で答えにたどり着くか、いろいろ工夫しながら接することができた。教えることの難しさを感じたが、上手く伝わったときは大きなやりがいを感じた。一緒に取り組む中で距離が縮まり、スムーズな活動を行うことができた。この経験を将来に生かしていきたい。

#### (b) 小学生スポーツ支援ボランティア

今まで小学生と接する機会が少なく、最初は戸惑いがあったが、一人ひとりが楽しく活動できる難しさを感じる一方で、接していくうちに関係が築かれていくと徐々に盛り上がり、充実感や達成感があった。子ども達の楽しそうな表情を見ることで、教えることの魅力を味わうことができた。

#### (c) 献活デー

芥子山幼稚園で、園庭の整備と運動会準備の手伝いを行った。トンボを使用して運動場の凸凹を平らにした。20人で行ったが意外と時間がかかり力仕事であった。運動会準備では、玉入れの玉を作り、テープを貼る単純な作業だったが時間がかかった。他には、紙で薔薇を破れないように丁寧に作るのに苦労した。行事の準備は、私たちが知らないところでされていることを改めて実感した。1時間という大変短い時間だったが、園の職員の方に大変喜んでいただいたのが印象的だった。

## 2. ボランティア活動の実施

### (1) 活動内容について

これまで、一般の募集によるボランティア活動への参加はアナウンスすることなく任意だったが、今年度より、職員室前の廊下にボランティア・インフォメーションボードを設置しボランティア活動のアナウンスと募集を行った。生徒課主催の社会貢献活動およびボランティアの情報だけでなく、学校に依頼される外部のボランティア活動についても掲示を行い、生徒に周知している。

#### ① ボランティア・インフォメーションボードによる募集の参加実績

- ・岡山市夏のボランティア 30名
- ・瀬戸内市夏のボランティア 3名
- ・旭川荘夏祭りボランティア 6名
- ・ファジアーノ岡山 ホームゲーム ハーフタイム（ダンス部による演技）
- ・岡山マラソンボランティア 50名
- ・さと×まちフェスタ 8名

## ② 活動の様子

岡山マラソンの受付



さと×まちフェスタ



## ③ 生徒の感想

### (a) 岡山マラソンボランティア

今回初めて岡山マラソンのボランティアに参加した。ランナーの皆さんに声をかけ、元気になってもらおうという気持ちで望んでいたが、笑顔で最後まで走り抜く姿を見て、逆に勇気をもらうことができた。また、「ありがとう」という言葉をたくさんかけてもらい、自分も誰かの役に立てることができると自己肯定感が高まった。

### (b) さと×まちフェスタ

普段知ることができないようなことを、実際に体験して学ぶことができた。特に、イベントを訪れた人達との交流や、店先での接客などといった経験は、身をもって体験として、自分にとって非常に大きな財産となった。また、準備や片付けなどに関しては、想像以上の大変さを目の当たりにし、イベント開催に関わった方達の陰の努力を肌で感じることもできた。

## 3. 生徒会活動や委員会活動の活性化

### (1) 活動内容について

これまでの既存の取組は、活動のねらいを明確にして継続して実施した。今年度は、新たに生徒自ら「代表委員会」と称して、これまで行われていなかった学校生活における問題点について議論する場を考案した。これらは生徒会執行部を中心に行われ、今後は認知度を高め、より多くの生徒の参加と問題提起を呼び掛けていく。委員会活動では、代表委員会と連携を図り、これまでの活動と合わせて、委員会の特性を活かした内容を考えて実践することができた。

#### ① 主な生徒会活動

##### (a) リーダー研修会

年次を越えた交流の中で、岡山城東高校の今を見つめ直し、よりよい学校生活の実現に向け意思の統一を図ることを目的としている。6月と11月の年2回、2日間かけて活動を行った。討議、ディベートの内容を執行部の生徒が事前に考え、当日に執行部・各種委員長・室長・有志が集って議論を交わした。

##### (b) 六校交流会

岡山市内六校の執行部員が集う研修会。年2回開催で、今年の前期は岡山城東が開催校となって執行部が主体的に準備・運営を行った。テーマは分かりやすい説明の仕方、校則の検討など、開催校が話題を提供し、情報交換を行う。

(c) 代表委員会

生徒会長の発案でできた新たな集い。執行部・各種委員長・評議員が参加した。クラス意見箱で出た案件から、生徒の力で実現可能なものを検討し、実行する。

② 活動の様子

リーダー研修会（討議）



リーダー研修会（ディベート）



六校交流会



代表委員会



③ 生徒の感想

(a) リーダー研修会

ディベートの議題について自主性をもって話し合い、考えを深めることができた。普段リーダーである人が非リーダーになった時、どのように自主性をもって行動するのが大切だと気付いた。

(b) 代表委員会

自主性をもって各自でも活動することも大切だが、集団としてつながりが形成された中でどれだけ存在感を出していくかということも同様に大切だと感じた。

④ 主な各種委員会の活動

(a) 代表委員会で議論した内容を各委員会で分担して活動

代表委員会で出た案件で、各委員会で対応できるものは何かを話し合い、作業を分担して、行えるようにした。現時点ではそこまで多くの活動はできていないが、今後クラス意見箱で出た意見に対して、委員会で対応できるものは積極的に委員会で対応していく予定である。話し合いの様子から、みんなが過ごしやすい学校づくりに貢献していきたいと考えている様子が見られた。

(今年度の実施したもの)

- ・トイレの消臭剤を増やす→厚生課長に相談し、実際に数を増 (美化委員会)
- ・男子トイレへ暖簾を設置する→事務へ交渉、現在検討中 (美化委員会)
- ・更衣室ロッカーの整理整頓 (体育委員会)

(b) 各委員会で実施した内容

例年通り実施しているものや今年度から新たに取り組んだものもあり、各委員会が活発に活動した。主体的に行動し、学校をよりよくしていこうという意識が見られた。

(実施例)

- ・パン購入時の列整備 (風紀委員会)
- ・あいさつ運動 (風紀委員会)
- ・個人ロッカーの施錠点検 (美化委員会)
- ・自転車点検 (交通委員会)
- ・鍵かけコンテストへの参加 (交通委員会)
- ・地域愛育委員会との連携 (保健委員会)

パン購入時の列整備



あいさつ運動



自転車点検



保健委員会と地域愛育委員との展示



#### 4. 今年度の成果や課題、次年度の取組

##### (1) 社会貢献活動について

###### ① 成果

- ・1年次生対象の活動が主になるが、全員が貢献活動に携わることができた。
- ・毎年継続的に実施できているので、ボランティアを受け入れる事業所にとって1つのベントとなっている。

② 課題

- ・ 1年次生のみ活動になっている。
- ・ 年間で1～2日しか実施できていない。
- ・ 天候によって予定通りの活動ができない可能性がある。

③ 次年度の取組

- ・ 1～3年次生が興味や関心に応じて参加できる機会を増やす。
- ・ 参加できる時期を考慮する。
- ・ ジョトスタ（学習支援ボランティア）では、学類の特色を活かした内容とする。

(2) ボランティア活動について

① 成果

- ・ ボランティア・インフォメーションボードによるアナウンスにより学校主催（生徒課主催）以外の一般ボランティアへ生徒が約100名参加した。
- ・ コンソーシアムの助言により、ボランティア活動の幅が広まった。

② 課題

- ・ ボランティアの募集期間や人数のマッチングが難しかった。
- ・ 部活動や学校行事（考査期間など）と重なり参加したいが参加できないケースがあった。
- ・ 継続して参加してほしいというボランティア先の要望に対応できなかった。
- ・ 1年間または3年間を見通した参加計画を立てづらい。

③ 次年度の取組

- ・ 年間のボランティア情報を示して、参加計画を立てられるようにする。
- ・ 学類の特色や進路に応じて参加できるようなボランティアの情報を提供する。
- ・ 継続して参加できるボランティア先とのマッチングを行う。

(3) 生徒会活動や委員会活動の活性化について

① 成果

- ・ 代表委員会を設置するなど、生徒主体で活動内容を議論する場が増えた。
- ・ 既存の活動内容を見直したり精選したりすることができた。
- ・ 批判的思考で、既存の行事・活動やルールについて見直すための意見交換ができた。

② 課題

- ・ 校内の活動に留まっている。
- ・ 深く掘り下げた意見が出されていなかった。
- ・ 実行するまでに時間がかかった。
- ・ 委員会の特性により、活動内容に偏りが出てしまった。

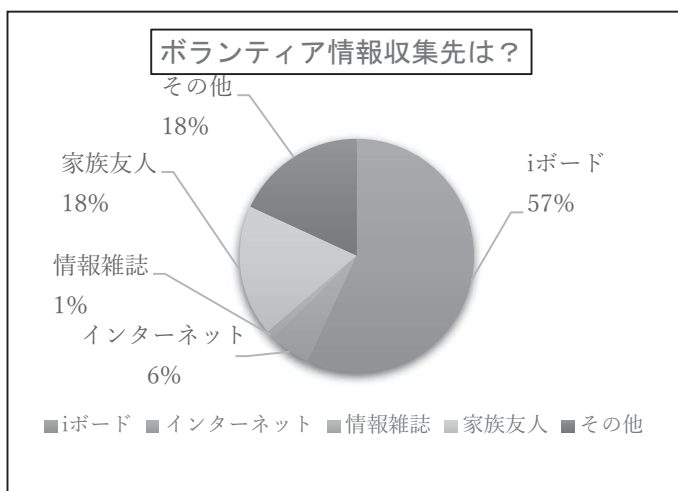
③ 次年度の取組

- ・ 校内活動と校外活動のバランスを考慮する。（ボランティア活動との関連を含む）
- ・ 事前に活動内容をリサーチさせ情報交換の場を設定する。
- ・ 教員をはじめ大人との座談会や折衝の場面を設定する。
- ・ 生徒会活動、委員会活動の情報や報告を校内外へ発信させる。

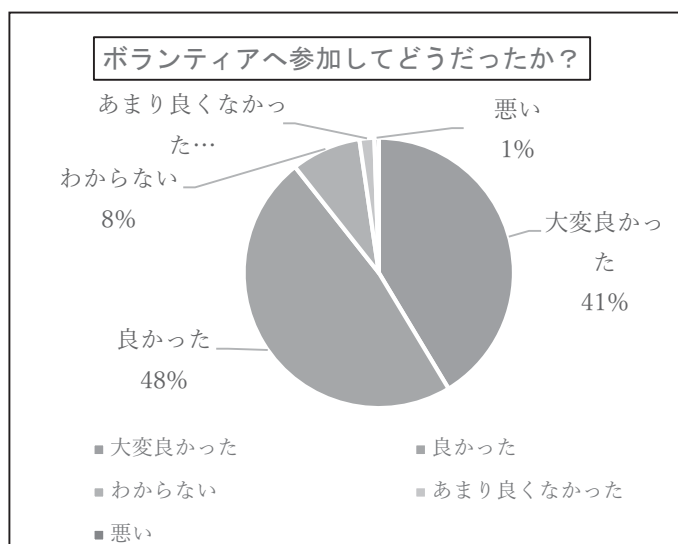
#### (4) アンケート結果からの分析

##### ① 成果

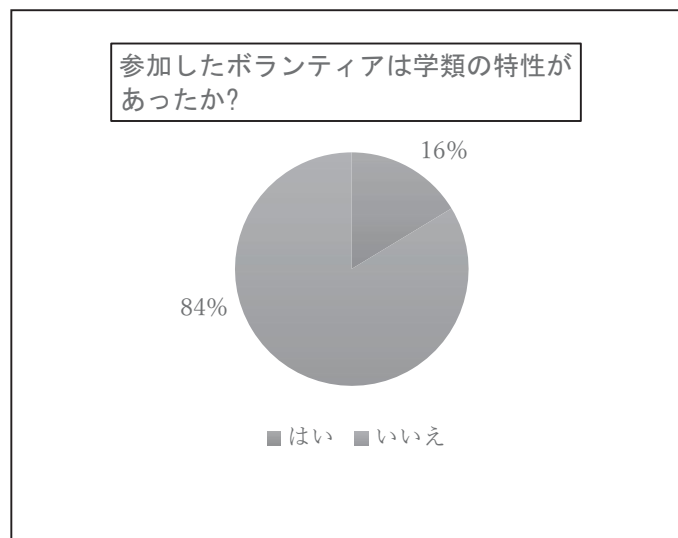
(a) ボランティア・インフォメーションボードの活用について、一般ボランティアへ参加した生徒で、57%がこのボードの情報を利用したことから、ボードの設置は効果があったといえる。



(b) ボランティアへ参加した生徒のうち、89%が良かったと回答している。参加する意義をきちんと捉えることができ、「貴重な体験ができた」とアンケートには肯定的な意見が多かった。



(c) 参加したボランティアは学類の特性（人文・理数・国際・音楽）とは、関連つけられていなかったため、今後は関連するボランティア活動を提案したい。



## 第7節 カリキュラム開発

### 1. カリキュラム・マネジメントの推進

#### (1) 目的

本事業において、生徒に習得させる資質・能力として「創造的・批判的思考力」「高度な英語運用能力」「グローバルな視野と多様性の理解」「自主的・自律的な行動力と社会貢献意識」を設定している。これらの資質・能力を習得させるためのカリキュラム開発であり、それらのカリキュラムが生徒の成長に寄与しているかどうかを検証するためのカリキュラム・マネジメントである。本来は、すべての教育課程に対して行うべきカリキュラム・マネジメントであるが、本事業においては地域との協働による探究的な教育活動に焦点をあてて行うことで、生徒の資質・能力の変容をより把握しやすくなるであろうと考えている。すなわち、カリキュラム・マネジメントの推進により、本事業の成果目標の達成度を測りながら生徒の取得すべき資質・能力を伸長させることを目的としている。

#### (2) カリキュラム・マネジメントの実施に向けて

##### ① 経緯

本事業に特化したカリキュラム・マネジメントでは、一過性のものとなり継続的にカリキュラムを見なおしていくことができない。そこで、教科・科目、学校行事、生徒会活動などを有機的に結びつけながら学校全体としてのカリキュラム・マネジメントの実施方法を模索してきた。つまり、将来的に令和4年度から実施される学習指導要領に対応できるようにシステムを構築する必要がある。そのシステムを構築していく中で、本事業に流用できる部分を試験的な運用として実施することで、本事業の目的に資することができ将来的な本校の課題であるカリキュラム・マネジメントの実施に向けた準備もできると考えている。現在、計画しているものは青森県立青森高等学校のカリキュラム・マネジメントを参考にしている。

##### ② 概念 (Concept)

図1は、本校のグランドデザインを抜粋したものである。

本校の学校教育目標にある「進取の気性を持ち、自主的・自律的に行動していく態度を養う」を基に、「めざすべき生徒像」の一つとして「自主的・自律的に行動することのできる生徒」をあげている。

これをカリキュラム・マネジメントの中核をなす概念 (Concept) としている。

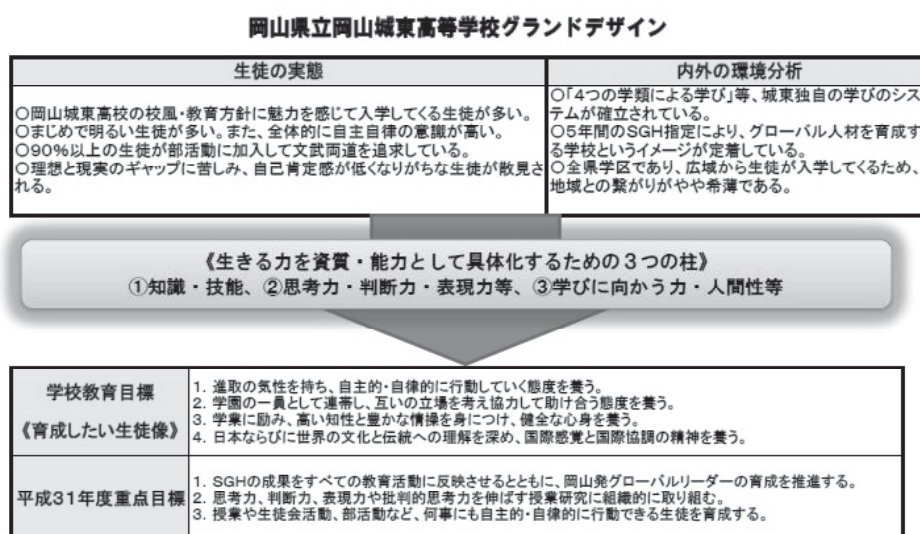


図1

### ③ システム（Phase I～Ⅲ）

#### Phase I

- ・ グランドデザイン
- ・ 城東高校で育みたい 「10の資質・能力」（学びのポータル）  
「基礎学力」「論理的思考力」「批判的思考力」「課題解決能力」  
「コミュニケーション能力」「自己表現力」「自己管理能力」「グローバルな視野」  
「人を大切にする心」「ICT活用能力」  
図2は達成困難度を球の大きさを表した概念図である。
- ・ 学校行事等と「10の資質・能力」の関連づけ
- ・ 「熟達スケール」（羅針盤＝共通言語）  
「習得」 → 「上達」 → 「熟練」 → 「探究」  
資質・能力の到達度を表す基準となるものである。

#### Phase II

- ・ 教育課程
- ・ 「10の資質・能力」のルーブリック
- ・ Competency ベースのシラバス

#### Phase III

- ・ 実践すべき課題  
授業、考査、評価等の見直し

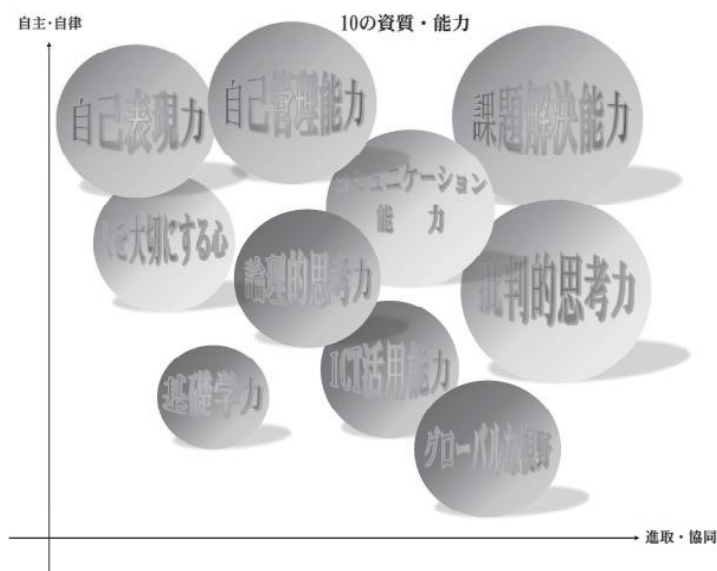


図 2

### (3) 進捗状況

現在のところ、Phase I がほぼ完成しつつある。この中の「城東高校で育みたい 「10の資質・能力」（学びのポータル）」と「熟達スケール」（羅針盤＝共通言語）を組み合わせで作られるルーブリックやシラバスは来年度以降に検討していく予定である。「GLOBAL I」に関しては、このシステムを流用してシラバスを作成している。詳細は、次の「2. GLOBAL I の評価」で紹介する。このシラバスを使った評価は、来年度に同1年次、他年次と比較することで生徒の変容のエビデンスとすることができる。それらを基に、カリキュラム・マネジメントを行っていく予定である。

他にも、行事との紐付けにより振り返りに利用しようと考えている。さらに、生徒、保護者、地域との共通理解（Consensus）を構築することも必要である。これは、「社会に開かれた教育課程」の確立に繋がるものである。

今年度の成果と課題については、「5. 今年度の成果や課題、次年度の取組」に掲載している。



## 2. 「GLOBAL I」の評価

### (1) 評価方法の検討

SGHでは「GLOBAL I」「GLOBAL II」「GLOBAL III」において、事細かにルーブリックやシラバスを作成していたが、その取組の成果が一般の教科・科目に反映されていたのかと言われると活かされていないといわざるを得ない。つまり、「GLOBAL」の評価は「GLOBAL」の中でのみ完結しており、国の指定が終われば何もなかったことになってしまっている。それでは、まさに宝の持ち腐れである。指定事業で得られた経験や成果を今後活かしてこそ本校にとってプラスとなる事業ではないだろうか。負担だけが教師に残るのでは、生徒の資質・能力を伸ばすことなど到底できはしない。

そこで、現在検討中のカリキュラム・マネジメントの手法を取り入れることができないかと検討した結果、現段階で決まっていることから「城東高校で育みたい「10の資質・能力」(学びのポータル)」と「熟達スケール」を組み合わせて、シラバス(評価規準)を作成することにした。これは、正式なカリキュラム・マネジメントではないが、試験的な運用による実験的なものと考えてもらえればよい。これが絶対的なものではなく、今年度運用することで、問題点や改善点を浮き彫りにし、将来的なカリキュラム・マネジメントの正式導入に向けて修正・改良を行っていこうと考えている。

本事業の「GLOBAL I」は「総合的な探究の時間」に行われており、SGHにおいて行われていたSGHの特例を用いて行われた「GLOBAL I」とは異なる。以前は、学校設定科目「GLOBAL I」として評定を付ける必要があったため、観点に基づいて評価できるようすべての活動を点数化することで評点を計算していた。そのため、かなり煩雑な作業を担当者に強いこととなり、その反省を踏まえて持続可能な評価方法を検討してきた。

最終的な評価は、文章表記になるので担任の主観によって決定するところが大きい。ただし、文章表記だからといって何らかの基準となるものがなければ評価のしようもない。さらに、1年次全体での評価に偏りがあってはいけいないので、評価者である担任が生徒の活動を公平公正に評価できるような指標を考える必要がある。その指標として、図1のシラバス(評価規準)を利用することにした。

このシラバスの作成には、生徒にも関わってもらっている。自分たちの活動を自分たちでも評価できるように生徒の言葉も使わせてもらった。SGHでは評価は専ら教師のみが行っていたが、今回は生徒による自己評価も参考資料となるような仕組みを取り入れようと思う。

当然、シラバスだけで評価するわけではないので、1年間の探究活動を通して評価できるようにしなければならない。そのためには、ポートフォリオを活用することが有効であると考えている。今年度より、Classiによりポートフォリオを電子化して貯めていくことが可能となっている。これにより、探究活動の振り返りが容易にでき、生徒自身が自分の成長や変容を実感できるようになっている。また、教師は生徒の実態を短期的にも長期的にも把握しやすくなっており、「GLOBAL I」の評価においても十分に参考となるものである。

科目	GLOBAL I (総合的な探究の時間)	単位数	1	担当教	
		習得年次	1		1年次所属教員
目標	課題研究を行うために必要なスキルを習得する。 ・スキル学習や習得した技能や企業訪問で得た知識から、SDGsに関連する身近な課題を見つける。 ・SDGsに関連する身近な課題について調査・研究し解決方法を提案する。				
●何が出来るようになるか【どのように資質・能力を身に付けていくのか】					
評価の観点 学びの三要素	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性		
新 達 ス ケ ー ル	S 探究 (究める)	自分たちの研究を論文やプレゼンまとめることができ、他者にしっかりと伝えることができる。	課題の探究を繰り返すことで、新たな課題を見つけ研究をさらに進めることができる。	自分たちの課題研究をもとにより大きな課題に取り組み姿勢がみられる。	
	A 熟達 (慣れる)	自分たちの仮説を検証するために学んできたスキルを活用できる。	自分たちの仮説を検証することができ、考察や新たな仮説を導き出せる。	地域の課題解決に向けて仮説を立てそれを検証して検証することができる。	
	B 上達 (わかる)	考えを整理するためにブレインストーミングやジョググツール等を利用できる。	リサーチクエストに対する仮説を立て、そのための研究計画を立案できる。	グループで情報を分析しながら地域の課題を発生しようと努力することができる。	
	C 習得 (できる)	スキル学習(論文の書き方、文献調査、実験検証、統計等)の内容を理解できる。	テーマを決め、リサーチクエストを考え出すことができる。	仲間やニュースから社会で起きていることについての情報を集めることができる。	
10の資質・能力	【論理的思考力】 【ICT活用能力】	【課題解決能力】 【批判的思考力】	【コミュニケーション能力】 【グローバルな視察】		
評価方法	授業に対する姿勢、課題に取り組み態度、グループによる相互評価、プレゼンテーションの内容、発表の様子等により総合的に評価				
●何を学ぶか【授業内容】					
1 学期	・スキル学習(国語・公民・数学・理科・情報) ・企業訪問 ・講演会 ・ルーブリック作成 ・リサーチクエストを考え ・仮説を立て、研究計画を作る ・調査・研究を行う ・研究論文を作成する。				
2 学期	・発表用プレゼンテーション作成 ・課題研究発表会				
●何を学ぶか【教材】					
・課題研究メソッド ・各教科のスキル学習用プリント					
●どのように学ぶか【主体的・対話的で深い学び】					
・グループワーク等によるスキル学習 ・知識等によりリサーチクエストの決定 ・シンキングツールにより仮説を立てる ・情報収集、アンケート、フィールドワーク等により 調査研究を行う ・論文を作成する					

図 1

## (2) 評価方法

具体的な評価には以下のものを参考資料と考えている。

- ・スキル学習の成果（グラフコンクール出品者に加点）
- ・「GLOBAL I」のクラス発表における評価アンケート
- ・「GLOBAL I」についての様々なアンケート（ポートフォリオ）
- ・シラバスによる自己評価、教師による評価（図2）

これらを、評価のためのエビデンスとしながら、担任が生徒個人個人の到達度を「学びの三要素」による3つの観点で評価していく。その評価を「総合的な探究の時間」の文章表記に反映させていく。

今回、「学びの三要素」を採用したのは「GLOBAL I」は「総合的な探究の時間」の中で行われており、「総合的な探究の時間」は令和4年度実施の「学習指導要領」の先行実施であるからである。将来的には、全ての教科・科目で「学びの三要素」に基づいたCompetency Baseのシラバスを作成し、それに乗っ取った観点別評価を実施する予定である。

### ◆ 何ができるようになるか [どのように資質・能力を身につけていくのか]

評価の観点 学びの三要素		知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
熟達 スケール	S 探究 (究める)	自分たちの研究を論文やプレゼンをまとめることができ、他者にしっかりと伝えることができる。	仮説の検証を繰り返すことで、新たな課題を見つけ研究をさらに進めることができる。	自分たちの課題研究をもとにより大きな課題に取り組む姿勢がみられる。
	A 熟練 (使える)	自分たちの仮説を検証するために学んできたスキルを活用できる。	自分たちの仮説を検証ことができ、考察や新たな仮説を導き出せる。	地域の課題解決に向けて仮説を立てそれを協働して検証することができる。
	B 上達 (わかる)	考えを整理するためにブレインストーミングやロジックツール等を利用できる。	リサーチクエストに対する仮説を立て、そのための研究計画を立案できる。	グループで情報を分析しながら地域の諸問題を発見しようと努力することができる。
	C 習得 (できる)	スキル学習(論文の書き方、文献調査、実験検証、統計等)の内容を理解できる。	テーマを決め、リサーチクエストを考えることができる。	新聞やニュースから社会で起きていることについての情報を得ることができる。
10の資質・能力		【論理的思考力】 【ICT活用能力】	【課題解決能力】 【批判的思考力】	【コミュニケーション能力】 【グローバルな視野】
評価方法		授業に対する姿勢、課題に取り組む態度、グループによる相互評価、プレゼンテーションの内容、発表の様子等により総合的に評価		

図2

### 3. アカデミック・インターンシップの状況

#### (1) 高大連携事業について

##### ① 高校生が岡大キャンパスで大学生と共に受ける授業の聴講

例年「岡大聴講」と呼ばれている高大連携事業である。3学期に、岡山大学から来年度の聴講希望の調査が来るので、教科に参加可能な講義があるか打診をする。教科から参加できそうな講義をPick Upしてもらい、授業との兼ね合いでどの授業のどの時間に参加するかを検討する。参加の目途が立ったものを、生徒・保護者に通知して、参加者を募る。参加希望者が出た場合は、担任による推薦書を添えて岡山大学に参加希望の旨を伝える。折り返し、岡山大学からの返答により来年度参加の有無が決まる。

講義の内容は様々であるが、全てが大学の講義であり、高校生には難解な内容も多く含まれている。例年、3～4名程度が参加しており、半年間の講義を受ける生徒が多くいる。中には、1年間通して講義を受ける生徒もおり、参加した生徒からは「難しい内容だったが、大学の講義を体験できて良かった。」「大学の学部・学科の選択に役立った。」などの感想が聞けた。

今年度は1名の希望者がいたのだが、当初示された日程で申し込んだところ、岡山大学から日程の変更があり、本校としてはその時間に聴講させることは困難ということで、残念ながら参加を断念することとなった。よって、今年度の参加者は0名である。

来年度は、例年並みの参加者を期待したいものである。

##### ② 高校生のための大学講座

例年8月に岡山大学で行われる県内の高校生のための公開講座である。県内の多くの高校から多数の参加者があり、この日は岡山大学のキャンパス内で多くの高校生が見受けられる活気のある高大連携授業となっている。オープンキャンパスとは異なり、テーマに沿った講義が多く、多くの学部で展開される。今年度のテーマは「知の扉を開く」である。

本校の生徒も毎年多く参加しており、今年度は2年次生だけではあるが6名の生徒が参加した。1限から5限までの講義があり、多くの生徒が2つの講義に参加しているが、中には5限全てに参加した生徒もいた。オープンキャンパスと違い、大学の教授等から実際の講義を受けるという体験は、高校生にとっては新鮮な経験であり大学の実態に触れることのできる貴重な機会である。今回、1年次生の参加については、こちらの連絡ミスで生徒に周知できなかつたため参加希望者を募ることができなかつた。来年度は、このようなミスが起らないよう気をつけなければならない。

##### ③ SJPP (SAKUYO-JOTO Partnership Program)

平成18年に締結した「高大連携授業に関する協定」により開始した音楽学類における聴講制度である。毎週木曜日の6、7限にくりしき作陽大学 作陽音楽短期大学に行き大学の授業やレッスンを受けることができる。本事業に、直接関連するわけではないが、高大連携事業としては本校ではもっとも成功している一例である。音楽学類の生徒にも好評で、例年2、3年次の音楽学類の生徒が十数名受講している。

#### (2) アカデミック・インターンシップ

残念ながら岡山県内の大学にはアカデミック・インターンシップを実施している大学が見当たらない。社会的にもインターンシップについては高校・大学である程度の認知度があり、実際に実施したり協力したりしてくれる企業・団体は多く存在する。先日、学校訪問に行った秋田県立能代高等学校は2年生で全員インターンシップを行うことで知られている。それと比べると、アカデミック・インターンシップはまだまだ一部の大学が実施しているだけで社会的にはあまり知られていないのが現状である。

状況的には厳しいが、本校のSJPPのような形で近隣の大学と探究活動またはキャリア教育的な内容の講義が受講できるような協定を新たに結ぶことで、アカデミック・インターンシップに近いことの実現を目指していく。

#### 4. 指定2年目の総合的な探究の時間のプログラム開発

##### (1) 教育課程について

来年度の「総合的な探究の時間」は1年次では、今年度と同様に週1時間の「GLOBAL I」を実施する。「スキル学習」と「課題研究」を中心として行う予定である。また、「企業訪問」も生徒の希望を優先できるような形で実施できればより充実したキャリア教育となることであろう。

2年次の「GLOBAL II」は教育課程上は週2時間の実施を予定している。ただし、この2時間は連続して行うものではない。2時間のうち1時間を各学類特有の科目

- ・人文社会学類：「文学探究」、「歴史探究」、「国際理解」
- ・国際教養学類：「Global Studies」
- ・音楽学類：「Global Music」
- ・理数学類：「Global Science」

と連続した時間割を編成し、2時間連続での授業を行う。また、もう1時間は全クラス同時に行う「GLOBAL II」を用意する予定である。

SGHでは「異力の統合」を実現するために、全学類通しての2時間連続の「GLOBAL II」を実施していたが、研究内容を深めることができなかつたという反省点があった。そこで、本事業では学類の特色を前面に押し出して、得意分野を十分に活かして仮説検証を繰り返して行えるようなより深い研究ができるものと期待している。

##### (2) 実施内容について

1年次の「GLOBAL I」では、「課題研究」を行うために必要なスキルの習得を1学期に行う。今年度は、「国語」「地歴公民」「数学」「理科」「情報」の5教科に協力してもらいクラス単位で5回実施した。その都度、Classiでのアンケートを実施した。来年度も特に変更の予定はない。ただ、何らかの成果物があれば評価の参考となるのだが、今年度は「数学」と「情報」の共通の課題としてのグラフコンクールへの応募があったのみである。グラフコンクールに出品した生徒は13名おり、評価の加点要素としたので、来年度は他にも成果物を提出してもらいたい。

2学期以降は「課題研究」に取り組むことになる。SDGsの17の目標と関連付けてテーマ設定を行ったが、これも変更の予定はない。現在多くの学校で実施している取組であり、SDGs17の目標にはそれぞれに紐づく169のターゲットがあるので何かと関連付けすることは可能であると思う。リサーチクエスションや仮説の決定にはKJ法などが使われたようである。ロジックツール利用も来年度は考えている。調査・研究における手法は、主にアンケートやインタビューが多く用いられた。アンケート調査にClassiの利用もよいであろう。基本的には、今年度と同様であるが、より効果的な方法を取り入れるなどの改善を試みるべきである。

2年次の「GLOBAL II」では、学類の特色を生かす方向で考えている。ここで大きな問題は来年度のスタッフが確定していない現状で、どこまで内容をつめることができるかということである。SGHの時は、大きなテーマを事前に提示していたのでそれに伴うグループ分けから始めることができたが、今回は各学類に任されているので足並みが揃いにくい。ただし、ある程度の統一性は必要であるから、後付けにはなるが研究テーマに対してSDGsの17の目標と関連付けを行おうと思う。169のターゲットから研究内容に関連する事項を探してもらいたい。SDGsの17の目標の存在を生徒が意識することに大きな意味があると考えられる。自分たちが考えることは、地域のことであるかもしれないがそれはGLOBALな社会と何らかの形で繋がりを持っていること知ってもらいたいからである。それが、グローバルな意識へと進化していくことを期待している。

来年度の実施回数や実施内容までは今の段階では記すことができないが、生徒が課題解決に取り組むための手法を身につけ、課題に対する仮説検証を行うことができるようなカリキュラムを開発していくつもりである。そのためにも、携わるスタッフとの共通理解が得られるものにしていきたい。

## 5. 今年度の成果や課題、次年度の取組

### (1) カリキュラム・マネジメントの推進について

今年度は、本事業が指定されてからの取組となり、当初は令和4年度実施の学習指導要領に対応してカリキュラム・マネジメントの導入を考えていたので急遽対策を考えなければならなくなった。カリキュラム・マネジメントに取り組んだ者が本校にはいなかったため、何からすればよいのか自体わからない状態であった。まずは、グランドデザインを完成することから始めた。そこで、校長の作成したグランドデザインを8月の職員会議に提案し了承を得てカリキュラム・マネジメントのPhase I がスタートした。

このシステムは青森県立青森高等学校のものを参考にしており、ほぼ青写真は出来上がっていたので、あとは本校の現状に則した内容にどう落とし込んでいくだけであった。2学期からカリキュラム・マネジメント委員会においてPhase I にあたる部分の検討に入り、「城東高校で育みたい「10の資質・能力」、関連付ける学校行事の設定、「熟達スケール」まではほぼ決定した。並行して、「GLOBAL I」のシラバスも作成した。このシラバスを試験的に運用し、来年度以降その改善を行うことで、PDCAサイクルを回していこうと考えている。

スキル学習のアンケートで課題研究に取り組むことへの意欲を尋ねたところ、「楽しみである」の割合が1回目26%、2回目33%、3回目35%、4回目37%、5回目38%と回を追うごとに増加しており、スキルを学んだことで課題研究への不安が軽減し、意欲が増していったと考えられる。これは、一つの成果としてもよいであろう。

次年度は、カリキュラム・マネジメントのPhase II に取り組まなければならない。具体的には、育てたい「10の資質・能力」のルーブリックの完成である。そのためにしなければならないことは山のようにあるが、ここで歩みを止めるわけにはいかない。一歩ずつでも良いから、小さなことを積み上げながら完成に近づけていきたいと考えている。

### (2) 「GLOBAL I」の評価について

「GLOBAL I」の評価については、カリキュラム・マネジメントの推進のために準備しているものを試験的に運用する形で本格導入のテストのような色合いが強くなった。だが、そのおかげでCompetency Baseのシラバスに着手することもできた。その作成においても生徒に関わってもらい、以前のような教師主導ではなく教師と生徒の協働的な成果とすることができた。最終的には、このシラバスによる観点別評価を評価の基準としていくことになるが、それ以外にも参考資料という形で評価に加味するものをいくつか用意し、多面的に生徒を把握できるようにしたいと考えている。

今年度は、スキル学習の成果物としては、グラフコンクールの出品作品しか用意できなかったが、同様なものをそのほかにもいくつか用意したい。ただし、生徒の負担を必要以上に増やさないように気を配る必要はある。

最大の課題は生徒のポートフォリオである。紙ベースで集めればよいという考えもあるが、大量のデータを紙で蓄積するよりは利便性や継続性の面からも電子化することが今後は必須となっていくと考えられる。今年度初めて電子化を試みてClassiを導入したが、ポートフォリオを十分に蓄積できたかという点で不十分と言わざるを得ない。教師も生徒もポートフォリオに対する意識が十分に高まっていないのが実情である。ポートフォリオを蓄積するのは、生徒の頑張りや変容といった今まで実感しにくかったものを可視化するためであり、それによりカリキュラム・マネジメントのエビデンスとしたり、生徒の資質・能力がどのように伸長しているか等を把握することができるからである。大学入試の活動報告書を書くためだけに行っているのではない。

次年度は、スキル学習において成果物として提出できるものを各係で検討してもらいたい。また、ポートフォリオの意義を教師・生徒に理解してもらい、ポートフォリオを蓄積するということを定着させたい。これは「GLOBAL I」だけではなく「GLOBAL II」においても通じることなので、Classiのアンケート機能を多くの教師にも扱ってもらいたい。

### (3) アカデミック・インターンシップの状況について

アカデミック・インターンシップについては、実施できるかどうかは定かではない。アカデミック・インターンシップに相当するような活動が県内の大学で行われていないのが大きな理由である。だからといって、何もしないのでは今までの高大連携授業が全く活かさないことになってしまう。だから、今まで本校が取り組んできた高大連携事業をさらに推し進めるような形でアカデミック・インターンシップと同等の活動を実施できたら良いのではないだろうか。

岡山大学で行われている「高校生が岡大キャンパスで大学生と共に受ける授業の聴講」「高校生のための大学講座」の参加者を増やさなければならないであろう。ただし、「高校生が岡大キャンパスで大学生と共に受ける授業の聴講」については、受講できる講義が限られてしまうので多くの参加希望者が出て受講可能かどうか大学のスケジュール次第というところがある。また、「高校生のための大学講座」は今年度は案内を失敗してしまっただが、例年希望者は多数出て部活動の遠征や合宿と重なって後で辞退する生徒が多かった。部活動とのバランスを取らなければ、安易に多数の募集を取っても全員が参加できないことになってしまう可能性がある。結局のところ、大幅に参加者を増やすことは容易ではないように思われる。

やはり、SJPPのような形式で大学と協定を取り付けることで持続的に大学との連携が取れるようなものが望ましいのではないだろうか。毎週大学に通うことが無理ならば、長期休暇などに1週間なり3日なり大学で授業を受けることができれば、まさにアカデミック・インターンシップが実現できるのではないだろうか。次年度は、このような可能性を模索すべきではないかと思う。

### (4) 指定2年目の総合的な探究の時間のプログラム開発について

次年度の取組として最も重要視しなければならないのは、「GLOBAL II」についてである。SGHの時とは異なり、学類の特色を活かした課題研究にしていかなければならない。今まで通りの学類特有の科目の内容で良いわけがない。取り扱う内容は、同じでも構わないがその先に課題研究として発表することがあるということ意識しておいてもらいたい。さらに、SDGsとの関連も付けてもらいたい。これは、地域とGLOBALな社会とをつなげるキーワードになると考えるからである。今後の探究活動においても、SDGsは頻繁に目にする事となるはずであり、多くの学校で取り組んでいくことになると思われる。生徒が、社会に出るときにもSDGsと関わる課題に対する取り組みは必ず必要とされるはずである。

「GLOBAL II」の内容を考えると同様に評価についても検討しなければならない。当然シラバスは必要になるが、「GLOBAL I」以上にポートフォリオを蓄積していかなければならないだろう。「GLOBAL II」の内容は、大学のAO入試や推薦入試で活用する可能性があるのだから自分が課題に取り組んだ軌跡をきちんとした形として残しておいてもらいたい。また、学類特有の科目と一緒に挙げる部分もあるので、学類特有の科目の評価との兼ね合いを考慮する必要もある。学類特有の科目のシラバスも必要になるだろう。

### (5) まとめ

今年度は1年目ということで、準備もままならず戸惑いながらの取組となってしまった。しかしながら、その混乱の中に次年度への課題や期待といったものが少し見えてきたような気がする。本事業の指定を受けて様々な取り組みを行っているが、事業終了後も持続可能な取り組みとなるようなシステム作りを心掛けなければならないと感じている。

## 第8節 各種委員会の開催

### 1. 運営指導委員会・コンソーシアム会議

#### (1) 第1回コンソーシアム運営会議

令和元年5月28日(火) 9:00～ 大会議室

出席者(敬称略)

##### 【コンソーシアム】

青尾 謙	岡山大学副理事	
石井 一郎	岡山大学 UAA	
小川 卓志	岡山市市民協働局市民協働部 ESD 推進課	課長
神崎 浩二	岡山県経済団体連絡協議会	事務局長
中山 尚美	岡山県県民生活部中山間・地域振興課活力創出班	総括参事
山辺 典生	岡山県県民生活部中山間・地域振興課活力創出班	副参事

##### 【岡山県教育委員会】

藤岡 隆幸	岡山県教育庁	高校教育課	課長
鶴海 尚也	岡山県教育庁	高校教育課	総括副参事
森 良恵	岡山県教育庁	高校教育課	指導主事(副参事)

##### 【岡山県立岡山城東高等学校】

前川 隆弘	校長
平賀 徹	副校長(司会進行)
青山奈津子	事務部長
宮武 恭子	教頭
古市 浩	主幹教諭(研究リーダー)
杉岡 和子	指導教諭(外国語教育推進係主任)
田中 伸明	教務主任(カリキュラム開発係)

[進行次第]

- 1 開会
- 2 岡山県教育委員会あいさつ
- 3 校長あいさつ
- 4 出席者紹介
- 5 本事業における研究内容と計画について
  - (1) 本校の概要
    - ・教育理念
    - ・学校の特徴
    - ・4つの学類
    - ・進路実績
    - ・部活動等
  - (2) 事業の概要
    - ・目指す生徒像
    - ・育成したい資質能力
  - (3) 本校の取組(三本柱)
    - ・課題研究
    - ・異文化理解の深化
    - ・自主性・自律性を育成する取組
  - (4) 各取組の具体
    - 課題研究
      - ・3年間での取組
      - ・「GLOBAL I」の説明
        - 研究の手法を学習、岡山大学の教員・大学院生からの指導・助言、企業訪問を通じて課題の発見、SDGsをテーマにした課題研究の実施、取組を他教科の指導にも普及
      - ・「GLOBAL II」の説明

地域に出かけ、課題研究を实践

○ 異文化理解の深化

- ・海外体験・国際交流の充実

海文研、学類研修、海外修学研修

- ・異文化体験の充実

留学生受入れ、提携校交流の充実、岡山大学留学生との交流

- ・英語の授業改善、スピーキングの評価の充実

○ 自主性・自律性を育成する取組

- ・社会貢献活動

近隣小学生への学習支援 学類の専門性を生かしたボランティア活動

- ・高大連携

大学での講座受講 研究室訪問

- ・リーダーの育成

生徒会活動の活性化

- ・ボランティア活動への積極的な参加

近隣のボランティア活動の周知、実施状況の把握

- ・自主性・自律性を高める取組への積極的な参加

公益性の高い大会の周知

(5) 評価指標について

- ・批判的思考力・創造的思考力 GPS-Academic で上位評価 30%

- ・CFER B1以上の生徒 70%

- ・自主的にボランティアに参加する生徒 450人

- ・将来地元で暮らしたい 40%

(6) 校内の組織体制について

6 協議

7 その他

8 閉会

[委員からの指導・助言]

- ・中山間地域の課題を直接現地で聞く活動をすべき。地域とのマッチングは手助けできる。
- ・地域振興課の地域活性化のための事業の紹介、岡山一宮高校の2年生9クラスのバスで出かけての社会貢献活動、矢掛高校の上ノ山地区との協働の例の紹介。
- ・地元町内会や公民館との相談で、地域とのつながりをつくることもできる。
- ・ESD、赤十字、国際交流センター、JICAなどの機関等の取組も参考にできるのではないかな。
- ・部活動単位での社会貢献も考えてはどうか。
- ・林業を軸とした地域再生のモデルである西栗倉村や多くの企業が参加するOTEX等の活用も考えてはどうか。
- ・企業訪問についてはリストアップの協力ができる。ぜひ岡山県の産業について理解を深めて欲しい。
- ・岡大は、講師派遣、院生派遣、留学生との交流や研究室訪問で協力。ただし、今年度は10月頃からになる。
- ・留学生との交流については、留学生側にも学びとなるようなものを考えて欲しい。
- ・SDGsは、国際的な課題から地域の課題に関連付けることが重要。
- ・「GLOBAL I」ではSDGsの169のターゲットから課題を選ばせ、生徒自身にしっかりと考えさせるような取組みが大切。
- ・岡山県の地域の現状は深刻な状況にあり、将来に大きな影響を与えることが予想される。そのような社会で生きていかなければならないことを認識させることが必要だろう。



(2) 第2回コンソーシアム運営会議及び第1回運営指導委員会

令和元年10月8日(火) 13:30～ 大会議室

出席者(敬称略)

【運営指導委員】

岡本 弥彦	岡山理科大学 理学部教授
小川 正人	環太平洋大学次世代教育学部国際教育学科長
神崎 浩二	岡山県経済団体連絡協議会 事務局長
国定 啓人	山陽新聞社編集局局次長
杉山 慎策	就実大学名誉教授兼相談役 (ご欠席)
谷一 尚	一般財団法人林原美術館 館長 山陽学園大学副学長 総合人間学部教授

【コンソーシアム】

中山 尚美	岡山県県民生活部中山間・地域振興課活力創出班	総括参事
山辺 典生	岡山県県民生活部中山間・地域振興課活力創出班	副参事
小川 卓志	岡山市市民協働局市民協働部 ESD 推進課	課長
神崎 浩二	岡山県経済団体連絡協議会	事務局長
青尾 謙	岡山大学副理事	
石井 一郎	岡山大学 UAA	

【岡山県教育委員会】

藤岡 隆幸	岡山県教育庁	高校教育課	課長
鶴海 尚也	岡山県教育庁	高校教育課	総括副参事
森 良恵	岡山県教育庁	高校教育課	指導主事(副参事)

【岡山県立岡山城東高等学校】

前川 隆弘	校長 (欠席)
平賀 徹	副校長
青山奈津子	事務部長
宮武 恭子	教頭(司会進行)
古市 浩	主幹教諭(GLOBAL係主任)
杉岡 和子	指導教諭(外国語教育推進係主任)
田中 伸明	教務主任(カリキュラム開発係)
中村 哲	生徒指導主事(地域連携係主任)
森 友紀子	国際課長
青山 陽子	国際教養学類主任(GLOBAL係)
松村 將由	外国語科主任

[進行次第]

- 1 開会
- 2 岡山県教育委員会あいさつ
- 3 副校長あいさつ
- 4 出席者紹介
- 5 学校からの報告
  - (1) 本事業について
  - (2) 「地域密着の課題研究」について
    - ・ 課題研究「GLOBAL I」 10月までの取組状況
    - ・ 企業訪問 生徒の感想など

- ・教育課程
- (3)「異文化交流の深化」について
  - ・先進的な取組を取り入れた英語の授業
  - ・異文化交流
- (4)「自主性・自律性を育成する取組」について
  - ・社会貢献活動の実施状況について
  - ・学類の特徴を生かす社会貢献活動の計画について
  - ・生徒会活動・委員会活動の活性化について
- 6 協議Ⅰ
  - (1)コンソーシアム会議
  - (2)運営指導委員会
- 7 協議Ⅱ
  - ・全体協議

[委員からの指導・助言]

#### ○コンソーシアム会議

- ・岡山県県民生活部中山間・地域振興課の事業の紹介。小・中学校と比較すると、地域のことを高校教育にもっと取り入れていくべきという声もある。高校生が関われる可能性の提示はできる。地域の課題を一緒に考えるための講演会の実施や活動の場の紹介など。
- ・岡山市で暮らす多くの外国人との交流ができたらいい。彼らの困り感とか彼らの感じる岡山の良さなどを高校生に知ってもらえばいいだろう。
- ・企業訪問は、バス1台規模での移動ということで、紹介できる企業にも限りがあった。来年度への課題は、実施時期や生徒の目的意識。また企業に高校生からの意見もぶつけて欲しい。大学の流入が流出より多いのだからその人たちをどう残すか、県内の人材の確保につながるような企業になってほしい。
- ・岡山大学は、教員学生の派遣要項を作り直したため10月からの派遣となった。課題としては大学院生の派遣の困難さがある。留学生との交流はこれから連携して進めていきたい。
- ・多くの取組を実施する中で、高校生たちに「考える時間」をしっかりと確保してやって欲しい。

#### ○運営指導委員会

- ・新指導要領では全ての教科で探究的な学びを行うことになり、本校での取組が他校の参考になることを期待したい。
- ・探究活動を進める上では、探究のプロセスを可視化して、生徒たちに意識させることと、探究サイクルの構築が必要。できれば2サイクル回すなどの視点が欲しい。
- ・企業訪問も探究活動に位置づけるべき。事前調査をしっかりと行い、訪問を通して何を明らかにするか明確にする必要がある。事後に新たな課題を発見させたい。
- ・取組が縦割りだと感じた。3年間を通して身につけさせたい力を整理し、取組を上手く融合させることが必要。
- ・カリキュラムマネジメントでは、10の資質能力の設定根拠の明確化と活動への紐付け。
- ・英語力の強化は、入学してきた生徒や保護者も期待しているところではないか。
- ・実に多くのことに取組んでいる。高校では、将来に向けてのどれだけきっかけが作れるかが大切。取組に優先順位を考えた方がいいのではないか。
- ・成果を高校の3年間だけで求めるのは難しいだろう。さらに上級学校進学後も視野に入れながら、高校で何に取り組むのかという視点も大切。

## 2. 教育改革推進委員会

### (1) 設置の目的

県教育委員会と連携しながら、事業の成果や課題を共有し、本事業の進捗管理を行う。

### (2) 構成員

設置の目的を達成するため、次のような構成員とした。

(コアメンバー)

校長、副校長、教頭、事務部長、主幹教諭、教務課長、学類主任、年次主任

(必要に応じて出席するメンバー)

カリキュラム開発係主任(教務課長補佐)、地域連携係主任(生徒課長)、国際交流係主任(国際課長)、外国語教育推進係主任(外国語科研究主任)、情報発信係主任(総務課長)、記録係主任(図書課長)、会計係主任(事務室)

### (3) 開催期日と内容

[第1回]	期日	平成31年4月16日
	内容	本事業の研究内容及び研究体制について 他
[第2回]	期日	令和元年5月17日
	内容	年間計画の確認について 第1回コンソーシアム会議について 他
[第3回]	期日	令和元年6月11日
	内容	ロジックモデルの作成について 他
[第4回]	期日	令和元年7月16日
	内容	これまでの進捗状況の確認について グローバル係主任、地域連携係主任、外国語教育推進係主任、教務課長から説明
[第5回]	期日	令和元年8月20日
	内容	第2回コンソーシアム会議及び運営指導委員会について 他
[第6回]	期日	令和元年9月2日
	内容	第2回コンソーシアム会議及び運営指導委員会に係る報告事項について 他
[第7回]	期日	令和元年10月1日
	内容	第2回コンソーシアム会議及び運営指導委員会に係る報告事項について グローバル係主任、地域連携係主任、外国語教育推進係主任、教務課長から説明
[第8回]	期日	令和元年11月20日
	内容	研究開発実施報告書の作成について 他
[第9回]	期日	令和元年12月17日
	内容	令和2年度研究開発実施計画書及平成31年度研究開発実施状況報告書の作成について 他

## 第9節 広報活動

### 1. はじめに

総務課では本校の魅力や特色を、広く中学生・保護者・一般の方々に理解してもらうことを目的に、様々な機会を捉えて広報活動を行っている。校風や学校行事・4つの学類の特長などに加えて、今年度からは「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」（以下「本事業」とする）の理念や取組についても紹介している。具体的には、「GLOBAL I」における課題研究や「GLOBAL II・III」の先行研究、海外との交流の状況、および自主性・自律性を育む活動を重点的に取り上げている。

### 2. 地域との協働による高等学校教育改革推進事業に関わる広報媒体

#### (1) スクールガイド 2020

19000部を作成し、県内全中学校や近隣の塾に配付している。また夏・秋のオープンスクールの参加者全員に配付している。今年度のスクールガイドには本事業のページを追加し、新しい取組の概要を紹介した。本事業を、平成26年から30年までのSGH研究指定の取組によって創られた素地をさらに発展させる取組として位置づけていることや、今後の展望についても紹介している。

#### (2) 学校紹介ビデオ

12分間の学校紹介ビデオには、今年度は本事業の紹介を加えた。学校説明会や中高連絡会、学校評議員会で上映し、本校での取組への理解を深めてもらうための一助としている。従来から本校が取り組んできた海外修学研修や学類研修、留学生の受け入れ、姉妹校との交流、ICT英語集中合宿などの活動を分かりやすく紹介している。

#### (3) 活動紹介スライド

中学生及び保護者対象の学校説明会用のスライドでは本事業についてその理念や育成したい力、具体的な活動などを詳しく説明している。本校の特徴的な取組として課題研究や事業所訪問の様子、ボランティア活動などを紹介している。

#### (4) ホームページ

本校では海外の団体や学校との交流を盛んに行っているため、日本語の他に5カ国語（英語、フランス語、ドイツ語、韓国語、マレー語）による学校紹介ページを作成している。ブログ「岡山城東な日々」では、「GLOBAL」における課題研究や海外研修などの本取組の様子を中心にタイムリーに伝えている。スマートフォンやパソコンで本校の日常を簡単に見ることができるため、非常に多くの方に閲覧されている。

### 3. 地域との協働による高等学校教育改革推進事業に関わる広報活動

#### (1) 中学生・保護者対象学校説明会

本校を会場に3回、地区別（赤磐市・備前市・倉敷市・津山市・瀬戸内市）会場に5回の学校説明会を実施し、274名の参加者があった。また各中学校での説明会には10校、塾説明会には4ヶ所に参加した。いずれにおいても、本取組における課題研究や海外研修、事業所訪問は本校独自の取組として高い関心を集めていた。保護者からは「未来の社会を生きていくための力が養われていると思う。」や「高校生が社会との接点を実感できる取組は素晴らしいと思う。」などの感想が寄せられた。

#### (2) 中高連絡会

中学校教員を対象に、本校の特徴や取組に加えて本事業の説明を行った。ここでは本事業について概要から目的までを詳細に説明しており、中学生が本校の取組をよく理解した上で志望校決定ができるように、中学校の先生方には中学生への情報提供をお願いしている。

#### (3) オープンスクール

夏・秋の2回実施しており、2000名以上の中学生が参加した。対象が中学生となるのでここでの説明は本校が本事業に取り組むねらい等を分かりやすく伝えるようにしている。

## 第10節 各種資格試験の結果

### 1. GTEC 4 技能版受検者数に対する CEFR 別人数割合 (%)

	B2	B1	A2
1年次 (293名受検)	1.8%	8.8%	89.4%
2年次 (336名受検)	0.3%	26.5%	73.2%
3年次 (311名受検)	2.6%	33.8%	63.6%
合計 (940名受検)	1.5%	23.4%	75.1%

### 2. 令和元年度実用英語技能検定合格人数(人)

	準1級	2級	準2級
1年次	1	2	13
2年次	3	23	17
3年次	3	24	4
合計	7	52	34

### 3. 令和元年度その他資格試験における CEFR 別人数 (人)

	C1	B2	B1	A2
1年次	0	1	5	12
2年次	2	24	18	9
3年次	2	2	0	0
合計	4	27	23	21

## 各資格・検定試験とCEFRとの対照表

文部科学省 (平成30年3月)

CEFR	ケンブリッジ 英語検定	実用英語技能検定 1級-3級	GTEC Advanced Basic Core CBT	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEIC L&R/ TOEIC S&W
C2	230   200 (230) (210)			9.0   8.5				
C1	199   180 (196) (180)	3299   2600 (2599) (2630)	1400   1350 (1400)	8.0   7.0	400   375	800	120   95	1990   1845
B2	179   160 (170) (160)	2599   2300 (2599) (2304)	1349   1190 (1280) (1280)	6.5   5.5	374   309	795   600	94   72	1840   1560
B1	159   140 (150) (140)	2299   1950 (2299) (1980)	1189   960 (1080) (1080)	5.0   4.0	308   225	595   420	71   42	1555   1150
A2	139   120 (120) (120)	1949   1700 (1949) (1728)	959   690 (840) (840)		224   135	415   235		1145   625
A1	119   100 (100) (100)	1699   1400 (1699) (1455)	689   270 (270) (270)					620   320

- 表中の数値は各資格・検定試験の定める試験結果のスコアを指す。スコアの記載がない欄は、各資格・検定試験において当該欄に対応する能力を有していると認定できないことを意味する。
- ※ ケンブリッジ英語検定、実用英語技能検定及びGTECは複数の試験から構成されており、それぞれの試験がCEFRとの対照関係として測定できる能力の範囲が定められている。当該範囲を下回った場合にはCEFRの判定は行われず、当該範囲を上回った場合には当該範囲の上限に位置付けられているCEFRの判定が行われる。
- ※ TOEIC L&R/ TOEIC S&Wについては、TOEIC S&Wのスコアを2.5倍にして合算したスコアで判定する。
- ※ 障害等のある受検生について、一部技能を免除する場合等があるが、そうした場合のCEFRとの対照関係については、各資格・検定試験実施主体において公表予定。

## 第11節 学校訪問

新たな事業に係るカリキュラム開発や指導方法の研究等を目的として、次のとおり学校訪問を実施した。

### 学校訪問①

#### 1. 訪問先

山梨県立都留高等学校 令和元年10月10日（木）

山梨県立吉田高等学校 令和元年10月11日（金）

#### 2. 訪問者

國定 英之、枝松 鈴子

### 学校訪問②

#### 1. 訪問先

大分県立大分上野丘高等学校 令和元年10月17日（木）

大分県立杵築高等学校 令和元年10月18日（金）

#### 2. 訪問者

松村 將由

### 学校訪問③

#### 1. 訪問先

静岡県立三島北高校 令和元年11月22日（金）

#### 2. 訪問者

杉岡 和子、青山 陽子

### 学校訪問④

#### 1. 訪問先

青森県立青森高等学校 令和元年12月17日（火）

秋田県立能代高等学校 令和元年12月18日（水）

#### 2. 訪問者

田中 伸明、江國 隼斗

# 男性から見たジェンダー

1年次6組 Group 2 有友花鈴 右手衣歩 岡田萌々子

小原彩希 草野亜実 平尾奏音 守谷心愛

## 背景・意義

私たちは「近年、レディースデーの増加や、女性専用車両など、女性への優遇が目立ってきていると感じるが、岡山県内に住んでいる人達はそのことについて不満に思っているのか。またそのように思っているのなら、どのように改善していくべきだろうか。」というRQを立てて研究した。

今回の研究の目的は、男性ジェンダーに対する意識や思いを明らかにし、女性が優遇され過ぎて男性が「生きづらい」と感じてしまっている社会を改善することである。

5 ジェンダー平等を  
実現しよう



## 男性から見たジェンダー

1年次6組2班  
有友花鈴 右手衣歩 岡田萌々子 小原彩希 草野亜実 平尾奏音 守谷心愛

### 研究手法

①アンケート  
対象：城東高校1年生4クラス  
内容：日常生活で女性の方が優遇されていると感じるか。どのような場所でそのように思うのか。

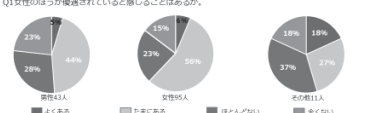
②インタビュー  
対象：岡山駅付近で質問をし、回答をいただいた57名（男性34名・女性23名）  
内容：日常生活で女性の方が優遇されていると感じるか。どのような場所でそのように思うのか。このことを改善すべきだと思うか。

## 研究手法

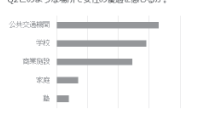
まず現状を調査するために城東高校の1年次生4クラスを対象にアンケートをとった。さらに、高校生のみならず、一般の方々の意見も視野に入れ調査を行ったかったため岡山駅付近で声をかけ、答えてくれた57人の方にインタビューを行った。具体的な内容としては、「日常生活の中で女性の方が優遇されていると感じるか」「特にどのような場所でそう思うのか」「それは改善すべきだと思うか。」などである。

### アンケート

Q1女性のほうが優遇されていると感じることはあるか。



Q2どのような場所で女性の優遇を感じるか。



**考察**  
男性よりも女性のほうが優遇されていると感じる人が多かった。

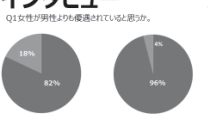
## 結果・考察

アンケートで行った「日常生活で女性は男性より優遇されていると感じるか」という質問に対しては、男性よりも女性の方が、自分たちが優遇されている、と感じている人が多いことが読み取れる。また、前の質問で、よくある・たまにあると答えた人に対しては「具体的にどのような場所で優遇を感じるか」という質問をした。その結果として、交通機関、学校、商業施設の順に多いことがわかった。インタビューではまず「現代の日本では女性は男性よりも優遇されていると感じるか」という質問を行った。その結果、男女ともに多くの割合の人が女性の優遇を感じているという結果が出た。そしてこの質問に対して「はい」と答えた人には「どの場面面で優遇を感じるか」「女性への優遇を改善してほしいか」という質問も行い、場面では、女性向けサービス、育児休暇の順に多かった。改善してほしいか、については男女ともに「いいえ」と答えた人が多かった。


そして、アンケートより、女性より男性の方が「女性が優遇されている」と感じる人が多いことがわかったが、それは2つの理由があると考えた。1つ目は「女性は守られるべきだ」という固定概念。2つ目は「女性を利用したビジネスの増加」である。

### インタビュー

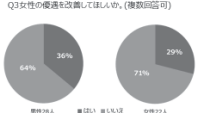
Q1女性が男性よりも優遇されていると思うか。



Q2どのような場面面で女性が男性よりも優遇されていると感じるか。(複数回答可)



Q3女性の優遇を改善してほしいか。(複数回答可)



## 結論・課題

私たちは「男性は生きづらさやモヤモヤを抱えている」と仮定していた。しかし研究を進めると、実際は女性の方が自分たちは優遇されているという意識が高く、男性は「仕方ない」「どうせ変わらない」と考えている人が多いという結論に至った。そのようなことから「男性と女性が平等に生活することができる対策を、身近なことから考えること」がこれからの課題であるとする。

「女性は守られるべき存在」

女性を利用したビジネス増加

→

**女性への優遇**

**結論**

- 男性よりも女性のほうが優遇されていると感じる
- 男性は女性の優遇に対して不満に思ったり、改善してほしいと思わない
- 「どうせ変わらない」「仕方ない」という考え

**課題**

- 男性も女性も平等に生活することができるような対策を身近なことから考える必要がある

## 展望

私たちは、これからは「日本のジェンダー意識の改善と男性専用サービスの導入」が必要だと考える。意識を改善し、行動することで男性が生きやすい環境を作ることができるのではないかな。また、男性のニーズに答えた男性サービスや、育児取得の後押しになるような企業でのサービスを導入することで男女間の優遇の差を感じる人も減少すると考えられる。

### 展望

女性の優遇は「仕方ない」

↓

・現代の日本の女性の抱える意識の改善  
・男性のためのサービス

↓

男女の差がなくなり両性とも現代の日本の中で過ごしやすいになる

**提案**

- メンズデーの導入 (朝意酒造、ジム、エステ、ガソリンなど)
- ベビー用品を男性が購入すると割引 → 男性の育児休暇取得推進

**参考文献**

第48巻第1号通巻559号 日経サイエンス社/日本経済新聞出版社  
クローズアップ現代 男はつらいよ 2014 ~1000人の心の声~

## 参考文献

第48巻第1号通巻559号 日経サイエンス社/日本経済新聞出版社  
クローズアップ現代 男はつらいよ 2014 ~1000人の心の声~

# 身体的不自由者の不平等の理解を深めるために

1 年次 4 組 Group5 尼崎 柚衣 石野 ひな 後川 幸絵 小川 桜  
奥田 実咲 勝本 麻央 齋藤 友里

**身体的不自由者の不平等の理解を深めるために**

【メンバー】 ◎尼崎、奥田、石野、後川、小川、藤本、斎藤

【背景】 身体に不自由がある人が不平等に陥っていると考えた。そこで、日本で最も多い身体的不自由である視覚の不自由について調べることとした。

【意義】 身体的不自由がある人がしたいこと、思っていることができるように手助けするため。また、日本人の中には助ける方が偉いという意識がある。その意識の改善を図る。

【手法】 アンケートをとり、その結果をもとに分かることについて分析し、わからなかったことについて調べる。

【理由】 なぜ、不平等が起こるのかを考えた時、「接し方がわからない」という意見が話し合いで多くみられた。そこで、アンケートを通して他者の意見が知りたかったから。

対象者	42人
高校一年生	32人
教員	10人

## 背景・意義

私たちは身体に不自由がある人が不平等に陥っているのではないかと考えた。そこで、日本で最も多い身体的不自由とされている視覚の不自由について調べることにした。

意義としては、身体的不自由のある人が、やりたいことができるように、手助けするためである。また、日本人のなかには助ける側の方が偉いという意識をもつ人が少なからずいることから、その意識の改善を図るためという思いがある。

## 研究手法

「なぜ不平等が起こるのか」と考えたとき、「接し方がわからない」といった意見が多くみられた。城東高校の1年生32人、教員10人の計42人を対象にアンケートを実施し、その結果をもとに分析し、調べた。


【アンケートの結果】

Q あなたが視覚に不自由がある人が困っている場面に出会ったとき、どう対応をとりましたか、また理由を教えてください。

A 助ける 35人  
・自分が同じ立場なら助けてもらえたらいいから、自分ができるなら助けてあげたい。

B 助けない 11人  
・どうすればいいかわからないから、手紙だけでは対応できないから。

C 分からない 6人  
・時間と状況による。



## 結果・考察

アンケートでは「助ける」と答えた人が多かったが、文献では、世界と比べて日本の身体的不自由者に対する意識は低かったため、これは予想外の結果となった。そこで、世界と日本の比較を行った。

アメリカには、ADA（障がいをもつアメリカ人法）がある。対して日本には障害者差別基本法があったが、具体的な対策はとられていなかった。2016年施行された障害者差別解消法でやっと具体的措置がとられたが他の先進国に比べると遅れていた。

## 結論・課題

日本人の意識の低さの原因はほかにもあると考え、マークの認知度が低いと感じた。障害に関するマークの認知度を表したグラフによると国際的な車いすのマークは94.6%とグラフの中で一番認知度が高い。しかし、日本独自で制作された「白杖 SOS シグナル」の普及啓発シンボルマークは11.1%と最も低い。つまり、普及されていないことが意識の低さの原因の一つとしてあげられる。

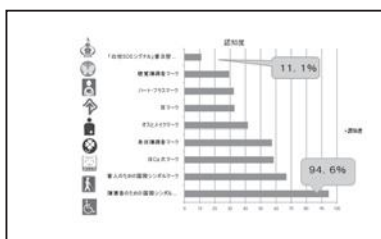
「白杖 SOS シグナル」普及啓発シンボルマークは福岡県の盲人協会で作案されたもので視覚に不自由がある人が助けて欲しい時に白杖を掲げることで周囲に助けをを求めるサインを表す。実は40年ほど前から存在していたが今なお認知度は低い。そこでポスターを製作し学校に掲示することで多くの人に認知され意識の向上にもつながると考えた。

日本は他の先進国よりも遅れている？

ADA(障害をもつアメリカ人法) 1990年7月成立  
正式名称「障害に基づく差別の排除かつ包括的な禁止に定める法律」  
英語名称 American with Disabilities

この法律はブッシュ大統領が署名したことでアメリカで成立した。障害を持つ人が米国社会に完全に参加できることを保証した。

イギリスでも1996年からアメリカと同様の差別禁止法が施行され、これらによりカナダ、ドイツ、オーストラリアなど世界各国で法律が作られた。



## 展望

当事者に直接意見を聴くことができなかったので聴く機会をとり、より理解を深めていきたい。また、ポスターをより多くの人に知ってもらうために、校外への掲示を行っていく。

## 参考文献

[www.metro.tokyo.jp](http://www.metro.tokyo.jp)  
[www.jrps.org](http://www.jrps.org)  
<https://www.normanet.ne.jp>  
 社会福祉法人 日本障害者団体連合 nichimou.org  
<https://www.asahi.com/sp/articles/ASHC462XFHC4UTIL049.html>

作成したポスター

このポスターをみたら 援助しましょう！

「白杖のシグナル」  
普及啓発シンボルマーク

設置場所  
・各教室  
・職員室前  
・保健室前

白杖を掲げてあげよう  
「白杖のシグナル」  
普及啓発シンボルマーク  
白杖を掲げてあげよう  
「白杖のシグナル」  
普及啓発シンボルマーク  
白杖を掲げてあげよう  
「白杖のシグナル」  
普及啓発シンボルマーク



# より多くの人が服を寄付するためには？

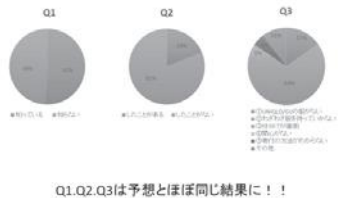
1年次2組 Group 1 青木 真悠 岩田 湖春 岡邊 里香  
後藤 優萌 利川 遥那 丸尾 保乃華



## <研究手法>

- ・企業(UNIQLO, GUなど)の行っている服回収プロジェクトの認知度を知る
  - ・高校生が企業にいらなくなった理由を寄付しない理由を知る
- 城東高校1年1組から1年3組にアンケートを実施。  
服回収プロジェクトの活動内容、成果、課題を知る  
→1つの例としてUNIQLOに電話でインタビュー

## <結果>



## <考察>

アンケートの結果 「お店に行くときに、寄付する服をわざわざ持っていくのが面倒」 多数  
そんな人達には...  
**フクサボ, BRAND PLEDGE, CARE**  
これらの活動団体なら  
お気に入りの服をネットで申し込んで、段ボールに詰めるだけ!!  
段ボール1箱で 貧困国を救えます。

## <結論>

より多くの服を寄付するためには...

服を寄付する活動を  
広めること!!

## <参考文献>

- ・あつめて国際協力 | 支援する | 国際協力NGO CARE | ケア・インターナショナルジャパン  
<http://www.careintjp.org/support/internationalcooperation/>
- ・COMMUNITY 服のチカラを、社会のチカラに。UNIQLO  
<https://www.uniqlo.com/jp/sustainability/community/>
- ・不要になった衣類を寄付する方法[洋服・下着・靴]-NAVER まとめ  
<https://matome.naver.jp/odai/2139698627736779701>
- ・NPO法人 日本救援医療センター | 衣料品寄贈・海外支援活動展開中  
<https://www.jrcc.or.jp/>

## 背景・意義

SDGsで貧困国について調べたところ、食糧不足や、衣類不足がありました。そこで、高校生の私たちが貧困国のためにできることを考えたところ、UNIQLOやGUなどの企業を通して服を寄付する活動を知りました。その活動について詳しく研究しより多くの服を寄付する方法を提案しようと考えました。

## 研究手法

- ・城東高校1年1、2、3組にアンケートを実施
- ・UNIQLO本社に電話でインタビューを実施
- ・インターネットによる調査

## 結果

アンケート結果はUNIQLOやGUの活動をしている人は51%、知らない人は49%でした。答えた人の64%は、店を訪れるときにわざわざ服をもっていかないと回答しました。この活動を知らないと感じた人に活動してみたいか質問したところ、85%の生徒から実際に活動してみたいという前向きな回答が得られました。

## 考察

アンケートの結果から、活動を知っていても「服を寄付するためにお店にわざわざ持っていくのが面倒」という理由から活動したことがない人が多いということが分かりました。そこで私たちはそういった人達に対してUNIQLOやGU以外の団体活動を紹介することで、より貧困国への寄付が増えるのではないかと考えました。そして、いろいろな活動団体について調べ、よい例としてフクサボ、BRAND PLEDGE、CAREなどの活動を知りました。フクサボとは、古着のリユース、リサイクル業を運営する株式会社KUROSAWAが私たちから送られてきた衣類のリユース、リサイクルとNPO法人テラ・ルネッサンスの支援をするプロジェクトです。衣料、靴、鞆、服飾雑貨を送ることで、その衣料は寄付金となり、支援活動に役立てられます。また、その衣料を貴重な資源として捉え、国や地域を超えて有効利用します。手続きの流れは、①不要な衣類をダンボールに詰める②ネットで簡単に申し込み③指定日にスタッフが集荷にきます④衣類の査定金額相当を寄付、古着はリユース。これらの活動ならお店に服を持っていく必要はなく、インターネットで申し込んで、ダンボールに詰めるだけで世界にたくさんいる貧困国の人達を救うことが出来ます。

## 結論

より多くの服を寄付するためには、これらの活動をより広めることが大切です。また、この発表で、UNIQLOやGUの活動だけでなく、そのほかにも多くの手段があることを知ってもらうことでより多くの服を集めることが出来ます。

## 参考文献

- ・あつめて国際協力 | 支援する | 国際協力NGO CARE | ケア・インターナショナルジャパン  
<http://www.careintjp.org/support/internationalcooperation/>
- ・COMMUNITY 服のチカラを、社会のチカラに。UNIQLO  
<https://www.uniqlo.com/jp/sustainability/community/>
- ・不要になった衣類を寄付する方法[洋服・下着・靴]-NAVER まとめ  
<https://matome.naver.jp/odai/2139698627736779701>
- ・NPO法人 日本救援医療センター | 衣料品寄贈・海外支援活動展開中

# 2050年までに海洋プラスチックは魚の量を超える

1年次7組 Group 6

倉本 琴未

池田 光来

田中 菜々海

延兼 穂乃香

野中 陽菜

京免 瑞紀

## 2050年までに 海洋プラスチックは 魚の量を超える

7組 海洋グループ  
倉本・池田・京免・田中・野中・延兼

### 現在の状況

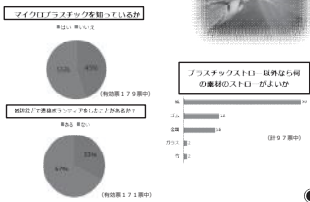
- 既に世界の海に存在されているとされるゴミの量は1億5000万トン  
毎年800万トンが新たに流出
- プラスチックの多くは使い捨てられている
- 日本はプラスチック生産量世界第3位  
さらに、1人当たりの容器包装プラスチックごみ発生量第2位
- 国内で1年間に流通する レジ袋の枚数 >>>推定400億枚  
ペットボトルの本数 >>>推定22.7億本

### 調査方法

- 岡山城東高校の抽出された7クラス
- 岡山県渋川青少年の家
- 瀬戸内市役所



### 城東生の現状は??



### 現場の声

渋川海水浴場は毎年「良問題なし」という結果を受けているが山陰や西国、沖縄の海に比べると断然清潔度は低い。毎年2年くらい前からクリーン作戦などが行われている。毎年500人以上の地域の人達が参加している。



海が汚いと健康がよくない、船の走行や漁業に影響が出る。また、海洋清掃活動や子どもたちを中心に「エコエクス」を展開している。プラスチックゴミの中でも特に多いレジ袋を減らす為にマイバック運動を推進している。

瀬戸内市役所 環境課 生活環境課

### 研究で分かったこと

海の汚れ、生き物への害 ←人間の生活によるもの

### 私たちにできること

- 分別してゴミを出す
- エコバックを使用する

Q Q Q

私たちの次の世代の海を守る!!

### 背景・意義

最近、海洋プラスチックという言葉をよく聞くようになった。私たちは、「人間社会が排出した様々なプラスチックごみが海に流れ出し、長時間移動する中で粉々に砕けたものがマイクロプラスチックとなり、魚などの体内に蓄積され人間も飲み込んでいる」、という海洋プラスチック問題に興味を持ち、研究を行った。この研究の中で、2050年までに海洋プラスチックは魚の量を超えるという事実を知った。この事を防ぐために私たちには何ができるのだろうか。

### 研究手法

岡山城東高校の無作為に抽出した7クラス、岡山県渋川青少年の家、瀬戸内市役所を対象に、岡山城東高校の生徒には海洋プラスチックについての意識調査、施設の方には海洋プラスチックの現状などについてのアンケートを実施。また、文献やインターネットを利用して情報を収集した。

### 結果・考察

現在、世界の海には1億5千万tものごみが存在していると言われている。これは日本人一人当たり1tものごみを抱えているということだ。プラスチックの多くは使い捨てられていて、日本はプラスチック生産量世界第三位。日本人がいかに関プラスチックを多く生産しているかがわかる。次に、城東生の現状で、「マイクロプラスチックを知っているか」という質問に対して、約半数の生徒が「いいえ」と答えており、「海辺などで清掃ボランティアをしたことがあるか」という質問に対して、「知らない、もしくは知っているが参加したことがない」と答えた生徒は約70%にも昇った。

次に、施設の方へのインタビューの結果で、捨てられるごみの種類は主に、たばこの吸い殻、マイクロプラスチックなどが多い。渋川青少年の家は、ごみを分別して入れるかごや、吸い殻入れを人通りの多いところに設置したが、分別しない人やそのまま放置していく人が多かったそうだ。

### 結論・課題

今回の研究で分かったことは、海が汚染されたり、生き物が害されたりしているのは、私たち人間によるものだったということだ。これ以上プラスチックを使いすぎる生活が続けば、2050年には海洋ゴミの量は魚の量を超えてしまう。しかし、日頃の生活できちんとごみを分別して出したり、買い物の際にエコバッグを使用したりするなど私たちにはできることはたくさんある。

### 展望

自分たちが楽な生活をするのではなく、今ある自然や生き物のことを考え、どうすれば次の世代まで海を守っていけるかという事を考えながら生活していかなければならない。

### 参考文献

gooddo WWF ジャパン 22世紀を生きる君へ クローズアップ現代+

# SUN SUN ナビ

Aグループ4班

藤森遥都 城なつみ 隅谷愛里  
森下こころ 秋山湧飛 三宅希児

## 1 はじめに

岡山を訪れる外国人観光客が少ないその要因は、岡山市街の観光地周辺には外国語表記が少なく、外国人にとって観光しにくい環境があると考えた。そこで JAPAN GUIDE や SETOWA の観光アプリを先行研究として、岡山の魅力を紹介し観光の手助けをする、外国人観光客向けの多言語対応アプリの開発を目指した。これにより外国人観光客が観光しやすくなるのはもちろん、あまり知られていない観光地のアピールにもつながり、結果的に岡山の経済発展につながると考えた。

## 2 研究手法

フィールドワークを行い外国人観光客がどのように岡山を観光しているのか、またどのような点を不便だと感じているかを英語で聞きとり調査した。これを生かしてスマートフォン用のオリジナルアプリを考案し、具体的な内容を岡山市役所の方に提案した。

## 3 結果・考察

フィールドワークの結果、外国人観光客は基本的にスマートフォンを頼りに観光していることが分かった。また、外国人が不便だと感じていた点は、言語が少なく目的地に着くのが難しいという言語の壁であった。このことから各国からの外国人観光客に適用したスマートフォンアプリを制作することで外国人観光客の不満を解消し、更なる岡山の経済発展につながると考えた。また、観光地までの案内において、Google Map などの地図をリンクさせると更にわかりやすくなるという意見もあった。

そこで、今回私たちがアプリを作成し、市役所に行き職員の方から意見をいただいた。アプリの内容自体はとても好評だったが、作成費や更新料などアプリを作ることや、維持をしていく上での金銭的問題が浮き彫りとなった。

その後に私たちは、岡山を訪れている外国人観光客および日本人観光客に私たちが発案したアプリについて意見を頂くことができた。そこでも好評だった。この結果からこのアプリは観光客にとって需要のあるものだがコスト面、収入面で課題があるということが分かった。

## 4 結論・今後の展望

このアプリが実現すると、観光しやすいのはもちろん新たな観光地の開拓につながり、経済発展が見込めると考えるが、現時点でアプリを作成できていないことからどれだけの経済発展につながるかを具体的に表すことはできなかった。今後、収入面、コスト面の研究を進め市や県が企業と協力することで私たちが発案したようなアプリが実用化できると考える。

## 5 参考文献

岡山県ホームページ

(<http://www.city.okayama.jp/>)

# 4コマ漫画が日本を救う？！

## ～ピクトグラムの大改革～

Cグループ3班

吉本彩乃 野崎夢翔 加嶋優有  
田中七海 森本楽空 福田侑真

### 1. はじめに

現在、グローバル化に伴って来日観光客が増加している。その中で、日本の外国人観光客に対する受け入れ態勢は整っているとはとても言い難い。実際に岡山駅で切符の買い方に困っている外国人観光客に出会ったことがある。また、学類研修先で駅での切符の買い方に困ったこともあり、そこで他の外国人観光客にもインタビューを行ったところ、同様の意見が複数出た。そこで、現在ある多言語表記の案内板の言語の種類を増やすのではなく、言葉がわからなくても理解できるような4コマ漫画を使った案内板こそが問題解決に有効であると仮説を立て、その検証を行った。

### 2. 研究方法

岡山駅周辺で外国人観光客に4コマ漫画の案内板と多言語表記の案内板を比較してもらった。4コマ漫画を使った案内板の効果を確かめるための3つの質問を行った。外国人観光客22人がアンケート調査に答えてくれた。

### 3. 結果・考察

22人の外国人観光客のアンケート調査から、全員が4コマ漫画の案内板のほうが理解しやすいという結果を得た。以上から、4コマ漫画の案内板でも伝えたいことがきちんと伝わるのが分かった。しかし、その中で分かりづらい点、例えばお金の投入口などが実際の構造と違う点や、大人と子供の区別がつかないという点があると指摘を受けた。そこで、4コマ漫画の案内板に簡単な英語を入れることでよりわかりやすい案内板を作ることができると思う。

### 4. 結論・今後の展望

4コマ漫画を使うことで外国人観光客にわかりやすい案内板を作ることができた。また、今回の調査で得られた改善点を活かすことで、より便利な環境を外国人観光客に提供することができると思う。

### 5. 参考文献

北神慎司 京都大学「ピクトグラム活用の現状と今後の展望：わかりやすいピクトグラム・よいピクトグラムとは？」2002年3月31日 <http://hdl.handle.net/2433/57427>

大久保美美、高田哲雄 立教大学大学院「Web ピクトグラムの改善へ向けて」2012年 [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssd/59/0/59\\_252/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssd/59/0/59_252/_pdf)

# 目指せ！チョーク農業

Eグループ3班

小森一生 安延仁 岡田花奈  
岡崎文也 出井晴菜 永田佳乃子

## 1 はじめに

### 研究背景

ゴミとして捨てられているチョークの粉に着目した。他のゴミと比較した際、チョークの粉は黒板の粉受に溜まる為、分別が容易であること。チョークの主成分は炭酸カルシウムであり、焼くことで、酸化カルシウムそして、水に溶かすと水酸化カルシウムとなり、これは土壌改良資材に用いられることからその代用として活用できないかを考えた。

### 研究目的・意義

肥料の代用としてチョークを用いることができれば、チョークのゴミを削減することが出来る。また、焼くだけで肥料になれば、化学肥料と比較すると製造が容易な為、化学肥料等の製造技術に乏しい途上国等での活用が見込める。

## 2 研究手法

チョークの粉をガスバーナーで焼き炭酸カルシウムから酸化カルシウムを作る。出来た酸化カルシウムを土に混合することで土壌中の水分と反応し土壌改良効果の見込める水酸化カルシウムになる。その土壌改良、肥料効果を確認する為に枝豆とホウレンソウを用いて焼いたチョークの粉を施肥した物と無施肥の物に分け、栽培を行った。そして、その後生育やpHを測定することで土壌改良、肥料効果を確認した。

## 3 結果・考察

枝豆においては、チョークの粉を施肥したプランターのほうが生育が旺盛になり、収量増加したが、一株の結果のみの比較となったため個体差の可能性があることが否めない。

ホウレンソウにおいてはチョークの粉を施肥した土壌はpHが5.2無施肥はpH4.9と土壌改良効果が見られた。しかし、一部生育不良箇所がそれぞれに見られ、また個体間の生育差が大きく、視覚的に明確な違いがあまり出なかった為効果があると言い切るには難しい。

## 4 結論・今後の展望

チョークの粉を加熱したものには肥料としての効果があると考えられる。

販売されている有機石灰と同等の価格で販売すると仮定した際、人件費等を考慮し収益を出すには製造のコストを下げる必要がありより安価に製造できる加熱方法の検討が必要である。

## 5 参考文献

日本白墨工業株式会社ホームページ (<https://www.tenjin-chalk.co.jp/>)

# Let's eat Okonomiyaki!

H - 4 Maoko Yashiro Ami Hoshishima Kenta Wakabayashi Momoka Matsuda  
Kanae Morikawa Mana Makimoto Luze Marlene Sophie

## 1. Introduction

The number of Japanese restaurants has been increasing each year. According to the results of the questionnaire about non-Japanese people's favorite Japanese food, sushi is the most popular in the world. However, the second most popular is unclear as there are so many. Therefore, in this study, okonomiyaki should be the second most popular Japanese food around the world.

## 2. Methods

- The questionnaire about Japanese food was conducted with people from abroad.
- An international student made okonomiyaki and shared her impression with us.
- The benefits of okonomiyaki were researched to let people from abroad know about it.
- Following the result of our research, a leaflet about okonomiyaki was made for people from abroad, and it was handed out to foreign tourists at Okayama station and Korakuen.

## 3. Results and Discussion

Foods which have a strong flavor are popular among people abroad and they have positive feeling towards okonomiyaki. Okonomiyaki has many advantages. 5 groups of foreign tourists read the leaflets and offered some improvements.

## 4. Conclusions

It is effective for spreading okonomiyaki to people from abroad. Furthermore, Japanese food culture will develop by spreading okonomiyaki all over the world.

## 5. References

オタフクソース株式会社「お好み焼きの栄養」  
(<https://www.otafuku.co.jp/okonomiyaki/healthy/nutrition/>)

## Do parents think their own way of education better than real? —the true revealed through study of “grit”—

Saki Ogawa

### **Introduction**

Recently, noncognitive skills have been paid more attention in education. I got interested in one of them, grit, courage and determination despite difficulty, after I read a book written by Angela Duckworth a professor of the University of Pennsylvania. I decided to carry out a survey in Joto High School to find out how much grit students have.

### **Method**

I took three kinds of questionnaire to measure activity, grit, and the way of parenting and to confirm that there is correlation between them based on question lists made by Angela Duckworth. 87 students and 122 parents answered in this survey.

### **Result**

The average of grit of students was 3.0pt. It was lower than that of American people, 3.8pt. Also, there is correlation between students' activities and grit, and wise parenting and grit as they were defined in preceding studies. In terms of parenting, students and parents thought quite differently. Patents thought their own way of parenting is wiser than students thought.

### **Summary**

In this study, I could find how much grit students have and the connection between grit, activity and parenting. However, I took this survey only in Joto High School, so there might have been selection bias. In the future, I would like to expand the research field and approach in different ways for better study of grit.

# PERIOD

Seira Hirai

## **Introduction**

Watching a short documentary film, I learned that women in some countries have been suffering from discrimination just for simply “being women”. This discrimination is due to a lack of accurate knowledge. Lacking accurate knowledge on menstruation is not only a problem in developing countries, but is a problem all over the world. Therefore, many prefer not to talk about periods in public because they think of menstruation as an impure and disgusting thing. I thought that it may be possible to end this “period stigma” if more people had access to reliable sources that provide accurate information on menstruation.

## **Method**

First, I gathered information on how women all around the world felt about menstruation. Second, I took a survey at JOTO High School with the help of about 200 students in order to find out what their opinion was on menstruation. Lastly, I had the opportunity to propose a students’ policy that summarized my research at the G20 Health Ministers’ Meeting in Okayama.

## **Results**

Through my experience of having the chance to speak at the G20 Health Ministers’ Meeting, I feel like I have been able to talk about periods with friends and family and the people around myself without an uncomfortable atmosphere.

I find that the best way for me as a high school student to contribute to improving the current status of period stigma is to try and start conversations about periods. This is because the more we talk about it, the less awkward I feel it gets.

## **Summary**

Through this research, I was able to learn more about menstruation. I also learned that trying to make a change in people’s perspectives is more effective and important than trying to just change the system itself. Although this research is finished for now, I would like to try and keep finding ways to improve whatever problem I am interested in.



平成31年度入学生〔33期生〕 単位制教育課程編成表 その1

科目群 教科	必履修科目等													音楽	外国語		英語	情報科学	家庭基礎	保健体育	芸術				学類コア科目			総合的な学習の時間					
	国語		地理歴史			現代				数学					物理	化学					生物	英語総合	英語表現	英語総合	英語表現	音楽理論	音楽表現		音楽総合	グローバル	英語		
正式科目	校内外名称	国現代文B	国古代文B	世史A	世史B	世史C	日本史A	日本史B	日本史C	地理A	地理B	地理C	現代社	教数A	教数B	教数C	物理基礎	物理	化学基礎	化学	生物基礎	生物	英語総合	英語表現I	英語表現II	音楽理論I	音楽理論II	音楽総合	※GLOBAL III	英語	総合的な学習の時間	H	
		2	4	4	4	4	4	4	4	2	3	4	4	2	3	4	2	4	4	4	2	2	4	4	4	2	2	2	2	2	2		3
		1	2	3	4	4	4	4	4	2	3	4	4	4	2	3	4	2	4	4	4	2	2	4	4	4	2	2	2	2	2		3
		5	2	3	4	4	4	4	4	2	3	4	4	4	2	3	4	2	4	4	4	2	2	4	4	4	2	2	2	2	2		6
人文社会学類	2年	2	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	2	4	4	4	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	R	
		2	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	2	4	4	4	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2		
理数学類	2年	2	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	2	4	4	4	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	R	
		2	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	2	4	4	4	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2		
国際教養学類	2年	2	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	2	4	4	4	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	R	
		2	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	2	4	4	4	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2		
音楽学類	2年	2	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	2	4	4	4	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	R	
		2	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	2	4	4	4	4	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2		

○ \*は学校設定科目、※はSGHの研究開発に係る特例の学校設定科目である。  
 ○卒業に必要な単位数は、74単位以上である。  
 ○単位教と学類ごとの配当は標準的なものであり、学類を超えて選択することも可能である。

・地歴(ウ)の場合は、世界史Aに加え、日本史B・I・地理B・Iのいずれかを選択する。  
 ・地歴(エ)の場合は、世界史B・Iに加え、日本史A・地理Aのいずれかを選択する。  
 ・地歴(ア)の場合は、2年次に選択したB科目と同じB・II科目を1つ選択する。  
 ・地歴(イ)の場合は、世界史B・IIに加え、2年次に選択したB科目と同じB・II科目を1つ選択する。

平成31年度入学生〔33期生〕 単位制教育課程編成表 その2

岡山県立岡山城東高等学校

年度	2 年 次 選 択 科 目											
	人文社会学系			自然科学系			芸術・体育系			その他		
正式科目名	英語	外国語・英語	国語	英語	数学	物理	化学	生物	音楽	美術	家庭	理科
海外文化体験研修	英語コミュニケーションⅡ	英語コミュニケーションⅡ	英語表現	英語コミュニケーションⅡ	数学Ⅱ	数学Ⅱ	物理Ⅱ	生物Ⅱ	音楽Ⅱ	素描Ⅱ	子ども文化	* 環境科学
校内名称	英語精読αβ	異文化理解α	国文法特講αβ	英語精読αβ	数学演習Ⅰαβ	数学演習Ⅰαβ	物理Ⅰαβ	生物Ⅰαβ	音楽Ⅰαβ	素描Ⅰαβ	子ども文化	* 環境科学
履修単位数	4	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	2
選択単位・学類	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(理)	2	2

年度	3 年 次 選 択 科 目											
	人文社会学系			自然科学系			芸術・体育系			その他		
正式科目名	英語	外国語・英語	国語	英語	数学	物理	化学	生物	音楽	美術	家庭	理科
海外文化体験研修	英語コミュニケーションⅢ	英語コミュニケーションⅢ	英語表現	英語コミュニケーションⅢ	数学Ⅲ	物理Ⅲ	化学Ⅲ	生物Ⅲ	音楽Ⅲ	素描Ⅲ	子ども文化	* 環境科学
校内名称	英語精読αβ	異文化理解α	国文法特講αβ	英語精読αβ	数学Ⅲ	物理Ⅲ	化学Ⅲ	生物Ⅲ	音楽Ⅲ	素描Ⅲ	子ども文化	* 環境科学
履修単位数	4	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	2
選択単位・学類	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(理)	2	2

【選択の留意事項】  
 ハツケージの自由選択枠で、進路希望や興味・関心に応じて選択科目から選ぶ。

- \* 印は、学校設定科目を示す。
- 表中の「      」は、1単位の科目を2つまたは3つセットで選択することを意味する。
- 表中の学類欄の( )は、その科目の履修可能な学類を示している。表記がない場合は、すべての学類からの選択が可能である。
- 校内名称にα・βが付いた同一名称の科目は、同一年次で同時に履修することはできない。
- 履修するための要件を規定している科目があるため、授業ガイドの「履修上の留意点」をよく読むこと。
- 「倫理」と「政治・経済」、「子ども文化」と「フードデザイン」
- 時間割の編成上、以下のことを選択要件とする。
  - ① 音楽学類2年次ハツケージ②では、「ピアノⅠ+音楽Ⅰ」を選択しなければならぬ。
  - ② 音楽学類3年次ハツケージⅡでは、「ピアノⅡ+音楽Ⅱ」を選択しなければならぬ。
- 実技系の選択科目は、2～3年次に継続して選択することが望ましいが、進路希望の変更に応じて選択を変えることもできる。

年度	2 年 次 選 択 科 目											
	人文社会学系			自然科学系			芸術・体育系			その他		
正式科目名	英語	外国語・英語	国語	英語	数学	物理	化学	生物	音楽	美術	家庭	理科
海外文化体験研修	英語コミュニケーションⅡ	英語コミュニケーションⅡ	英語表現	英語コミュニケーションⅡ	数学Ⅱ	物理Ⅱ	化学Ⅱ	生物Ⅱ	音楽Ⅱ	素描Ⅱ	子ども文化	* 環境科学
校内名称	英語精読αβ	異文化理解α	国文法特講αβ	英語精読αβ	数学Ⅱ	物理Ⅱ	化学Ⅱ	生物Ⅱ	音楽Ⅱ	素描Ⅱ	子ども文化	* 環境科学
履修単位数	4	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	2
選択単位・学類	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(普)	(人)(国)(理)	2	2

# R1 学校自己評価アンケートまとめ

評価は「5… そう思う、4…どちらかと言えそう思う、3…どちらとも言えない、よくわからない、2…どちらかといえばそう思わない、1…そう思わない」の5段階評価。

⑧については、入学前に抱いていたイメージよりも、5…良い、4…やや良い、3…イメージ通り、2…やや悪い、1…悪い(保護者・教職員：と感じていると思う。)

	生徒										保護者										教員						
	平均値	H30 平均	H29 平均	平均値					内訳					平均値	H30 平均	H29 平均	内訳										
				内訳					平均値	H30 平均	H29 平均	内訳															
				1年	2年	3年	5	4				3	2				1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
質問項目(生徒用)																											
1	4.0	4.0	4.0	4.1	4.0	3.9	287	477	135	54	18	4.1	4.1	4.2	217	362	99	5	6	4.2	4.2	4.0	20	48	5	0	0
2	3.9	3.8	3.9	4.0	3.8	3.7	253	423	214	60	18	4.0	4.0	4.0	192	353	132	6	6	4.1	4.0	3.9	19	42	10	2	0
3	4.2	4.1	4.2	4.2	4.3	4.1	380	429	129	22	9	4.1	4.1	4.1	195	364	116	10	3	4.0	4.2	4.2	19	38	14	1	1
4	4.0	4.0	4.0	4.1	4.0	3.8	315	404	190	43	17	4.0	4.0	4.0	188	340	137	23	1	4.0	4.0	4.0	18	40	15	0	0
5	4.7	4.5	4.6	4.7	4.7	4.6	704	216	41	4	4	4.7	4.6	4.6	488	181	17	1	2	4.3	4.2	4.3	33	33	6	1	0
6	3.8	3.8	3.8	3.8	3.9	3.7	252	392	238	70	18	4.1	3.9	3.9	225	315	136	8	3	4.0	3.8	3.7	18	36	17	2	0
7	4.4	4.3	4.4	4.5	4.5	4.3	541	329	83	11	6	4.4	4.4	4.5	365	261	54	6	3	4.3	4.3	4.3	31	37	4	1	0
8	3.2	3.1	3.3	3.1	3.2	3.1	124	281	284	179	101	3.7	3.7	3.6	135	283	191	56	24	3.2	3.0	2.9	8	27	20	11	7
9	4.4	4.3	4.4	4.5	4.4	4.4	535	339	74	17	5	4.6	4.6	4.6	461	191	31	4	2	4.3	4.2	4.3	28	37	7	1	0
10	3.5	3.5	3.5	3.7	3.5	3.4	167	355	309	106	33	4.0	4.0	3.8	200	326	126	28	8	3.1	3.0	3.1	4	23	26	16	4
11	3.1	2.8	3.0	3.4	3.0	2.9	97	217	409	189	58	3.8	3.7	3.6	128	328	207	17	7	3.0	2.9	2.8	0	18	38	13	3
12	3.8	3.7	3.7	4.0	3.7	3.6	220	398	258	81	13	3.9	3.7	3.7	139	333	199	12	4	4.0	3.8	3.6	20	33	17	3	0
13	4.0	4.0	3.9	4.1	4.1	3.9	314	420	190	36	9	4.0	4.0	3.9	173	336	162	12	4	4.0	4.0	3.7	20	36	16	1	0
14	4.0	4.0	4.1	4.2	4.0	3.9	330	418	161	46	13	4.2	4.2	4.3	245	352	84	4	4	4.1	4.1	4.0	21	37	13	2	0
15	3.9	3.8	3.8	4.0	3.9	3.9	296	390	197	65	22	3.8	3.8	3.7	150	317	183	26	13	4.1	3.8	3.9	22	38	9	3	1
16	4.1	4.0	4.0	4.2	4.2	4.0	372	379	181	27	10	4.1	4.0	4.0	204	335	138	7	3	4.0	4.1	4.0	16	40	14	1	1
17	3.8	3.7	3.7	3.9	3.8	3.8	247	406	235	64	12	3.8	3.6	3.6	112	348	214	9	3	4.2	3.9	3.9	23	36	12	0	0
18	3.3	3.1	3.3	3.4	3.2	3.4	153	244	349	192	29	3.6	3.5	3.7	156	153	307	60	9	3.1	3.2	3.3	7	10	39	13	1
19	4.2	4.1	4.1	4.3	4.3	4.1	430	364	138	22	12	4.2	4.2	4.2	271	322	82	8	4	3.8	3.8	3.8	11	40	17	5	0
20	4.3	4.2	4.3	4.3	4.4	4.3	512	303	118	22	11	4.4	4.4	4.5	403	191	79	7	4	4.0	4.0	3.9	20	35	16	1	1

令和元年度

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」

研究開発実施報告書・第1年次

発行日 令和2年3月

発行者 岡山県立岡山城東高等学校

校長 前川 隆弘

所在地 〒703-8222

岡山県岡山市中区下110

電話 086-279-2005 F A X 086-279-9913

印刷所 旭総合印刷株式会社

